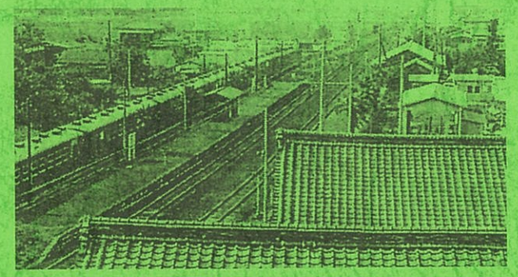
北伊予の伝承

第14集

松前町東公民館



国鉄北伊予駅構内（昭和50年代前半）

秋祭り －幟と神輿とご神燈－

Ⅰ　座談会「戦後七〇年 北伊予のくらしを辿る－その二－」

先の忌まわしい戦争が終結してはや七〇余年の歳月が流れた。その間、目まぐるしく世相は変化し現在に至っている。この度『北伊予の伝承 第一四集』では、戦後七〇年北伊予のくらしを辿る－その二－として座談会を行い、それをまとめたものである。

そのころ、マイカー以前の主な交通手段はSLの列車とバスであった。毎朝、国鉄北伊予駅に走り込み、満員列車のデッキにぶら下がり、石炭ガラをまともに受けて通学や通勤した思い出、ガタガタ道をバスに揺られ乗り物酔いしたこと、古い中川原橋はバスと車が離合できず橋の手前で待っていたことなど、現在では考えられない懐かしい思い出が話された。

時は流れ、戦後の混乱を知らない世代が増え、物溢れの今こそ、真の豊かさとは何かを問う時が来ている。

Ⅱ　季節を彩る北伊予の祭礼－まつり－

「村の鎮守の神さまの今日は楽しいお祭り日……」と童謡にあるように、鎮守の神さまは、畏敬の念と幼き頃の郷愁を誘う懐かしくも神聖な場所である。その氏神さまで春夏秋に行われる祭りをテーマとして、季節を彩る北伊予の祭礼－まつり－としてまとめた。

まだ肌寒く、裸になり褌を締めるのが恥ずかしかった春祭りの相撲大会や、老若男女の演芸大会や屋台で賑わう真夏の夜の輪越、裸電球と烏賊焼きの焦げた匂い、はしゃぐ子どもの声が脳裏に浮かぶ。また、五穀豊穣に感謝し盛大に行われる秋祭り。黄金色に輝き頭を垂れる稲穂、激しく舞う獅子や太鼓囃子の響き、神輿をかく威勢のいい掛け声など、まさに地域を挙げての祭りである。

祭りは神と氏子がともに喜び合う地域最大の年中行事であり、今後も絶やすことなく継続発展するよう努めたいものである。

発刊にあたって

『北伊予の伝承 第一四集』をお届けします。

昭和六三年に創刊された『北伊予の伝承』が、三〇年を経て今回最終集の発刊となりました。今までのどの集も、北伊予に残る有形無形の様々な伝承を、今後に伝え残していかなければならないという編集委員の熱い想いで綴られてきました。

今回は、「Ⅰ 戦後七〇年北伊予のくらしを辿る－その二－」昭和三〇年代から平成初期までのくらしとして、各地区から選出された昭和一〇～三〇年代生まれの方々による座談会の話をまとめました。また、古くから先人より受け継がれ、今もなお北伊予各地で行われている「Ⅱ 季節を彩る祭礼－まつり－」をテーマに、地区から推薦された編集委員を中心に、地区ごとに提供していただいた資料や地区の方々から聞き書きしたことなどをもとに、その移り変わりをまとめました。

終わりに、本誌第一四集の発刊にあたり、座談会にご出席いただき大変貴重な体験をお話しいただきました皆様、聞き取りや資料提供に献身的なご協力をいただいた皆様、ならびに編集にご尽力を賜りました編集委員の皆様に心から厚く御礼申し上げます。

本誌が皆様の郷土理解や古里の伝統文化継承にお役に立てれば幸いに存じます。

平成三〇年三月

松前町東公民館長　北野 美由季

目　次

Ⅰ　座談会
戦後七〇年　北伊予のくらしを辿る
―その二―
―昭和三〇年代から平成初期までのくらし―

一　ひたすら駆けた時代から
低成長期までのくらし……1

二　昭和六〇年代のバブル期から
平成一〇年までのバブル崩壊後のくらし…19

Ⅱ　季節を彩る北伊予の祭礼　―まつり―

松前町行政区画の変遷と神社の祭礼について…23
一　徳丸……25
二　中川原……29
三　出作……33
四　神崎……37
五　鶴吉……41
六　横田……45
七　大溝……49
八　永田……53
九　東古泉……57

○記憶を記録に
―『北伊予の伝承』三〇年の軌跡―……61
○『北伊予の伝承』歴代編集委員……65
○『北伊予の伝承　第一四集』編集委員……68

I　座談会

戦後七〇年 北伊予のくらしを辿る －その二－

－昭和三〇年代から平成初期までのくらし－

今年は戦後七二年、終戦後の記憶も薄らいでまいりましたが、記憶を記録し後世に伝えていかなければなりません。

この度、「戦後七〇年 北伊予のくらしを辿る－その二－」として、昭和三〇年代から平成初期までのくらしについて、さる七月二三日、各地区から選出されました一四名の皆さんにお集まりいただき東公民館で座談会を開催いたしました。今回は平成二八年三月発行しました『北伊予の伝承 第一三集』明日への希望を抱いた昭和二〇年代の続編です。これからの内容は座談会でのお話をまとめたものです。

出席者の皆さん（敬称略）

徳丸	八束 直司	東古泉	稲垣 貢
中川原	加藤 典子	徳丸	渡部喜代隆
神崎	小田原延男	神崎	鎌倉 和子
大溝	栗原 和裕	鶴吉	村上紀美子
永田	郷田 淳子	中川原	三好 悦男
出作	三谷 純子	出作	神野 英昭
鶴吉	大政 直	横田	巻幡美恵子

司会　高石勤・深沼静良

今回の内容は、昭和三〇年頃から五〇年代にかけて、ひたすら駆けた時代から低成長期までのくらしと、昭和六〇年代のバブル期から平成一〇年までのバブル崩壊後のくらしです。

一　ひたすら駆けた時代から低成長期までのくらし

この時代は、昭和三〇年頃から四〇年代中頃の戦後日本の奇跡と言われた高度経済成長期にあたる「戦後の混乱がようやく落ち着き、ひたすら駆けた時代」と、昭和四〇年代後半から五〇年代にかけて右肩上がりの経済成長とオイルショック（石油危機）に見られた成長神話の陰りの「経済成長が急激に進み、右手に繁栄、左手に公害の頃」の時代についてお聞きします。

写真1　座談会風景 －出席された皆さんと編集委員－

（一）　自己紹介と若い頃の思い出

司会　着席順に自己紹介と後に続く内容と関連します若い頃の思い出、現役のときの仕事や現在のくらしなどについてお話しください。それでは、まず昭和一〇年代生まれの方からお願いします。

稲垣　東古泉生まれ東古泉育ちで、生粋の東古泉っ子、北伊予っ子の稲垣貢と言います。生まれは昭和一三(一九三八)年三月一日、七九歳と五か月です。大手繊維会社に入社し電気設備の設計、施工、メンテナンス等の業務に携わり四四年間勤めました。

昭和三〇(一九五五)年から四〇年でのことで記憶に残っていることは、三〇年代前半は、まだ社会・経済情勢、ともに戦後という面影が多少残っていたと思います。後半になってようやく徐々に払拭されていったような気がします。

一方、プライベートの面では、当時としては破格のベースアップがありました。また、その後私は対象外でしたが、不況による一時帰休制度、賃金の一部カットと三か月間の自宅待機があり、その間対象になった家族は大変苦労したと思います。

渡部　昭和一四年、私も北伊予の徳丸に生まれ育ちました渡部喜代隆です。子どもの頃は農作業を手伝っていました。

教員になって定年までいろいろな所を回って勤めさせてもらいました。初任地は重信中でしたが、次は中島の二神島でした。不便でしたが、のんびりと田舎の生活を満喫しました。その間は家業を手伝うことはできませんでした。そのため地域の細かいことは分からず、退職してから農業を始めるにあたっては不安がありました。その中で地域のいろんな役を務めさせてもらって勉強をしながらぼつぼつやってきました。

鎌倉　神崎に生まれてずっと住んでいます。旧姓小池、鎌倉和子です。昭和一四年二月の二七日生まれです。もう年が明けましたら七九歳になります。

私は昭和四二年から平成一一年三月まで、管理栄養士として学校給食に携わりました。その三三、四年間の中で、三年間だけ港南中学校へ転勤いたしました。それから帰ってきてからずうっと松前で三〇年以上お世話になりました。いろんなところで、いろいろなことをして過ごしてまいりました。今日は若い人もお越しですので、若い人のいろんなお話を聞いてパワーをいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

村上　私は鶴吉の村上紀美子です。昭和一五(一九四〇)年一一月一一日生まれです。

私は旧の松前町生まれです。中学校、高校を終えてから役場に勤めました。結婚前に勤めている間は、今思い出しても幸せな時代でした。町内の小学校三校にプールができたときは、竣工式に受付として参加することができました。岡田の流宮(稲荷神社)の神主さんが昔の泳法で泳いでくれたのを覚えています。それとか、教育の町宣言もしましたですね。そして昭和四一年に結婚してから、はじめはそんなに農業の仕事もしなかったんですが、教えてもらいながらやりました。娘夫婦と孫の六人家族です。

三好　中川原の三好悦男です。私は昭和一六年九月二日生まれで、もうすぐ七六歳になります。

人生を振り返ってみますと、決定的なことがございました。高校三年の春、昭和三四年の四月なんですが、家業は父が製材業をしておりました。昔は製材をしておりますと必ず山の方へ木材を積みに行きました。それで久万に行く途中、三坂峠でトラックが転落しまし

て、父は一命をとりとめましたが、脊髄損傷で半身不随になりました。そのようなことがございまして、私はどうしても家業を継がんといかんということになりました。その頃は、皆さんもご存知のとおり木材関係は戦後好景気でございまして、ここらの土地よりは久万の植林した土地の方が高いというようなことでございました。おかげさまで順調にいったと思います。

そんなわけで、早くから地域のことをお手伝いしました。昭和三五年に高校を卒業しましてから消防団にも入りました。そして、製材は平成の一三(二〇〇一)年頃、不況でどうにもならん頃に辞めました。いろんなお世話をさしていただいた関係で町議にも出さしてもらいました。平成七年から三期、一九年まで住田町長、白石町長さんのもとでさしてもらいました。その当時松前町はいろんな発展をいたしましたが、いい時代に生まれたなあと今は思っています。

司会　**ありがとうございました。続いて昭和二〇年代生まれの方にまいります。まず神野さんお願いします。**

神野　出作の神野英昭です。生まれは昭和二〇(一九四五)年八月一三日生まれでしたので、終戦前後のあわただしい中でさぞかし大変だったろうなあと思います。まもなく誕生日がくれば七二歳ということになります。

私も皆さんと同じで、北伊予小・中学校を出て松山の工業高校へ行きました。昭和三九年に卒業し、東京の某電機メーカーに就職し品川に赴任しました。これ以降数年間は東京を中心とした青春時代でした。一、三年後になりますと、会社の先輩と日本全国出張する毎日でした。年間で三百日ぐらい走り回りました。昭和四五年に勤務先の工場が閉鎖になり静岡、岡山、大分など転々として、昭和五三年に郷里の出作に帰りました。それからも、同じ業務で日本中を回って、海外にも何度も行きました。出作に住居はあったんですが、在宅の時間はほとんどないというような状況でした。

巻幡　横田から来ました巻幡美恵子です。生まれは昭和二六(一九五一)年で、ちょうど六六歳になったところでございます。

私たちの時代は、二〇代前半で結婚して子どもを産むという人が結構多かったので、私も早くしようと思ってさっさと結婚しました。結婚した当初は松山にいて、子どもが五歳になったころに横田に帰りまして今に至っております。今日は座談会に呼んでいただいてとても光栄に思っております。よろしくお願いします。

八束　徳丸に住んどります八束直司です。昭和二七年五月六日生まれで六五歳です。私の父は農業をしておりましたので、小さいときの思い出としては農業の手伝いです。リヤカー押して帰りもって、なんでこんなしんどいことせないかんのかと。稲刈りするのも他所から人にいっぱい来ていただきまして、泊まり込んで稲刈りしてもらいました。田植えもそうでした。中学校、高校は朝も早うから夜遅うまでずっと部活動しておりましたので、自分が住んでいる所の大きい行事は覚えておりますが、そう記憶にありません。男兄弟がおらなんだから、わしが農業をせないかんのかいなと思っておったんですが、親父に「自分がしたいことしたらええんじゃ」と言うてもらいましたので、それで教員になりました。教員生活で一番得たことは、いろんな人との出会いです。子どもだけじゃない、その親も今でも

お付き合いをしている人がいて、教えてもろたり相談にのったり助けてもろたりしています。今は親父の後を継いで農業をしております。今の農業は全部機械がしてくれて楽です。よろしくお願いします。

加藤　中川原の加藤典子です。昭和二九年一二月生まれです。中川原生まれですけれども、夫が警察に行っておりましたので県下を転勤しておりました。私も警察に就職しまして、そんな関係で、子どもが中学生ぐらいまではいろんなところに一緒に異動したので、南予の方から東予の方まで、いろんなことに出会うことができて楽しかった思い出があります。中川原に帰ってきてからは、子どもが三人いますのでＰＴＡに参加しまして活動しましたが、あの頃の文化祭は楽しかったですねえ。今は制限されて作るものもなくなっていますが、私が一番覚えているのは、たこ焼きを作って子どもたちもとても楽しんでいたことです。今は主人も定年しまして農業をやっております。今日はよろしくお願いします。

司会　**ありがとうございました。ただいまから昭和三〇年代生まれの方に移ります。それでは小田原さんお願いします。**

小田原　神崎の小田原延男です。昭和三〇（一九五五）年の三月五日生まれで六二歳になりました。私は神崎に生まれたけど、結婚してから家では「家には寝に帰るだけじゃな」と言われとります。というのが、ＪＡで営農指導員をしとりましたので、仕事柄朝が早い。それから夜は飲み会が多い。一一月、一二月ですと毎日飲み会で夜遅くもんてくるというような生活をしておりました。ＪＡに入ったのは昭和五〇年三月五日、温泉青果、今のＪＡえひめ中央に入組しました。そして三七年間勤め、一人息子が大学卒業した年に辞めました。五七歳でした。それから、皆様もご存知の伊予市にある「いよっこら」の直売所に四年間お世話になって昨年退社しまして農業をしております。

松山市を中心に管内全部回らせていただいて、まあ、人間関係とか勉強はしたんですけど、それが財産かなあと思います。これからは地元のために、微力ながらお手伝いできればと思って一生懸命やっとります。よろしくお願いします。

栗原　大溝の栗原和裕です。昭和三〇年一月二六日生まれの六二歳です。高校を出て二〇年ほど就職しとったんですが、四〇歳ぐらいから専業農家になりました。米は作っていますが、鉢花の栽培をしております。従来は年中市場に出しよったんですが。産直市が平成一七（二〇〇五）年五月に「いよっこら」、続いて「まさき村」など次々にできて、流通の変化がすごく激しい。直売所は値段が決められるし、お客様の好みがすごくよく分かる。状態のよいのでないと買ってもらえないから気を遣います。私は生まれてからずっと大溝から出たことがない。しかし、農業するには、外を見ないといかんです。それで全国で開かれる「全国農業担い手サミット」に行きます。できるだけ外に出て勉強をしながら農業を続けたいと思います。

それから、青春時代の最も印象に残っている思い出ですが、中学一年の時、お花見で小松町（現西条市）のりんりんパークへ自転車で行きました。帰りは自転車置いて帰りたいくらいでしたけど。まあ、なんとか頑張って帰りました。この時の達成感は私の人生ですごく勉強になったと思うんですよね。今日はひとつよろしくお願いいたします。

郷田　永田の郷田淳子です。昭和三〇年九月一日生まれで、

まだ六一歳です。ずっと小学校で教員をしておりました。現在は家で母の家庭菜園を手伝っています。

青年時代最も印象に残っていることを私もいろいろ考えてみたんですが、私は松山市の小野で生まれ育ちました。昭和四八年に、父の里が永田だったので家を建てて引っ越しました。その家の横の川にシジミがおりました。それを採って食べたり、夏には蛍がたくさん飛んでおり、蛍狩りを楽しんだりしました。夜は星がきれいで、夏には天の川がすっごくきれいに見えて、夏の大三角形(白鳥座のデネブ、わし座のアルタイル、こと座のベガを結んでできる大三角形のこと)とか白鳥座とか肉眼でよく見え、こんなにきれいなんだと思ったことが印象深く残っています。残念ながら今は見えませんね。よろしくお願いします。

三谷　出作の三谷純子です。昭和三二年に生まれて、二月に誕生日でしたので満六〇歳になりました。小さいときは父の仕事の関係で大洲と八幡浜で過ごして、小学校から北伊予に帰って、出作で小中高大と過ごしました。その後、私立高校の教員をして、この三月で定年退職をいたしました。現在は同じ高校の非常勤講師をしております。昭和六〇年に結婚しまして三年間松山市に住んだのですけれども、神崎に戻ってきました。そして、二年前に出作の今の家に越してきました。子どもも北伊予小中でしたので、その間は北伊予での生活とかかわっているんですけれども、昼間は松山市内で働いて夜帰ってくるという生活ですので、北伊予の暮らしとのかかわりは薄くなっているかと思います。

平成元(一九八九)年に第二子を出産したんですけれども、平成元年はちょうど三%の消費税が始まった年で、出産にまで消費税をかけられたのを覚えています。少子化の時代なのに、ということで翌年には廃止されたんですけれども、最初の年の者は払いました。何とも言えない思い出となっています。よろしくお願いいたします。

司会　**ありがとうございました。大政さんよろしくお願いします。**

大政　鶴吉の大政直と申します。一九六〇年、昭和三五年生まれ、五七歳です。現在は農業をやっています。高校卒業して大学を出させてもらって主に塾の講師をやっていました。その後、たばこの自動販売機の会社で、タスポを使える新しい自販機を南予、中予あたりに置き換えさせてもらいました。あの中にドコモの携帯電話の端末が入ってるんですね。それで、誰が何時何分に買ったかというのが出るわけなんです。そんなことやってましたけれど、取り付けが終わったら仕事が百分の一ぐらいに減りまして、営業所を閉鎖ということになりました。一応私が責任者ということだったので、まあ、五〇歳前ぐらいでしたが、それから農業に専従しております。

現在松山市農協のブロッコリー部会とイチゴ部会に入ってぼちぼちながら生活しております。農業は天候にかなり左右されるので、去年はもう全部失敗だったかなと思いまが、今年は心を入れて頑張っていきたいなあと思っています。

それと中学時代の印象深いこととしては、ちょうど私が三年生の時に今の新しい校舎が完成しました。そのときの思い出はサッカーのゴールポストを何人かで移動したことです。

（二）　装いについて

司会　**それでは、これから第一部（前半）の話し合いに移ります。**

昭和三〇年頃から昭和五〇年代頃までの生活文化の基本であります衣食住について具体的なお話を伺います。まず最初に「衣、装い」についてお願いします。なお、前回の『北伊予の伝承 第一三集』とのつながりがありますので、昭和二〇年代のお話からお願いします。

鎌倉　私は昭和三二（一九五七）年に高校を卒業した者です。今言われたのよりは少し前、つまり私が小学生時代のこととなりますが、その頃プールはなかったので川で泳ぎよりました。その時シミーズ（女子用のワンピース式の下着）、若い人はそう言っても知らんでしょうけどシミーズを着ていました。水着はなかったんです。中学校の真北の川で泳ぎました。男子は褌みたいなのをしておりました。胸が少し大きくなるころになると濡れたら透きとおって恥ずかしいんで濡れたシミーズを摘まんで体から浮かしたりしていました。

私は農家の生まれなもんで終戦後はモンペですねえ。裕福な家の子はちゃんとズボンとかスカートとかをはかしてもろとったと思うんですが。わが家は農家だったもんですからモンペをほんとによくはいていました。

昭和三〇年より少し前になりますが、高校のときはもう制服があったし、中学校はセーラー服やったです。私は三人姉妹の一番下だったから姉のお下がりばっかりもらって、母があんまり器用じゃなかったから破れかかったのを着ていました。

写真2　モンペをはく女学生
（『北伊予の伝承 第11集』より）

稲垣　昭和三〇年代とは少しずれますが、戦中・戦後の小学生時代のことです。私は八人兄弟で六番目の五男坊なんですが、その一時期において、学生服・普段着を含めて新しいものに袖を通したことが無かったような気がします。兄や近所の先輩のお下がりでずっと小学校時代を送りました。あの時代のことですから品物も豊富ではなく仕方がなかったのかなと思います。今はただ親に感謝しています。

巻幡　昭和三〇年頃だと思うんですが、子どものころお正月前には毎年新宅である私の母や本家の伯母の家など近所中が集まって布団の綿の打ち直しをしました。その際新しい綿の入ったハンテンを作ってくれるんです。それをお正月に下ろして（新しいものを使い始める）着る、それが記憶にあります。今はダウンベストになっていますけど。

（三）　合成繊維の登場

司会　**今の話にもありましたが、この時代は昭和三〇年代から五〇年代にかけての長い期間です。**

それからもう一つ、以前の木綿とか絹などの天然繊維に代わって、ナイロンやポリエステルといった合成繊維が登場してきました。また洗濯機・白黒テレビ・冷蔵庫の三種の神器も出てきましたが、それらの登場で「衣」の生活がどう変わってきたかをお聞きします。

加藤　小学校の時、体操服は普通の木綿だったんですね。昔はブルーマーとかいって木綿です。こけて土がついてしまったらなかなかのかないんですよ。洗濯機も一槽式で横にぐるぐる手で回す絞り機が付いていたんです。ポリエステルは柔

らかいからスーと通るんですけど、木綿や冬のネル(起毛の厚地木綿)とかは、子どもではなかなか回らなくて。回そうとしてもかさばって絞り機の中になかなか入らなくて。よく手伝ったんですけど、しんどかった思い出があります。

八束　この座談会に先立って小さい時の写真を見たんですけど、着ているものは三、四種類。まずデンチ(チャンチャンコ、綿入りの袖なし羽織)、それからだんだん発達してチョッキになって今はベスト。まあそれもあるんですけど今だに私の一番の思い出は、小さい時寝間着をひもでくくって寝たら、朝起きて全部はだけてパッパラパッになっとったという思い出です。先ほど出ましたように私は保健体育の教員をしていました。はいておったのは男子は短パン。昔はほとんど伸び縮みしないものでした。それが今はジャージ言うんですかねえ、体の動く範囲で自由自在に伸び縮みする、体に負荷を与えないような体操服へと変化してきました。そういう進化とともに、いろんな種目で素晴らしい記録が出ると思います。もちろん食べ物によって体格が変わってくる、そしていろんな施設もすばらしいものができて、それを使うことによって鍛え方も変わってくる。やはりそれに応じて体操の服装も変わってきていると思います。農業においてもその時代に応じた服装が出てきたんじゃないかと思います。

郷田　私は三〇年生まれなんですけど三〇年頃は服といったら母がキレ(布)を買ってきて作ってくれたり、近所の方が縫ってくれたりしたものでした。毛糸でも編んでくれて、小さくなったらほどいて作り直してくれたりもしました。よく毛糸をほどく手伝いをしたのを覚えています。小中学生のときはそういう手作りの服を着ていました。四〇年代後半くらい、高校ぐらいからだと思うんですがスーパーができて既製品が出回るようになり、お店に行って服を選んで買えるという楽しみができたような気がします。

成人式は役場で昭和五〇(一九七五)年にしていただきました。その頃は、華美にならないようにということで「着物を着て来ないように」と言われ、服で参加しました。母は振り袖を用意してくれていたものですから、式が終わって午後から着付けと写真撮影に行った思い出があります。

(四)　食について

司会　**次に衣食住の「食」について伺います。冷蔵庫がなかった時の生活、あるいは薪を使った羽釜での炊飯、薪の入手法や薪割りの思い出などについてもお願いします。また魚にくらべあまり食べなかった肉類についてお聞かせください。**

三好　製材をしておった関係から燃料のことをいうと、戦後プロパンガスができるまでは木材を製材した後のコワ板(コッパ、木の切れ端)とオガ屑が燃料として使われていました。神崎にパン屋さんがありましたが、オガ屑を取りに来てそれでパンを焼いていましたし、お風呂屋さんも使っていました。一般の家庭でもご飯を薪で炊いていました。だから木材は捨てるとこがなかったんですね。プロパンガスができる前は全部売れてよかったことを覚えています。

渡部　その当時は薪を割って、薪で

写真3　羽釜(はがま)

写真4　くど(かまど)
(『北伊予の伝承第11集』より)

ご飯を炊いていました。親が忙しいので子どもの私が小さい焚き付けを入れて、だんだん大きい薪に燃やしつけるのが難しかった。昭和三三(一九五八)年に家を新築しましたが、それまでは昔の農家の間取りは、玄関から台所まで通しで土間になっておりました。土間が広くなって、そこにおくど(かまど)さんがあって、その前に座って火の番をするのが私の仕事みたいなものでした。それから農家は籾摺りした後にすくも(籾がら)ができるんですが、「すくもくどを使ってご飯を炊いたら世話ないんじゃ」言うたりして、そんな記憶があります。

鎌倉　昔は薪で生活しておりました。近所の何軒かがいっしょになって「山を買う」(山の立木を買うこと)いうて七折方面(砥部町)に採りに行きよりました。それから採って帰った薪を割って、それでご飯を炊いたりお風呂を沸かしたりしました。それからお風呂が途中で冷めた時は、麦わらを焚いていました。燃料はそんな感じでした。それからご飯は羽釜で炊いて、冬場であればそれをお櫃に入れ替えよりましたが、夏はスエ(腐る)たらいかんのでシタミという竹で編んだカゴがあったんですけど、それに入れて軒先に吊るしたりしていました。

写真5　シタミ(飯かご)
(早瀬武臣氏提供)

村上　松前に住んでいた時は新鮮な魚をふんだんに食べていましたが、結婚して北伊予へ来てからは食生活でも「こんなんありかなぁ」、「あんなんありかなぁ」いう感じでした。北伊予へ来るまでニワトリ(鶏肉)は食べたことなかったんですが、チキンライスなんかも「食べないかん」と思って食べましたですねえ。北伊予はそのかわり新鮮な野菜がいっぱいありましたでしょう。松前に住んでいた時も近所に大きな八百屋さんがあったので恵まれてはいたんですけど。北伊予では主人の母が一生懸命作っていたお野菜はおいしかったですねえ。

　そして今ほんとに思い出すのは、私が北伊予へ来た時に鶴吉の近辺はイチゴを皆さん作っておられたんです。うちは作ってなかったですけど、そしたら皆さんがイチゴを持ってきてくれるんです。それを母はちゃんとこしらえて、大きなどんぶり鉢へいっぱい入れて、あの当時のことですからお砂糖をかけて「お食べ、お食べ」と言って出してくれ有り難かったです。

司会　**食生活の主食は麦ご飯でした。麦ご飯のほか、混ぜ飯、芋飯などの炊き込みご飯などの思い出を生活と結び付けてお話ください。**

渡部　やはり炊き込みご飯。野菜と里芋をいっしょに肉も炊き込んだり、まあ、いろんな炊き込みご飯というのがご馳走でよく食べました。その頃は食べ物いうても、肉は食べさせてもらえたらおいしいご馳走でした。めったに手に入らんから、いわゆるタンパク質がない。そこでシジミはうちの近くにもおって、ジョウレン(手箕)の中へ入れてザッとふるたらいっぱい入っとるんで、それをもって帰ってシジミのおつゆをして食べたりしました。それから各家庭に残飯なんかを餌に「二羽養鶏」とか言って数羽のニワトリを飼っておりました。時々犬が来てそのニワトリを取ったいうこともありましたし、ニワトリがカッカ鳴くんでどしたんじゃろか思うて行ってみたらイタチが鶏小屋に入っとったということもありました。とにかくニワトリを飼いよって小屋へ行ったら卵を二つ産んどった、三つ産んどったなどと。それから私も魚釣りが好きで、徳丸には泉やいろんなとこがあって、そこへ行っ

てはフナ、ナマズ、ハヤを釣ったり、またドジョウもすくいに行ってだいぶ獲れたらどじょう汁をして食べたりすることがご馳走じゃったんです。雨が降ったら田圃の水戸（出口）へシャナをすけて大分獲れたら近所へあげたりしました。それからニワトリもかわいそうなことに卵を産まんようになったら「これもうさばくか」言うて、今考えたら相当残酷なことをしよったもんです。自分の家でさばいて食べた記憶があります。私も実際にそういうことをしました。

鎌倉　麦ご飯は高校時代もずっと食べとったと思います。私はあんまり好きじゃなかったんですけど、麦ご飯をしっかり食べてたから「体によかったんかなぁ」というふうに今感じています。「麦ご飯はもうええからお米のご飯が食べたいなぁ」と思うことが子どもの頃はいっつもありよりました。

渡部　二神島には三年おらしてもらったんですが、まだまだ食べ物がないので毎週帰ってきた時はおかずを作ってもろて、持って行って温めて食べたりしました。

司会　**やはりインスタントラーメンの登場は食の中ではどうしても欠かせない内容かと思います。チキンラーメンが登場したのが昭和三四（一九五九）年、スーパーができてこれがどんどん拡がり、コンビニ一号店が開店したのが平成四（一九九二）年です。**

若い戦後生まれの方にお聞きしたいのですが、インスタントラーメンが登場したとき、どのような感想をもっていましたか。

大政　インスタントラーメンは物心ついたときには随分ありました。私が一二歳の昭和四七年頃にカップヌードルが初めて登場して今までのインスタントラーメンに比べて「こんなにおいしいんか」いう感じで驚きました。

渡部　インスタントラーメンを私が二神島におるときにだいぶん買い込んで持って行ったことを思い出しました。私は住宅でご飯を食べさせてもらいよったんですが自分とこで自炊する人もおりまして「インスタントラーメン持っていったらお湯かけたらせわないんじゃ」いうことで、「ほたら買うていこか」なんか言うたりして、わりあい買い込んで食べたりしよったのが昭和三九年から四〇年頃のことです。

（五）　住まいについて

司会　**それでは衣食住の「住」、住まいにまいります。三世代同居、大家族の住宅から軽便な一戸建住宅に変わってまいります。間取りも来客を意識した造りから、個人や家族を中心とした造りに変わりました。それから農家だったら牛を飼う駄屋があり、もちろん納屋があったわけです。風呂や便所は別棟にもありました。そのあたりのことをお願いします。**

三好　住宅というテーマとはちょっと違う内容になるかもしれないんですが、木材がよかった時は当然和風の日本瓦を葺いた土壁を付けた大工さんが建てる在来工法だったんですね。現在はご承知のようにプレハブ形式の一戸建ての効率のよい家になったんですけど、そこで強調しておきたいのは、今、山の方は大変なんです。ご承知のように戦後天皇陛下をお迎えして植樹祭というのをずうっと毎年やってきたんですねぇ。この地域も昭和四一（一九六六）年に三坂峠の登り口のところ（久谷地区）で植樹祭をしました。そして「木を植え、木を植え」言うて、その時の木が現在は伐採時期になっとるんですねえ。そしたら今建築の質がガラッと変わったもんですから日本の木材の一部は今の日本の建築には適しません。それで今山の方の生産者の方はもう伐採時期に入ったものの、ほとんど収入にならなくなっています。

神野　私の家も農家だったものですから昔は本宅があって長屋があった。昭和三二、三年頃に家を建てました。建築の間住むとこがないんで、もともとあった物置みたいな納屋を少し改築してそこへ入っていました。そのとき五右衛門風呂（かまどの上に直接鉄製の湯釜を据え付けて下で薪を焚く風呂）はそのまま残っていました。また、トイレですが昔ながらの農家なんで、家の中からはもちろんですけど、田んぼへ行って汚れたままで入れるように裏にも戸がありました。昭和三五、六年まで、かまどやおくどさんは新築であってもあったと思います。

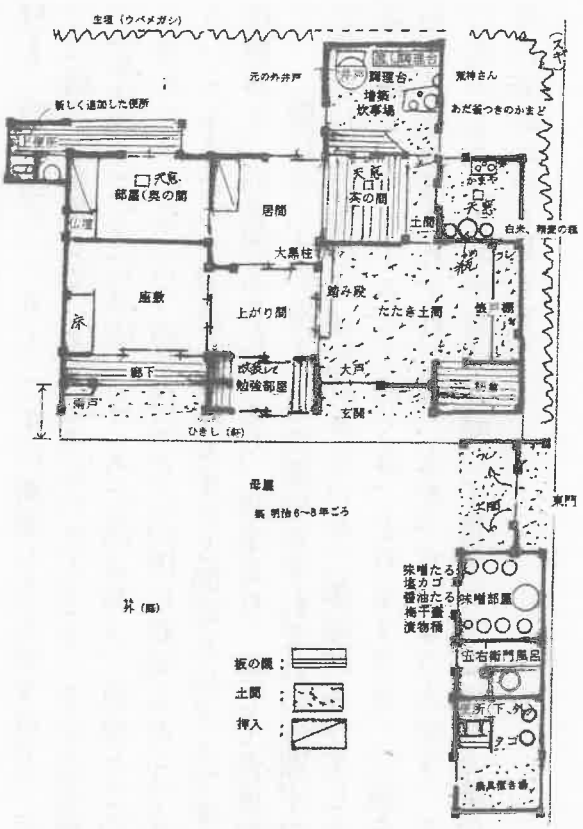


図1　農家の配置図
（『北伊予の伝承第11集』より）

加藤　代々農家なので私が中学頃まで藁家だったんです。私が小学校のころ一度葺き替えたことがあるんです。その際、いろんな人がいっぱい来てくれて、古い麦藁を全部落としてもう一度積み上げて、というのを見たことがあるんです。世界遺産になっているところを見ると、「ああ、昔はうちもあったなあ」なんて思いまして。ほんとに夏が涼しくて「あの頃はほんとに涼しかったなぁ」なんてよく思い出します。今の家は風通しが悪くて。

栗原　今、加藤さんのお話が出ましたけれど、うちも昔は茅葺き屋根でした。座敷とその隣の部屋はかなり広いです。全部をオープンにできて、夏やったらそこへ寝とったら風邪ひくぐらいな感じでした。大きい木があるんで陰になっていましたので、すごく涼しい思いをしました。

鎌倉　藁屋根は神崎には数軒あっただけなんですが、うちもその内の一軒でした。ほんとに最高に涼しかった。「うちは貧乏だから藁屋根なんかな」なんて思ったりもしていましたけど。夏は蚊帳を吊っていますよね。ヘビが蚊帳の上に落ちてきたなどという経験もあります。夜寝るどころじゃないと思いよったことがありました。ほんとに皆さん藁屋根で生まれた人は涼しかったねぇ。

写真6　藁屋根の農家（東温市）

三谷　私の実家は出作ですけれども、昭和の初めに建てた家で、現在一部リフォームして姉夫婦が住んでおります。小学校のころには父の一番下の叔父と叔母もいましたので九人家族でした。その後叔父、叔母が結婚して七人になり、祖父母、父が亡くなって、最後は母が一人で住んでおりました。母が亡くなって六年になりますが、その時までまだ土間の生活でしたし、トイレも汲み取り式でした。今ではいろんなことが便利になっているけど、母は昔ながらの生活をしながらそれを生涯守っていったんだなあ、ということを今思っておりま

す。

八束　葬儀でも昔は家でやっとったと思うんです。組内の集会とかもやっておって、いまだにうちも部屋を仕切る襖があるんですけど。今は家族のプライバシーということを言いだして、それに応じた建物ができておるんじゃないかと思います。そんな変化も感じます。

村上　昭和四八(一九七三)年に新築したんですけど、それまでは鶴吉の密集しているところにいたんです。そしたら母親が「家を建てるときには広いところに出よねぇ。自分とこの田があるんじゃから」言うので自分とこの田に新築したんです。そういうふうな中で設計したんですけど間取りはダメですねぇ。座敷あり、応接間あり仏間あり、寝室あり、そして台所があって、二階には二人いる子どもの部屋がそれぞれに一間ずつあって、そして両親にははなれみたいな二部屋がありました。今は台所もリフォームして広くなっとりますけど、ご飯を食べたら子どもはそれぞれ二階へ上がってしまうんです。やっぱり広々したところで皆で会話して食事してという今風の間取りの方がいいと思います。

(六)　ウナギ、ドジョウ、シジミやホタル

司会　**もっともっと伺いたい内容ではありますが、この衣食住の「住まい」の最後にもう一点だけお願いします。特に北伊予地区は非常に地下水が豊富です。水に関することをお聞きしたいと思います。**

小田原　私は昭和三〇(一九五五)年に生を受けました。小学校、中学校の時には、神崎のいたるところに泉がありました。そこで泳ぎよったんです。当然小学校にはプールもできとったんで、そこで泳ぐこともできたんですけど、どっちかいうと泉から湧き出る水ですから冷たいしきれいし。川いうと特に川(井手)掃除した後はヨカワいうて、空き缶にぼろ布を詰めて重油を入れて火をつけて、ウナギとかナマズをいっぱい獲りよったんです。その獲れた魚をポンプアップした水がようけ流れる前の川で、リンゴ箱の板をちょっとはずして竹でシャナみたいにしてイケスを造って一時活かしていました。ウナギとかドジョウとかをたくさん活かしとりました。農協の近くにあったO食堂のおばあちゃんが電話してきて「小田原君、ドジョウを一升(一・八リットル)ほどとウナギを一〇本ほど持っておいで、買ったげるけん」言うんで。そんなんが楽しみで小学校頃はいつも伊予神社でミミズとって竹筒(モンドロ)をもって中川原へ行きよりました。今も水は大切にしておりますし、昔からある井戸水を使っております。北伊予地区、特に神崎、徳丸、出作それに中川原も泉がありますが、やはり泉いうのか地下水は大事ですね。

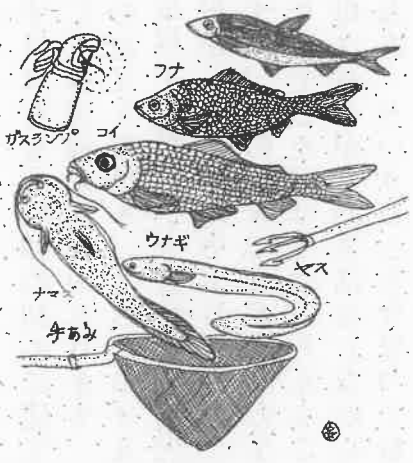


図2　ヨカワ(夜川)
(『北伊予の伝承第8集』より)

鎌倉　同じ水でも少し内容は違いますが、永年学校給食に携わっていたものですから一言だけ言っときます。平成六年か七年だったと思いますが、それまで経験したことのない大渇水に見舞われて大変な水不足になったことがありました。松山では断水になって学校給食もできんでしたから、パンと牛乳などで水を使わない献立にしていました。松前町は節水しながらも、それまで通りの献立で学校給食ができました、それが自慢な松前町だと思います。特に北伊予、岡田あたりは

飲料水が豊富なことは大きな財産です。でも、今水があるからといっても無限にあるものでもないですから大事にしていかないかんと思っています。

司会　**それでは今日話に出てきましたドジョウ、ウナギあるいはシジミ、さらにホタルなどが今はもうほとんど見られなくなりました。その原因は農薬や井手の三面コンクリート化などに関係すると思われます。いつ頃から消えていったのでしょうか？その辺のいきさつをお伺いしたいのですが。**

栗原　私が小学生の頃つまり昭和四〇年代は田植えしたり代掻(しろか)きしたりするときにフナがいっぱい田にいる状況でした。メダカもいました。今は「ほんとにおるんかなぁ」と言う状況になっとると思います。それからシジミの話が出ておりましたが、シジミも三面コンクリート張りになって全然いなくなりました。ところが今は砂がだんだん溜(た)まってきていて、そこにはシジミが住んでいます。

司会　**先ほど小田原さんからドジョウやウナギを獲ってという話がありましたが、私も子どもの頃経験があります。これはやはり懐かしい思い出ですよねぇ。是非子どもたちにも伝えておきたいと思いますが。**

写真7　改修前の川（福徳泉公園内）

写真8　改修後の水路（神崎）

渡部　モジ（モンドリともいう。ウナギを獲る細長い竹で編んだかご）言うんですが、先ほど言いよったようにミミズを採ってきてエサにして川へすけていました。時には重信川まで行ってすけてみたりしました。朝揚げに行くんが楽しみで、おらなんだらガッカリするんじゃけど、モジの中に多い時にはウナギが五、六本入っとったということもありました。現在、徳丸地区は耕地整理で田圃(たんぼ)を整理してコンクリートの川にしてしもたんで、いわゆる魚のすみかがない、砂も溜まらないので減りました。ホタルも私が子どもの頃には飛んでおった。学校から帰りに石垣の中へ手を突っ込んでカニをいっぱい獲って帰ったりしたことも覚えておりまさい。耕地整理してそういう魚の棲家(すみか)がなくなったということと、地下水が下がって冬場は井手(いで)（小川）には全然水が流れよらんです。

（七）　牛について

司会　**続いて農業に関連して牛について伺います。北伊予の場合、どの農家でも牛を飼っておりました。耕作はいつごろから耕耘機に変わっていったのでしょうか。また田植えとか稲刈りなど農作業もグループで、あるいは家族で、親戚で集まって行っていたのが機械化が進んだためなくなりました。夏場農閑期の牛は、山間部に預ける「預け牛」（あげ牛）の習慣がありました。これについてもお聞かせください。**

三好　私のところは製材業を営んでいましたのでトラックがありました。当時、地域の牛を農繁期が済みましたら中山とか面河の方へ預けるんで運んでおりました。それともう一つは地域で結婚がございましたら、今は結婚されましたら家具なんかは、当然家具店が運びますが、当時は嫁入り道具は家

写真9　手植えの田植え（模型）

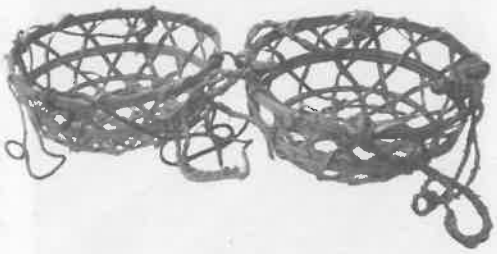


写真10　苗かご（籠）
（早瀬武臣氏提供）

から運んでおりましたので、私のとこのトラックで嫁入り道具を運んだことがございます。

加藤　私は二九（一九五四）年生まれなんですけども、ほんとに幼い時には牛がいました。牛小屋もあってほんとに臭かった思い出がかすかにあります。でも小学校の時（昭和三〇年代半ば）にはもういなかったです。

小学校の時は農繁休業がありました。子どもの頃の記憶なのではっきりしませんが一週間位だったのでしょうか。毎日毎日、皆で親戚とか組内の家とかの田植えをしていました。田植えは手植えですから苗を植えては後ろへ下がっていくのですが、後ろを振り返ると先はずいぶんと遠いんですよね、何回も何回も、まだかまだかと後ろを振り返って見ていました。当時は今の育苗箱と違って苗代（稲の種を蒔いて田植えまでの間、苗を育てる圃場）で作った苗を引いて束にして、それを畦や道から放ってくれるんですけど、泥が散ったりしていました。お昼の食事なんかは皆が持ち寄って食べた記憶があります。ほんとに子どもの頃は農作業をよくしました。

三谷　牛の件ですけど、私の実家でも牛を飼っていまして、うちは年中、家で飼っていた記憶があります。昭和の初め頃の家で、牛がいたところは物置になっていますが残っています。いつ頃牛がいなくなったかはっきり覚えていないのですが、小学校三年生頃（昭和四〇年頃）の宿題に、耕耘機を描いてきなさいというのがありました。耕耘機をどうやって描いたらいいのか分からないので、当時一緒に住んでいた叔父に手伝ってもらって描いた記憶がありますので、昭和四〇年頃には牛はいなかったのかなと思います。

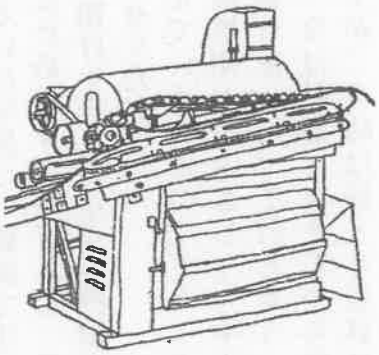


図3　脱穀機

渡部　私の牛の思い出としては、当時親父が鋤で田んぼを鋤いていましたので「小学校の高学年になったら田んぼに行って牛の鼻やりをするんぞ」と言われていました。牛にヘセヘセと綱を引っぱったら右に向いて行く、ハセハセと綱で首筋や腹を

写真11　牛による耕作

写真12　夏場の預け牛（佐礼谷）
（『村上節太郎がとらえた昭和愛媛』から）

叩いたら左へ行く、前に行くときや遅いときはホイホイと言って尻を叩き、ドードーと言いながら足を止めると停まりました。耕耘機ができて機械で田んぼを鋤くようになって、牛の労力が要らんようになってから牛がいなくなりました。牛を飼っていた時の牛の糞で「駄の肥」を作るんですが、「駄の肥」を田畑に入れたら作物がよくできるのでリヤカーで田んぼに運んで振り撒き、鋤き込んで野菜を作った思い出があります。

牛は夏場になったら要らんので犬寄（佐礼谷、現伊予市）へ預け、涼しくなって牛が要るようになったら連れて帰ってきました。牛が帰ってくると懐かしくて「牛が肥えてもんたのう」とか言っていました。牛を飼っている時は、犬を散歩させるように牛を散歩させておりました。私は小さかったから恐ろしいのでようしませんでしたが、三、四歳上の人は草を食べさすとよい牛になるんじゃと言って牛を連れ出して道の草を食べさせていました。牛も喜んで草を食べていました。

鎌倉　地域や家によって違うんじゃないですかね。「預け牛」のこと初めて聞きました。私のところでは牛は年中家にいました。先ほどの「駄の肥」を作っていました。当時は今のようなナイロンの手袋がなかったので「駄の肥」を軍手をして扱っていましたが、軍手に滲みてきて汚く臭かった。そしたら父親が「手がつるつるしてきれいになる」と言っていました。牛の餌にする藁を切る鋏のような藁切と敷き藁に使う藁を切るゼツメという器具がありました。

神崎には博労（馬喰）さんがいて「牛太ったかな、牛を売らんかな」と声を掛けて牛を買いに来ていました。牛を売るとお金が入るので、お陰で大学へも行くことができました。

写真13　藁切り用のゼツメ
（早瀬武臣氏提供）

三好　牛の件でお話しします。私が中学校の頃は学校の東側（現在の小学校の正門付近）に農舎と家畜小屋がありまして牛を飼っていました。夏休みには「干し草を作って持ってこい」と言うので持って行って、牛を飼っていた経験があります。生徒たちが当番で世話をしていました。

（八）紙芝居やアイスキャンデー

司会　**次に、懐かしい紙芝居や駄菓子屋、アイスキャンデー売りなどの思い出について。さらに昭和三九（一九六四）年の東京オリンピックを境にテレビが普及し、新幹線や高速道路等のインフラが整備され、大変革の時代が来るわけです。皆さんの体験や思い出をお聞かせください。**

栗原　駄菓子屋さんというのかどうかわかりませんが、永田のバス停のところに店があったんですけど、そこで「松の露」一つが一円もしなかった五〇銭ぐらいだったでしょうか。パットライスとか糸を引っ張って当たりだったら大きいの、はずれだったら小さいのがもらえるのがありました。それとアイスキャンデーについては、昼過ぎに松前方面から自転車に旗を立て鐘を鳴らしながら売りに来ていました。暑い時期でしたのでいつも買いに行っていた記憶があります。

郷田　永田のバス停に店があったのを思い出しました。おば

写真14　バス停があった永田の交差点
（平成25年撮影）

あちゃんの家に来て、あそこのバス停から帰っていたんですが、あそこのお店に膨らますと長くなる風船があって、それを買うのが楽しみでした。

神野　昭和三三、四年頃だったと思うんですけど、出作地区に唯一テレビの購入者が出ました。その当時ですね、相撲とかプロレスとか野球とかの番組があると友達二、四人とお邪魔して観させてもらっていました。相撲は昼間なんですけど、プロレスは夜じゃなかったかなと思うんですけど、先方さんもそれほど嫌がることもなく観させてくれました。それともう一つ紙芝居なんかは昭和三二、三年の子どもの頃、出作のお寺なんかでやっていまして、買うのは大体水飴のようなものが多かったですね。割りばしでこねると白くなった水飴を食べた記憶がありますが値段は覚えていません。

三好　テレビの関係で強烈に私の記憶に残っているのは、人工衛星が打ち上げられ、日米のテレビ生中継というものがございました。それを観ようと朝早くテレビを点けたところが臨時ニュースでアメリカのケネディー大統領が暗殺されたのを観ました。この年代の方はご記憶にありましょうが、これは衝撃的なことでございました。

巻幡　昭和三〇(一九五五)年前後だったと思うんですけど、保育所や小学校から帰って、おばあちゃんの所へ行くとお小遣いを一〇円くれるんですよ。それで横田のT商店に行って「松の露」を二〇個ぐらい買って帰って、おばあちゃんの所で食べるのが楽しみでした。おじさんに「カラスが啼かない日があっても美恵子が来ない日はない」と言われていました。テレビなんですけど、昔、高価なテレビは座敷に置いていました。子どもの頃、父も母もいない時でした。夕方相撲中継が始まると、「テレビ観せてや」と近所の人たちが来てテレビを観ていたら、家主がいないところへ放送局の人が来て視聴料を払わんといけなくなりました。

加藤　紙芝居なんですけど、ドドンと太鼓が鳴って紙芝居屋さんがお宮に来ました。私は昭和二九年生まれですが二、三年上の近所のお姉さんに連れられて紙芝居を見に行きました。その時、多分ギョウセン飴だったと思うんですけど、買ってもらって食べました。粘っこかったのを覚えています。

八束　アイスキャンデーもありましたが、夜には「夜鳴きうどん」が来ていました。昭和三〇年代後半から四〇年頃だったでしょうか。「夜鳴きうどん」がピーピーと笛を鳴らして来るのですが、家の前に来たら呼び止めて食べていました。そのうどんが美味しかったのを覚えています。うどんはありましたが蕎麦はなかったですね。

鎌倉　神崎にも道路沿いには来ていました。

写真15　紙芝居を見る子どもたち
(昭和20年代)

(九)SLやバスの思い出

司会　**次に、国鉄のSLの思い出についてお聞きします。それからいつ頃マイカーの時代になり、汽車やバスを利用しなくなったのでしょうか。**

神野　私は松山の高校へ通っていました。当時は蒸気機関車SLが多かったと思います。風向きによっては石炭の粉末が顔にパラパラと当たった嫌な思い出があります。北伊予駅からの乗車だったので、いつも満員で普通はデッキでつかまり棒を片手で持って乗っていました、雨が降るとデッキにはおれ

ないんで中の方へ入ったりもしましたが懐かしい思い出です。

三谷　交通の変化は大きかったと思います。小さい頃（昭和三五、六年頃）八幡浜に住んでいましたので八幡浜から北伊予まで国鉄（現ＪＲ）を利用して帰っていました。当時はＳＬと気動車の時が半々でした。高校・大学は松山に国鉄で通っていましたが、国鉄の六か月の通学定期が二千四百八十円でした。この値段が忘れられません。当時伊予鉄の市内電車は三か月で二千四百八十円でしたから、いかに国鉄が安かったかということを覚えています。

昭和五四（一九七九）年に勤めだして車にしたんですが、重信川に架かる古い中川原橋はバスと離合が出来ませんでしたので、向こうからバスが来てたら手前で待っているという状況が何年か続きました。

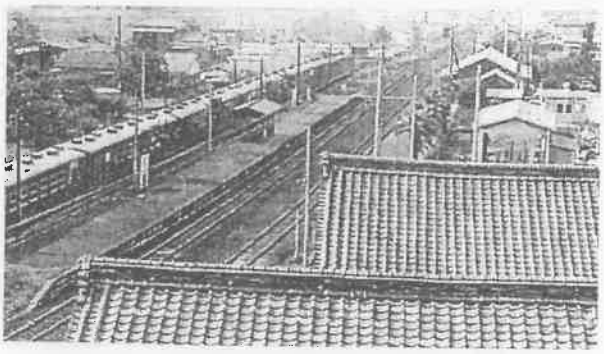


写真16　国鉄北伊予駅構内（昭和50年代）
（『北伊予の伝承第3集』より）

加藤　ＳＬの思い出ですが、私は中川原でしたので北伊予小学校まで六年生が中川原の児童全員を連れて集団登校をしていました。線路の横を通って学校へ行くんですが、ＳＬは決まった時間に通過します、ちょうど通学路の横を通るもんですから風向きによっては煙がすごかったし石炭カスが顔に当たるので、ＳＬが通る前に早く出作なり神崎の方へ行っておかなければなりませんでした。小さい子はその辺の事情が解らないものですから、あっちへ行ったりこっちへ来たりするんです。そんな小さい子どもを速く歩かせてＳＬと出会わないよう登校していくのに苦労しました。

司会　**バス交通に関してお尋ねします。昔は松山からのバスは神崎から分岐して森松へ、上野を経由して郡中（伊予市）へ、東古泉を経由して松前の人織門前（東レ）や今出（いまず）までの路線がありましたが、今では北伊予駅前行きだけになっています。バスに関して特に下地（しも）区の方いかがでしょうか。**

巻幡　ちょっとの期間だけ松山へ勤めていました。人織門前行の最終便が松山を一九時でしたから絶対にそれに乗り遅れてはならなかったんです、そのため間に合うように仕事も切り上げて帰っていました。バスの中では神崎や鶴吉、近所の人たちとワイワイしゃべりながら帰った思い出があります。

写真17　懐かしいボンネットバス
（『北伊予の伝承第12集』より）

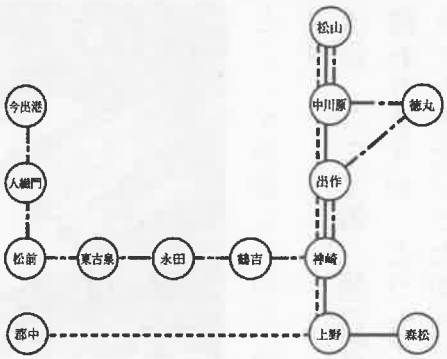


図4　神崎を中心としたバス路線図（昭和30年代）

稲垣　その沿線に住んでいましたので、雨の日などに時々利用しました。一時期、朝夕の通勤時間帯には満席に近い状態で走っていたと思います。その後、時代の流れで徐々に客が減り、昭和三五、六年頃に廃止されたと思います。

村上　役場に勤めていた時ですが、役場の前からバスが出ていたんです。県庁に出張がありましたので役場前からバスに乗って県庁に行きました。帰りは北伊予経由といったら、どれに

乗っても役場の前を通るのかなと思って乗ったんです。北伊予まで来たら、あれあれバスがどんどん山の方へ行くんです。他所の人のような顔をして運転手さんに「松前まで帰りたいんですが」と聞きましたら、「郡中までこのバスで行って、郡中から郊外電車の郡中線に乗って松前で降りてください」と言われました。

渡部　バスと言えば、昔、中川原から徳丸の常夜灯の方へ入っていくバス路線がありましたが廃線になりました。今は町の「ひまわりバス」が回っています。松山へ買い物に出ると言ったらたいてい中川原まで出てからバスで松山へ行っていました。当時は道もガタガタで悪かったですから、中学生になってからも中川原から松山へ行く間に車に酔って顔が青白くなっていました。私は昭和四〇年に車の免許を取りましたが、車に乗ったら酔うかなと心配しましたが、自分で運転したら車酔いしませんでした。それから道路事情もよくなり、自家用車も増えてバスが廃れていきました。

司会　**道路事情もよくなり、自家用車が増えてきたことなども影響して個人商店が姿を消し、スーパーマーケットの利用が多くなり、生活面で大きな変化がありました。特に若い方どうでしょうか。**

大政　物心がついた頃には個人商店は少なく、伊予市あたりに行ってスーパーを利用していたような気がします。幼稚園の頃には、鶴吉に「かどみせ」があって、いつも元気な名物おばさんが店番をしており時々お菓子などをくれました。

写真18　鶴吉の「かどみせ」
（昭和29年撮影、『北伊予の伝承第12集』より）

栗原　個人商店がなくなってきたのは、私なりに考えますと、スーパーへ行けば何でも揃い、安くて駐車場もある。こうしたことが影響したのだと思います。

写真19　北伊予中学校北校舎
（昭和35年撮影、校訓碑も見える）

写真21　校訓碑（昭和29年設置）

写真20　北伊予小・中学校全景
（昭和43年撮影）

司会　**ここで第一部（前半）を終わりますが、どうしても触れておきたいことがありましたらお願いします。**

三好　私は昭和三二年に中学校を卒業しましたが、当時中学校の校舎は今の小学校のプールあたりにありました。その頃ちょうど「真実を求め　希望に生き　実行に徹せよ」という校訓碑や校歌、中庭ができ、発足当時からの中学校が充実・整備された時期で担任は中川原の加藤敏之先生でした。大溝の升田守先生の回想（『北伊予の伝承 第一三集』の座談会）にあるように、牛の飼育とか山王原（中学校の実習畑）へ下肥

（人糞）を肥たごで運び、野菜を作っていたことなど思い出はたくさんあります。

鎌倉　中学校の校歌は私が中学校三年生（昭和二九年）のときにできて一月に発表会が開かれたんです。それと、北側の木造校舎は昭和二四年にできて、二七年には校舎の北側に雨風をよける窓が付けられたように思います。

（一〇）オイルショックにまつわること

司会　**昭和四八年に起こったオイルショック（石油危機）後の狂乱物価、モノ不足、買占めなどについて、体験したこと、その対処法や苦労話などをお願いします。**

村上　昭和四八（一九七三）年のオイルショック後は親の代でしたので、いろいろしてもらっていましたから、モノ不足、買占めなど特に不自由はなかったように思います。物価が上がっていくようでしたので、田を宅地にして屋敷替えし暮れに引っ越しました。夫は地元農協の職員でしたが、弟が会社を作っていましたので退職して兄弟でしていました。順調にいった時代です。

三好　オイルショック後、木材に関しても原木が急騰しました。私の製材所は地元の大工さんとの商売でして、製品の値上げに大変苦労しました。理解してもらう頃には狂乱物価もじわじわと落ち着いていました。その後は安定成長期となり、住宅建築ブームが続いて木材価格も少しずつ上昇し潤いました。

巻幡　トイレットペーパーやティッシュを買いだめしました。今でも安売りのときに買いに行ってストックすることが日常になっています。

稲垣　家計を預かっている女性ほどの苦労は記憶に残っておりませんが、日々家内の愚痴を耳にしながらの生活がしばらく続いたように思います。当時、私も時々スーパーに出かけていましたが、開店前やレジの長蛇の列に出くわした経験も幾度かあります。特にお年寄りや小さな子どもさんを抱えるご家庭では、洗剤や紙製品の調達には大変なご苦労があったと思います。

鎌倉　給食のことも少しお話ししておきたいと思います。松前町内に学校給食が始まったんは、岡田小学校が昭和二八（一九五三）年、三〇年に北伊予小学校、三二年に松前小学校でした。単独校での完全給食だったんですね。中学校の完全給食は昭和三八年に北伊予中学校で始まりました。松前と岡田中学校では四四（一九六九）年にパンとミルクの給食が始まりました。昭和四六年四月には消防署の前に松前町学校給食センターができて、町内の小中の児童生徒、教職員全部で四千四十六人の給食が始まりました。給食費は小学生五〇円、中学生六〇円でした。

その後、四八年のオイルショックの後は、毎年のように値

写真22　給食センター全景（平成9年）
『松前町学校給食センター施設の概況』より

写真23　給食風景（北伊予小1年生）

上げ、値上げで、食材の購入も業者の入札制ではありましたが、献立にも大変苦労しました。それから松前町では、この四八年には他の市町村より早く麦の入った米飯給食を採り入れました。その外に大きな蒸気の釜でつくる炊き込みご飯やチキンライスもありました。関係者で知恵を出し合って大変な時期を乗り切ったんです。

二　昭和六〇年代のバブル期から平成一〇年までのバブル崩壊後のくらし

昭和六〇（一九八五）年以降の財テクブームで資金が土地や株式に集中し、バブル（水泡）と呼ばれる実態経済を伴わない資産価値の上昇が起こり、株式が史上最高値を記録し未曽有の好況を迎えます。しかし、平成改元（一九八九）から一〇年余りの間にバブルが崩壊し、一転して平成不況期を迎えます。

司会　これからは低成長期からバブル崩壊までのくらし、すなわち昭和六〇年代のバブル期から平成一〇年頃までの豊かさを問い直す時代からバブル経済の崩壊後までについてお話ししていただきたいと思います。年代・職種・仕事の内容・役職等によって違いはあろうかと思いますが、自分たちにどんな影響があったのかバブル期の思い出についてお願いします。

（一）バブル期の思い出

三好　私は不動産の免許を持っていまして多少不動産をやっていましたが、ちょうど坊っちゃんスタジアムがある松山の中央公園ができる頃でしょうか、あの頃が土地価格のピークでバブル期でした。土地を売った関係者たちが代替地として重信川を渡って北伊予側へ土地を求めて買いに来たんです。どうしても欲しいと言うので最後に値ように買うた人が、国近川の源流、泉の所の農地を坪（三・三平方メートル）十万円で買ったのが私の記憶では最高額でした。その時の中川原の分譲地が坪四二、三万円で売りよりました。現在、農地は坪一万円でもなかなか売れません。それくらい急激に変わるとは夢にも思いませんでした。

それと株式の関係ですが、私もずっと親の代から農業を八反（八〇アール）ほどやっていましたので農協の理事・監事もさせていただきました。私が監事の時でした。資金の関係で農協はもともと株式を持つことはができなかったのですが、それが緩和されて農協も株を持ってもかまわなくなりました。それで農協も株の売買を始めたのですが、平成六（一九九四）年からバブルが弾け、株が暴落し大変な損害を被りました。いろいろな意味で世の中がこんなに変わるとは夢にも思いませんでした。

司会　今、土地の問題が出ましたが外にもありますか。

神野　私はサラリーマンでしたので景気がよくなって仕事がどんどん増えてきました。昭和四五年頃全国を回ったんですけど、モーレツ社員という言葉もありましたが、残業も月に二百時間くらいする時もしょっちゅうありました。ただ、私の場合は仕事（工場に新設した電気施設・設備の試運転調整）に対する誇りや愛着がありましたから、さほど苦痛ではなかったんですけど、反面、この間ずっと家を出ていましたので、家庭のことは全く放ったらかし状態でした。家に帰るたびに子どもは大きくなっているという状態もありました。悲しい面もありましたが、この時期は充実した生活であったかと思います。家庭の子どもや女房に対しては十分なことができなくて申し訳ないという気持ちも持っています。

司会　今、モーレツ社員という懐かしい言葉も出てきました

が、**仕事もいろいろあった中で関連してどうでしょうか。**

八束　昭和五〇(一九七五)年に教員になりました。公務員ですから民間のようなバブルの影響はなかったんですが、時の総理大臣のお陰で一〇年間くらい給料がどんどん上がりました。年末の一二月は給料、ボーナス、年末調整などがあり、こんなにもらっていいのかと思うほどでした。

教員の仕事については今も新聞紙上をにぎわしているように負担が大きくなっているということですが、私たちが若い頃は朝七時には学校に行っていました、体育館や運動場を開けて、校門を開けたら生徒たちがやってきます、一時間の朝練、八時から授業をして、授業が終わって、冬と夏とは違いますが暗くなるまで部活を見て、それから自分の仕事をして家に帰ると一二時間以上は学校におりました。土曜・日曜日は練習試合、休みと言えば盆と正月くらいでした。このことが今問題になり社会問題になっています。仕事は精一杯したんですが、その代り家庭は一人親家庭みたいなものでした。

三谷　私も教員でしたのでバブルだからとか不景気だからとかということで私自身の給料はあまり左右されなかったので特にはないんですが、ただ覚えているのが預金の金利で、バブルの時期の定期預金で一番よかった時が年八㌫でした。何年だったか忘れましたが、今の金利は大変低くてないようなものですが、当時の金利八㌫という数字だけは記憶に残っています。

司会　**職種によっていろいろあったと思いますが。**

小田原　農業に関してお話したいと思います。農家所得は米の価格が上がらなかったから減ってきました。私が昭和五〇年にJAに就職してからずっと動向を見ていると、昭和四八年くらいからオイルショックがあって、トイレットペーパーとか洗剤不足があって減反政策が始まった。今も続いていますが四〇年近くになりますが、その間の米の価格は下がる一方で、逆に農機具は高性能化し価格は上がっています。私も臨時税理士の資格を取って四〇年間ほど農業所得について二百名くらい診ていました。そしたら農家の人から言われるんです。「小田原君、わしゃ借家の不動産収入がなけりゃ生活ができんが」、「農協へ肥料や農薬の購買代金を払いに来るのに年金を持ってこな払えん」とか、「農協からもらえる金は通帳に入っているこれだけしかない」とよく聞かされました。米価が下がったのが根本的な原因だと思います。就職した時期は、米が一㌔㌘四百五十円、喫茶店でコーヒーを飲むと三百円から四百円くらい。たとえが悪いかもしれませんが、米一㌔㌘とコーヒー一杯が一緒かと。それくらい米の価値が下がってきた。米を作っておられる方も買われる方もおられますが、問題なのは農家が自分で作った農産物の値段を自分で決められんことです。

図5　米価の変遷と農業政策
(昭和44年自主流通米、45年減反奨励)

最近は新しい傾向で直売所ができてくると、そこでお客の欲しいもの・ニーズに合わせて作って、その代りこの値段ですよと言って自分で価格を決めて売る。言えば自分の作ったもの、自信を持って作ったものに自分で値段を付けて売る、こういう新しい流れも出てきています。お米の話をしましたが、ミカンも一緒で昭和五四(一九七九)年くらいから量がダブついてきて減反政策が始まり、ミカンの樹を切れば一反(一〇㌃)

五万か八万円の補助金が国から出ました。

栗原　今、小田原さんが話した通りだと思います。米価が上がらなかったと言うより、まだ下がっていますよね、国民の主食である米の価格が下がることは消費者にとっては生活しやすいと思いますが、それでは農家の経営は維持できないと思います。その辺の改革がないと農家はやっていけません。農家の戸数は減ってきていますし、高齢化も進む中で五年後、一〇年後はどうなっているのか、皆さんの食料も自給できないかもしれません。

　最近、企業が農業分野に入ってきていますけど、もうけるところはもうけています。やり方・工夫次第で大分違うようです。もうかる農業のキーワードが健康志向と体験型農業だそうです。実際、体験型農業を取り入れている所なんかは、農家がすることを一般の人にやってもらってお金を頂いている。やり方次第だそうですが、実際知恵が回らないので現状維持で苦労しています。これからの農業が明るい未来になるよう願っています。

渡部　バブルの時期から今でも農業は困っています。国民の主食であるお米が安いということは国民にとっては生活がしやすくよいことで、国の安全保障を考えた場合、食の安全が大事で主食である米だけは大事にしておかないといかん。

　私の所も今は私が農業をしていますが後はどうなるかわかりません。北伊予地域を考えた場合、北伊予は昔から農業地帯ですが、生活していくためには農業だけではいかんぞということで、どこかに働きに行ける雇用の基盤が安定していたら働きながら農業もやることもできる。定年になって退職したら農業ができるようにしてもらいたいし、農業を大事にしてもらいたいと思っとります。

（二）バブル崩壊後

司会　**昭和六〇（一九八五）年以降、次第にバブル経済期が終わり、バブル崩壊後不況時代が到来しました。この時期をどう乗り切りましたか。**

巻幡　サラリーマンの妻ですので、あまりバブル崩壊の実感はありませんでした。ただ子どもたちが就職氷河期に当たり大変苦労していました。

三好　バブル崩壊後から大手のハウスメーカーが積極的にモデル住宅の展示場を設置して宣伝・営業販売に力を入れてきました。若い世代の家はほとんどその方へ流れて、大工さんの家は減少しました。そうした中でも北伊予地区は農家も多く本家（母屋）の新築はスギ・ヒノキなどの良質の木材を使用し、日本瓦葺（かわらぶき）の在来工法の家や長屋門がぼつぼつ建ち、私の製材所はなんとか維持しましたが、平成七（一九九五）年に町議に出てからは縮小しながら廃業しました。

稲垣　私は生来（せいらい）慎重派で、こんな実態のない経済社会が長続きするとは思えませんでした。お陰さまで株式、その他ギャンブル性の高いものに対してはいっさい手を出さず、従って損得にからむ苦い経験もありません。友人、知人の中には、ご多聞にもれず株式、土地、その他不動産に手を染めて、資産価値のない物件を押し付けられた人、借りた金を全部株式に投資してバブルが弾（はじ）けたとたん、手元に残ったのは莫大な借金だけの人もいました。バブルからは多くのことを学びました。

三好　少し内容が違うと思いますが、この際お知らせしたいと思います。

　昭和六三（一九八八）年、竹下総理大臣の時ですが、「ふるさと創生事業」が行われ、交付金が自治体の大小にかかわらず全ての市町村に対して一律に一億円支給されました。それぞれ

の市町村においていろいろな使われ方をしました。高知県では黄金の鰹像を作り、それが盗まれたりして話題になりましたが、松前町では先ず中川原のひょこたん池公園から、続いて神崎・鶴吉の福徳泉公園、大間の有明公園の整備に使いました。この事業は住田町長から白石町長へと引き継がれました。このことは強調しておきたいんですが、後世に残る本当に素晴らしい使い方をしたと思っています。

写真24　ひょこたん池公園（中川原）

写真25　福徳泉公園（神崎・鶴吉）

（三）真の豊かさとは

司会　バブルの時代が過ぎ、「豊かさとは何か」を問い直す時代が到来しています。皆さんはどう思いますか。

村上　真の豊かさは、人それぞれ価値観が違いますから一概には言えませんが、自分の心の持ちようにあると思います。家族仲よく、地域の皆様と声かけあって助け合うことができるように、そして大勢の人との出会いを大切にして生活できるように心がけていくことが、真の豊かさにつながるように思います。

稲垣　もちろん経済的豊かさが、その全ての根幹になるとは思いますが、それだけに頼り過ぎると味気ない人間味のない社会が構成されていくと思います。この世で生きていく限り、お互いを尊重し、よりよい人間関係を築いていくことが大切なのではと思います。「真の豊かさ」とは「心の豊かさ」ではないでしょうか。

巻幡　家族が仲よく、健康で暮らせたら、幸せだと思っています。とにかく普通がいちばん豊かなことだと思います。

鎌倉　物の豊かさだけでなくて、他人の気持ちを推し量りながら、思いやりを持って接するという心の豊かさだと考えています。

三好　六〇数年前になりますが、子どもの頃を思い起こしますと、同居していた祖父母から、物を大切にすることとか、生活態度や人間性なんかを厳しく躾けられましたね。近所の方々とはいろいろな物を譲りあって暮らしていました。

　現在は物が豊かになってＩＴ（情報技術）が急速に進歩して大変便利になりましたが、その反面個人の考え方や価値観がしだいに変わってきました。個人主義的な考え方が強くなってきましたし、少子高齢化が進んで独居の高齢者が増えていると思います。また一般常識では理解できないようなことが次々と起こって心配です。だからこそ家庭も地域もそれぞれが人情豊かに触れ合い、支え合う「共創・共感・共生」の社会づくりが必要じゃないでしょうか。「真の豊かさ」とは、「心」と「物」の両面が豊かであることだと思います。

司会　後半の第二部は時間の関係でお聞きできなかったこともありましたが、このあたりで座談会「戦後七〇年北伊予のくらしを辿る　その二」を終わりたいと思います。

**　物質的に恵まれている今こそ、一人一人が真の豊かさとは何かを問い直す時期に来ているのではないのでしょうか。長時間にわたりありがとうございました。**

Ⅱ　季節を彩る北伊予の祭礼 ― まつり ―

松前町行政区画の変遷と神社の祭礼について

明治二二(一八八九)年の町村制施行で松前村、岡田村、北伊予村の三か村が生まれ、昭和三〇(一九五五)年の合併で現在の松前町が誕生した。

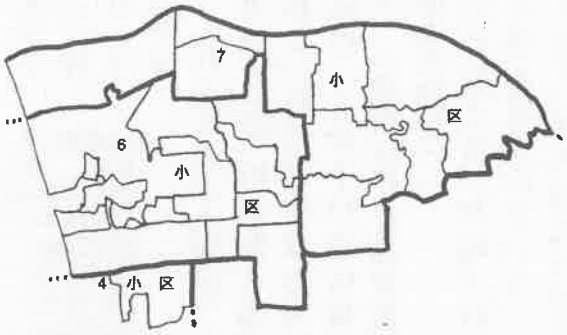


図1　明治6年神山県第11大区・愛媛県第19大区の小区画図

明治初期、行政区画の呼称を従来の固有名詞で呼ばず、数詞(番号)で表す「大区小区制」が実施され、大区に区長、小区に戸長が置かれ行政を担当した。松前の三か村は、明治六年(同年一一月、太政官布告で石鉄県と神山県は愛媛県となる)旧神山県の第11大区は愛媛県第19大区となった。明治一一年急進的な諸改革に対する根強い反対を受けて「大区小区制」は廃止され、郡役所のもと新しい村の区画が作られた(図1)。

明治四(一八七一)年、松山藩時代の松前地区の神社のうち、表1のように稲荷大明神(高柳村西分)、玉生八幡大神(古泉村西分)、貴布禰大明神(黒田村)、伊豫神社(神崎村)、恵依八幡大神(出作村)、高忍日賣神社(徳丸村)の六座では、秋の祭礼は藩命により郷社(格式の高い神社)玉生八幡大神の旧暦八月一五日に統一されたが、郷社以外の村社(末社)では旧暦六月から九月の期間に行われ統一されていない。(明治四年『伊豫國伊豫郡大小神社明細帳』表1による)

表1　明治4年(1871)松山藩時代の神社

神社名 / 末社名	村名	祭日	神主名	旧号等
稲荷大明神	高柳村西分	9/25→8/15	神主　榊山春範	高柳大明神 流宮五社大明神
神明神	北川原村	8/8	榊山春範	
若宮社	庄之内村こと昌農内村	6/10	榊山春範	
素鷲社	高柳村上分	6/9	榊山春範	祇園牛頭天王
玉生八幡大神	松前村こと古泉村西分	8/15	神主　武智盛就 祝　高市美直 祝部　高市慶敬 禰宜　高市盛至	上野村→昌農内村→当村
素鷲社	南江頸村こと岡田村	9/1	武智盛就	祇園牛頭天王
頭王霊社	北江頸村こと恵久美村	9/1	武智盛就	
八幡社	松前村こと筒井村	9/12	神主　高市美直	
素鷲社	松前村こと古泉村東分	6/13	武智盛就 高市美直	祇園牛頭天王
素鷲社	横田村	6/15	高市慶敬	祇園牛頭天王
素鷲社	黒田大濱村こと大濱村	6/9	高市慶敬	祇園牛頭天王
鎮守社	南江頸村こと永田村	3/27	高市慶敬	
姪子社	松前村こと濱村	6/25	高市慶敬 高市盛至	
貴布禰大明神	黒田村之内黒田村	9/20→8/15	神主　高市盛房	
伊豫神社	北神崎村こと神崎村	8/22→8/15	神主　高市通福 祝　高市豊茂	
稲荷社	釣吉村之内鶴吉村	9/8	高市通福 高市豊茂	
恵依八幡大神	神崎出作村こと出作村	9/18→8/15	神主　武智盛高	恵依第二名本宮 正八幡宮
高忍日賣神社	徳丸村	9/13→8/15	神主　後藤正辰	
素鷲社	大間村	6/9	後藤正辰	祇園牛頭天王
素鷲社	中川原村	6/13	後藤正辰	祇園牛頭天王

明治4年「伊豫國伊豫郡大小神社明細帳」による

なお、明治六(一八七三)年神山県時代、第11大区第6小区の郷社は玉生八幡大神(氏子数九九九戸)のみで村社は八社、第7小区の郷社は伊豫神社(氏子数一六九戸)と高忍日賣神社(氏子数二六九戸)の二座で村社は八社ある。(明治六年神山県『縣郷村社調牒』表2による)

なお、秋の祭礼日が現在の新暦の一〇月一五日に決定したのは昭和一一(一九三六)年である。

写真『伊豫郡大小神社明細帳』より

明治一七年一二月、新たに「町村戸長役場管轄区域」が設定され、翌一八年から実施された。松前には三つの村がおかれ、北伊予地区は「神崎村外八ヶ村」と呼ばれた。これがそのまま明治二二年に実施された町村制に基づいた新しい町村、すなわち松前・岡田・北伊予村の区域となった。（資料は伊予高校教諭柚山俊夫氏提供）

今回の祭礼は、神職が行う神社に係わるものをいう。北伊予九地区（藩政時代は村）でも古くから行われている重要な年中行事で五穀豊穣、組中・家内安全、無病息災、子どもの健やかな成長などを祈念する春夏秋の季節を彩る祭礼である。

図2　明治18年の戸長役場管轄地域

表2　明治6年(1873)神山県時代の神社

第11大区第6小区

	社格	神社名	氏子数	村名	神職		備考
1	郷社	玉生八幡大神	999戸	西古泉村	祠官	高市慶敬	
2	村社	貴布禰大明神	219戸	黒田村	祠掌	榊山春延	貼紙「高市真佐美」
3	村社	素鷲社	無之	東古泉村		同人	
4	村社	八幡社	無之	筒井村		同人	
5	村社	蛭子社	無之	濱村		同人	
6	村社	素鷲社	無之	大溝村		同人	
7	村社	素鷲社	無之	横田村		同人	
8	村社	鎮守社	無之	永田村		同人	
9	村社	頭王霊社	無之	恵久美村		同人	

第11大区第7小区

	社格	神社名	氏子数	村名	神職		備考
10	郷社	伊豫神社	169戸	神崎村	祠官	高市通福	貼紙「武智清夫」
11	郷社	高忍日賣神社	269戸	徳丸村	祠官	同人	貼紙「高市盛久」
12	村社	稲荷大明神	240戸	西高柳村	祠掌	武智盛文	
13	村社	若宮社	無之	昌農内村		同人	
14	村社	素鷲社	無之	上高柳村		同人	
15	村社	沖明神	無之	北川原村		同人	
16	村社	稲荷社	無之	鶴吉村		同人	
17	村社	素鷲社	無之	大開村		同人	
18	村社	素鷲社	無之	中川原村		同人	
19	村社	恵依八幡大神	59戸	出作村		同人	貼紙「高市盛高」

明治6年　神山県「縣郷村社調簿」による。

延喜式内社である徳丸の高忍日賣神社（縣社・郷社）は中川原の素鷲社を、延喜式内名神大社である神崎の伊豫神社（縣社・郷社）は鶴吉の稲荷社を、西古泉の玉生八幡大神（郷社）は東古泉、大溝、横田の素鷲社と永田の鎮守社を末社にもち、出作の恵依彌二名神社とともに、神社ごとに祭礼を行ってきた。現在は生活改善面などから統一して行っている。

北伊予の春祭りは、現在域内いずれの神社も四月二九日、境内（出作は集会所前）で子ども相撲を行い、近年は女子も参加し華やかである。

夏祭りは、各地区により異なるが、茅の輪をくぐって無病息災を祈る輪越を行い、一部の地区では境内で演芸大会を行い出店も出る。徳丸では八月二日「虫干祭」を行い、村芝居は遠来からの観客も多い。

また秋祭りは、一〇月一四・五日の二日間行われる。前日は宵宮で、夕方氏神さまからご神火をもらって各家々のご神燈に火を点けて回る高張を行う地区もある。一四日は土地の生活を脅かす悪霊払いや五穀豊穣に感謝する獅子舞が各地区で行われる。一五日は神輿の巡行と一部の地区では獅子舞も行われる。神輿は家々を巡行し神職がお祓いをする。徳丸・中川原・神崎三地区では大・小神輿二体が巡行する（表3）。近年大神輿はかき手不足からウイークデーの開催が危ぶまれる地区もあり今後の課題である。

なお、各地区の祭りの記述で引用した文献は、原文のまま掲載した。また、各地区の概況で記した人口等の資料は、松前町が公表しているものを使用した。

表3　北伊予の秋祭りの出し物

	大神輿	小神輿	獅子舞	高張
徳丸	○	○	○	○
中川原	○	○	○	○
出作		○	○	○
神崎	○	○	○	
鶴吉		○		
横田		○	○	
大溝		○	○	○
永田		○	○	○
東古泉		○	○	○

（平成29年）

一　徳　丸

（一）徳丸の祭り

徳丸は、高忍日賣神社の氏子である。高忍日賣神社の創立年代は不詳であるが、飛鳥時代に聖徳太子が道後に来られた際に参詣され、神号扁額を奉納されたという。また、平安時代に醍醐天皇の命により定められた延喜式に記載された神社（延喜式内社）である。徳丸の歴史は高忍日賣神社の歴史と深い関わりがある。

（二）春祭り

徳丸の春祭りは、毎年四月二九日（昭和の日）に執り行われる。春祭りは、五穀豊穣を祈念するお祭りで、高忍日賣神社と境内末社素鵞神社（天王さん）にて祭典が執り行われる。

また、中学生以下の子どもたちによる奉納相撲がある。純真無垢の子どもたちが、土を力強く踏みしめて相撲を取ることにより、土の神様がお喜びになり、豊作がもたらされるのである。祭典の前に、拝殿において皆でお祓いを受け相撲を取る。中学生が中心となって、土俵作りや行司などの相撲の運営を、責任を持って行っている。また、愛護部を始め文化部や、そのほか徳丸の有志も協力して中学生たちがきちんと運営できるよう支えている。そして、大人も子どもも一体になって、大いに盛り上がっている。地域社会の本来の姿がここにある。地域の後継者としての子どもたちを育てるため、地域住民が互いに関わりあい、賑やかな春祭りとなっている。

写真1　春祭り奉納相撲
(平成24年4月29日)

（三）虫干祭

徳丸の夏祭りは、虫干祭である。毎年八月二日に行われる賑やかな祭りである。

日本人は、古来より災厄は、心や体に付いた「けがれ」によってもたらされるものとして、日頃より心を清浄に保ち体に付く様々な「けがれ」を落とすことが必要であり、そこで「禊」や「祓」を行うのである。それは、『古事記』や『日本書紀』に、イザナギノミコトが死者の国である黄泉国から逃げ帰り禊をしたという話からも分かる。神社では年の前半、つまり元日から六月三〇日と、後半の七月一日から大晦日に分け、六月三〇日と大晦日に大祓式を執り行うのである。このうち、特に六月三〇日には茅で輪を作り（茅ノ輪）、それをくぐることにより茅で心身のけがれを断ち切り、無事に夏を越せるのである。ここから一般に「夏越祭」とか「輪越祭」と呼ばれる。

虫干祭当日、午前一〇時より祭典が厳かに執り行われる。祭典の中で、拝殿祓所の前で神職・総代に「ひな形」が配られ、それで体をなでて息を吹きかけ、それを持って茅ノ輪くぐりの神事が行われる。宮司に従って一列になり和歌を唱えながら茅ノ輪を左右左とくぐり、最後に祓所の前において「大祓詞」を一斉に唱え、「けがれ」を祓う。

高忍日賣神社は、かつてはこの祭りに神御衣（神様の衣）などに風を通す虫干しをしていたことから「虫干祭」という名が付いたといわれる。氏子・崇敬者

写真2　虫干祭神事(平成29年8月2日)

は祭りの当日、「ひな形」を持って神社の茅ノ輪をくぐり、拝殿の祓所で神職によるお祓いを受ける。最後に御神札をいただいて帰る。いただいた御神札は、家の戸口に貼り、災いから守っていただく。

さて、祭りの夜の境内は露店などが並び、特設舞台では、氏子の有志によるカラオケや踊りの披露、徳丸一座（徳丸村芝居実行委員会）による村芝居（人情時代劇）が上演される。氏子内外の参拝者で賑わう。ちなみに平成二九年は「勘太郎月夜唄」が上演され、村芝居復活後第二二回となっている。虫干祭では戦前から青年団が芝居や踊りを披露して祭りの夜を盛り上げていたが、戦後の高度経済成長期に若者の減少により青年団がなくなり、村芝居が途絶えた時期があったが、平成八（一九九六）年に、当時の青年有志と宮司や徳丸・中川原・大間の宮総代らが協力し合って、村興しにも繋がるとして村芝居を復活させたのである。

写真３　奉納村芝居(平成20年8月2日)

復活初演の舞台に立ったA氏はその時のことを、「舞台の材料を揃えたり、演目や脚本、芝居の指導者である師匠捜し、大道具や小道具作り、スタッフ募集などはもとより、役者としての台詞や所作を覚えたり、大変な苦労を重ねて、やっと迎えた初演本番の極度の緊張の中で、無事成功を収めた感動は今でも忘れられない。」と話してくれた。

毎年虫干祭の公演で多くの人々に感動を与え続けている村芝居ではあるが、舞台裏の事情は大変なところがある。

スタッフのB氏は、「約三か月の稽古期間を要するが、スタッフは仕事もあり、全員揃っての稽古がなかなか出来ないし、衣装などの費用のことや人手不足の苦労も大変という現状もある。」と話してくれた。

（四）例大祭（秋季大祭）

例大祭は一年の祭りのうちで最大の祭りである。松前地方の秋祭りは毎年一〇月一三日の宵祭りに始まり一五日の神輿渡御で祭りのクライマックスとなる。

例大祭と切っても切り離せないのが、獅子舞と神輿の渡御である。その内、獅子舞は大切な伝統芸能で、獅子舞の練習の太鼓の音が聞こえてくると秋の深まりを感じる風物詩ともなっている。

一〇月一二日の早朝、一斉に幟が立てられる。例大祭では、今年の五穀豊穣を氏神様にご覧になっていただき、感謝申し上げ、神様と人々とが共に豊作を喜び祝うのである。高忍日賣神社では、一三日の宵祭りに徳丸・中川原・大間の神輿が並び、徳丸と中川原の獅子舞が奉納される。獅子舞は、かつて上組、西組、下組の三つあったが、現在は二つのグループが続いている。そして、それぞれ「獅子舞保存会」が作られ、子どもたちに熱心に獅子舞を教え伝えている。舞い方にもグループによる違いがあり、興味深いものがある。獅子舞の奉納は、午後七時三〇分頃に高忍日賣神社拝殿に集まり、お祓いを受けた後に行われ、午後九時過ぎまで行われる。

また、子どもたちは、高張提灯を持ち、組中の家々で「おたふく（おたやん）がまいこんだ」と言いながら回り、菓子などを貰う。一四日の夜も回るのであるが、家に入った時には「おたふくがまいこんだ、おたふくがまいこんだ」と言うのは同じだが、家から外へ出たら「らいねんじゃぁ、らいねんじゃぁ」と唱えるのである。

一四日には、拝殿に三体の御羽車と徳丸、中川原、大間の計五体の神輿が並び、祭典が厳かに斎行される。また、夜には浄闇の中、御霊遷しの神事が斎行される。

翌一五日は、午前六時に発輿祭（宮出し神事）が斎行され、徳丸、中川原、大間の神輿の渡御が始まる。先ずは神社から一丁地の御旅所まで猿田彦命の先導で行列して向かう。猿田彦命とは、天孫ニニギノミコトが高天原から日向国高千穂峰に下られた際、道案内をした神様である。この故事にちなんで、御旅所までの行列の先頭に立って歩くのである。

猿田彦命役は、氏子の中から四二歳もしくは六一歳の男性から選ばれる。行列が動き出すと、ちょうど朝日が東の山から顔を覗かせ、その光が神輿の屋根に当たって鳳凰が輝き神々しく美しい。御旅所に着くと、神事が斎行され、小学三年生から五年生の女子の中から選ばれた巫女が鈴神楽を舞う。神事が終わると、神輿はそれぞれの地区に向かい、渡御するのである。徳丸では、大小二体の神輿が賑やかに勇壮に各組を渡御し、夜には高忍日賣神社に宮入りする。神輿の周りには、老若男女が集まり、各組の辻や新しく建った家などにかき据え、更に獅子舞もあったりして、大変な賑わいである。ほぼ一日かけて徳丸中を回る。

お宮の隣の徳丸老人憩いの家の前では、徳丸婦人部の協力でうどんが振る舞われ、うどんで腹ごしらえの後、宮入りとなる。まさに地域挙げてのお祭りであり、神様と人々が共に喜びを分かち合う大切なお祭りである。

写真４　神輿渡御　御旅所までの行列
猿田彦命が先導する
(平成28年10月15日)

写真５　神輿渡御　御旅所神事
こののち神輿は各地区へと分れて
巡幸する(平成27年10月15日)

(五)その他の祭り

その他の祭りとして、一月には歳旦祭、元始祭、日供始祭、どんど焼き、二月には節分祭、祈年祭、紀元祭、五月は尚歯会神事、八月は戦没者慰霊祭、九月は諏訪神社例祭、夷子神社例祭、一一月は新嘗祭、一二月は大祓式、除夜祭がある。

このうち、諏訪神社例祭、夷子神社例祭、尚歯会神事、戦没者慰霊祭について述べる。

1　諏訪神社例祭

九月の諏訪神社例祭は、境内末社諏訪神社の祭りで、諏訪神社はかつて徳丸河原組にあったが、明治の合祀令により、境内末社の素鵞神社に合祀されている。祭礼日は毎年九月一七日で、祭典には河原組の組長さんが参列し執り行われている。五穀豊穣と組中の安全に感謝申し上げるのである。

2　夷子神社例祭

夷子神社は、高忍日賣神社の鬼門と裏鬼門を守る社として、奈良時代から祀られている神社である。神社から直線で北東方向と南西方向に三百メートルくらい離れた場所に鎮座していた。そして、社を中心に市が開かれ、中世には大変賑わったと言われている。北東方向にある夷子神社を上市えびす、南西方向にあるのを下市えびすと呼んでいたらしい。下市えびすは明治の合祀令によって高忍日賣神社境内の素鵞神社に合祀されている。上市えびすは、長い歴史の中で市の衰退とともに個人

の屋敷内に取り込まれていたために合祀令を免れ、最近まで本来の場所に鎮座していた。しかし、鎮座していた屋敷の持ち主のやむを得ない事情もあり、高忍日賣神社境内の東北隅に遷座して現在に至っている。仮遷座祭は、平成一九年一月の夜中に浄闇の中行われ、その行列を地元の表、裏組の人々が手を合わせて見送っていた姿がいかに多くの人々にえびす様が慕われていたかを物語っている。かつての社は、庚午石と呼ばれる粒の小さい礫岩で作られ、時代は室町時代らしい。風化して崩れたので現在は木造の社となっている。

写真6　夷子神社例祭
(平成29年9月18日)

ここで言う夷子神社例祭とは、この上市えびすのお祭りで、毎年秋の社日に執り行われる。元田中組（表組、裏組）の組長さん始め、宮総代、区長、御遷宮に関わった世話人の方々が参列している。社日は、春の社日と秋の社日があり、それぞれ春分、秋分に最も近い「戊の日」のこと。豊かな実りを感謝するお祭りだが、商売繁昌や家運の隆昌を祈るお祭でもある。

3　尚歯会神事

尚歯会は、「郷土の発展は老人の積み重ねし努力の成果なり」として、大正二（一九一三）年五月一六日に、高忍日賣神社が主体となって第一回の徳丸尚歯会が催された。毎年五月の第二日曜日（母の日）に徳丸の数え七五歳以上の高齢者を大字徳丸役員が招待して、高忍日賣神社で神事を執り行い、老人憩いの家で祝宴を催す行事である。

戦時中も脈々と敬老の精神は受け継がれ、戦後は物資欠乏や物価高騰などにより、会費や寄付金では会の運営が危ぶまれたが、昭和二七（一九五二）年の第四〇回をもって神社から大字徳丸に移管され、昭和二八年からは大字徳丸主催の行事となった。平成二四年で百周年を数え、現在に至っている。他にこれほど続いている地域は珍しいのではないだろうか。徳丸の敬老の精神を受け継ぐ大切な伝統行事となっている。

4　戦没者慰霊祭

高忍日賣神社境内の「慰霊之塔」には、高忍日賣神社の氏子出身で、日清戦争から太平洋（大東亜）戦争にかけて、国のために出征し戦って亡くなられた百十二柱の英霊が祀られている。

東公民館の西側の忠霊塔に北伊予出身の英霊が祀られ、かつては慰霊祭も行われていたようであるが、それが出来なくなり、太平洋（大東亜）戦争終戦三〇年を記念して復員者一同が発起人となり、高忍日賣神社慰霊之塔奉賛会を組織して浄財を集め境内に「慰霊之塔」を建て高忍日賣神社氏子出身の英霊を祀ることになったのである。

昭和五〇年八月一五日、遺族を招待して第一回慰霊祭を斎行した。以来、毎年八月一五日の終戦記念日に慰霊祭を執り行っており、現在は神社総代が奉賛会の世話をしている。近年、遺族の数も減り、出席者も少なくなっているが、慰霊祭は続けていきたいと考えている。

写真7　戦没者慰霊祭
(平成28年8月15日)

二　中川原

（一）地区の概況と氏神さま

1　地区の概況

中川原は北伊予の北東にあり、北は重信川を境に松山市と、東と南の一部は徳丸、南西は出作、西は大間に接する。

地区内は昔のままの狭い道路しかなく、幹線道路は、県道松山伊予線で松山市古川から中川原橋、出作を経由し、伊予市上野と松前方面に向かう。平成四（一九九二）年頃松山伊予線にはバイパスができ、また重信川南岸には農免道路も出来ている。しかし朝夕の通勤・通学の時間帯は橋詰めから出作境までのバイパスも渋滞が続いている。

地区の組は、昭和五四（一九七九）年くらいまでは、一〇番組までで、農家（兼業農家含む）と非農家の割合も同じくらいだったが、農家の高齢化に伴い現在は稲作も「農事組合法人中川原」や、認定農業者に委託する人が増え、農家も減少し、生産組合員も八〇戸くらいになっている。また、新宅、分家、他の地域から非農家の新築移住も増え、現在は四組増え一四番組までになっている。なお、平成二九年四月現在の世帯数四五八、人口は千百九十一人である。

2　氏神さま

氏神さまは徳丸の高忍日賣神社で、中川原はその末社の素鵞神社で、お天王さんと呼ばれている。（天王さんは建速須佐之男命を主神とし、古くは祇園牛頭天王と言われ、俗に天王さんと称す）

素鵞神社は、主祭神は建速須佐之男命、配神は足那豆知命・手那豆知命、境内神社は金刀比羅神社（大穴牟遅命）・奈良原神社（保食神）、本殿は流造鉄板葺三・二平方メートル、崇敬者約二百戸、神紋は木瓜、創立年代は不詳。徳丸の高忍日賣神社の境外末社である。天保一一（一八四〇）年四月に再建されたが社殿の老朽化により高岡重吉氏が本殿、幣殿および拝殿を再建し、本田利八郎氏が奈良原神社を再建した。その後も有志および住民の浄財寄進によって境内の整備が進められた。

（二）春祭り

区長の武智幹雄さん（昭和三〇年生まれ）に聞いた。

「中川原地区では四月二九日（昭和の日）に祭典と子ども相撲をお天王さん（素鵞神社）前で実施しています。

祭典には、祭壇に米、鏡餅、お神酒、野菜、乾物、鯛、果物を供え、お祓い用の塩水と南天の小枝を用意します。

当日は、午前八時より徳丸にある高忍日賣神社の宮司さんを素鵞神社にお迎えして神事を行います。参加者は社寺係、理事者、役員、組長、愛護部、世話役の中学三年生、神事は約三〇分程度です。

相撲大会では、世話役たちが、前もって土俵整備などをしておきます。相撲大会参加者は参加費を出しておき、参加費で賞品や御幣の用意をしておきます。

いよいよ相撲大会です。賞については、以前は七人と五人

写真1　素鵞神社（平成29年）

写真2　子ども相撲（平成29年）

抜きもありましたが、今は三人抜きだそうです。取組については学年ごとで行います。御幣をもらうのが子どもたちの憧れです。その夕刻午後六時頃より青年団の団員より素鵞神社の隣の宗金寺の境内に舞台を設け、村芝居が昭和三五年くらいまで行われていたようです。」

(三)夏祭り

社寺長の山本康秀さん(昭和二二年生まれ)に聞いた。

「中川原の夏祭りは、素鵞神社にて午前八時より宮司を迎えて神事を行っています。実施日については昭和の時代は七月一三日に行っていましたが、時代変化で兼業農家が増え男性の参加者が少なくなり仕事の都合を考慮して、平成一六年から七月一三日に近い日曜日に変更されました。当日は各組より酒一本ずつ持ち寄り祭礼が始まります。参加者は社寺係、大字役員、各組長で、祭礼は半年間の穢れを洗い清め、田植え後の五穀豊穣、夏の虫除け、無病息災、家内安全等を祈願します。その後、宮司より説話があり神事は終了です。

後は組内に帰り、以前は組で仕出し弁当を取っていましたが、今は簡単なつまみを酒の肴にして懇親を深めています。その内容は半年間の経過報告、今後の行事予定等を話し合って午前中で終了します。」

加藤招賞さん(昭和一〇年生まれ)は、夏祭りについて『北伊予の伝承Ⅸ』で次のように書いている。

「中川原地区では、毎年7月に夏祭り(夏祈祷)が催される。以前は7月13日に行われていたが、平成16年より7月の第二日曜日に行われるようになった。

この日は、午前9時頃より徳丸にある高忍日売神社の末社、中川原の素鵞神社に宮司さんをお迎えして神事を行う。この素鵞神社の主祭神は、建速須佐之男命で、配神は足那豆智命と手那豆智命が祀られている。境内神社には金刀比羅神社、奈良原神社があり、本殿は流造鉄板ぶきで、広さは3.2㎡である。いつの時代から行事が行われていたかは定かでないが、幕末頃から始まったのではないかとの話である。

行事内容は、先ず祭壇に鏡餅、米、御神酒、海水(塩水)を入れた小皿、南天の小枝(御祓い用)をお供えして、宮総代、地区役員が社殿に集まり祭礼が始まる。そしてこの半年間の穢れを祓い清め、田植え後の五穀豊穣、夏の虫除け、悪病除け、無病息災、家内安全等を祈祷し、宮司さんに続き地区代表者が玉串奉奠を行う。その後、宮司さんの祈祷にまつわる伝承等、お話があり境内に集まった人たちも拝礼して祭礼は終わる。

昔は神社境内で婦人会が炊込み御飯のおにぎりを作り子どもたちにふるまっていたが、今は行われていない。その後、御神酒を各組の宿元へ持ち帰り、組中の者が頂きながら協議事項、伝達事項等の報告を行っている。」

図1　夏祭り
『年中行事絵図-版画-』中村文雄著より

(四)秋祭り

三好清雄さん(昭和一五年生まれ)と松浦孝良さん(昭和一六年生まれ)に聞いた。

「例大祭(秋祭り)は、年間に数多くある祭典の中で最も重要な祭りに位置づけられています。

また、神様がお神輿で氏子内を回られるのも一年でこの時だけで、地域が一丸となって盛り上がる一年で最大のお祭り

と言ってよいでしょう。神輿のかど回りの際は、お供米にてお祓いをします。

一〇月一五日朝、ご神体を徳丸の高忍日賣神社より庚申車で素鵞神社に迎えます。

現在は、徳丸の高忍日賣神社で御神体を入れ中川原素鵞神社に帰り宮出しをし、そのあとかど回りとなります。道順はその年によって違います。かど回りが終わると公民館に戻り神輿に縦横にロープをまき、神輿の手入れをします。その後、昼食(五目にぎり、おでん、お汁、酒)をとり約一時間位休みます。

午後よりお旅所を回って行きます。お旅所ごとに子どもにお菓子がふるまわれます。順次お旅所回りをしながら夕刻の五時近くに公民館で夕食となります。夕食のメニューは、カレー、サラダが定番で、おいしくて人気があります。夕食が終わった後、二番組、七番組のお旅所を回りその後、最後のクライマックスの宮入りとなります。

かき足りない人と、納める人のかき合いやもみ合いが始まり、かき疲れ九時前後に宮入りとなり、納めの太鼓が鳴り終了となります。

今は法被を揃え大盛況で大いに盛り上がっています。祭りのため休暇をとる人、県外から帰ってくる人もいます。

写真3　お神輿の順路と時間(平成29年)

写真4　宮出し(平成29年)

神輿は現在三代目です。一代目は昭和三〇年、二代目は四九年、三代目は平成一六年に新調しました。

猿田彦も平成三(一九九一)年から復活し神輿の先導役で、その年の一の体地区の厄年の男性が務めます。

鈴神楽も、平成三年から小学三～五年生より選出され、一四日午後二時から例大祭祭典と一五日お旅所神事にて奉納します。

神輿の運行も大字から平成二一年に愛護部に変わり、現在は「祭心会」が発足し、子ども神輿や獅子舞は女の子も参加するようになりました。

御旅所のお菓子は、昔はせんべいが多く出ていましたが、今はスナック菓子がほとんどです。」

山本庫市さん(大正一五年生まれ)は「秋祭り」について、『北伊予の伝承 IX』に次のように書いている。

「稲穂が実り頭を垂れるころ、夜になると獅子の太鼓の音がトコトントコトンと聞こえてきます。御輿の手入れをして磨きます。10月12日になると素鵞神社と村内の5箇所に幟が立てられ、各組の御旅所には、提灯を立て、しめ縄が張られます。

13日と14日の夜には、子どもたちが宗金寺の観音堂に集まっ

写真5　猿田彦(平成27年)

写真6　鈴神楽(平成26年)

て、高張り提灯を持って家々を廻ります。土間で繁昌せい繁昌せい、と大声で唱えながら練ります。時には小さい子を胴上げして座敷へ下ろしたりして騒ぎ盛り上げました。道端の色づき始めた柿を見つけて取って食べたりしました。廻り終わったらお菓子を貰うのが楽しみでした

14日の宵祭りは、青年団が各組の旅所を廻って獅子舞をします。演目は、さる、ぼーてん、かりゅうど、さんばそうの4曲です。新築の家にも廻り、最後に素鷲神社で奉納しました。昭和59年からは愛護部がするようになりました。平成8年から子どもも獅子舞を始めました。15日の朝、御神体を徳丸の高忍日売神社から「こうしんぐるま」で中川原の素鷲神社へ迎えます。神主により御神体を御輿へ移される神事が行われて宮出しとなります。その年の一の体の地域の厄年の男性が猿田彦になり御輿の先導役を務めます。区長宅から門廻りが始まり、鈴の音と、「もーてーこい　もーてーこい」の掛け声と共に御輿が来ると、お米と塩水でお祓いして拝みます。門廻りが終わると公民館で昼食と酒盛りになります。

写真7　高張（昭和36年頃）
（加藤敬之進氏提供）

写真8　獅子舞（昭和36年頃）
（加藤敬之進氏提供）

午後からは御輿にロープを巻いて、酔った勢いで大声を出して各組の御旅所廻りが始まります。御輿について来た子どもたちはお菓子やみかんを貰います。新築の家へ行くと御馳走とお酒が振舞われて元気を取り戻します。時には中川原橋へ行き、古川の御輿と鉢合わせをすることもあります。家々では親類縁者を招いて宴会を開きました。

夜になると高張提灯が先導して御輿をピカピカと輝かせます。酔った家族が加わって、練りがだんだんと激しくなり、頭取の制止を聞かず、御輿に乗り、差し上げ、かつぎ、ぐるぐる回したりして盛り上がります。時々怪我人が出ました。

御旅所廻りが終わると素鷲神社へ戻ってきて、残った力を出し尽くして練り続け最高潮になります。宮入りをさせまいとする家持と宮入りしようとする青年との揉み合いが繰り広げられた末、お互いに疲れ果てて宮入りとなります。太鼓の音が、しじまに響き祭りが終わります。

昭和59年から青年団に代わり愛護班が中心になって運行するようになりました。」

写真9　秋祭り 昔の中川原橋の前で（昭和18年）
（加藤賢司氏提供）

三　出作

（一）地区の概況と氏神さま

ＪＲ北伊予駅の南東から北西にわたる地区で、地区の西部を予讃線が通る。平成二九年四月現在、世帯数三四二、人口八〇一人、農家戸数四一、組数は一三である。

氏神さまは恵依彌二名神社である。主祭神恵日売命は女神様である。宝物には弥生時代中期の有柄式石剣一口と弥生式土器の大型壺一個がある。その昔は伊予二名本宮と称され、元禄の頃は伊予本社正八幡宮となり、明治二九（一八九六）年一二月現在の社名となった。寛政三（一七九一）年建立の鳥居には伊予市の三地区及び釣吉（鶴吉賀佐地区）と出作の村名が刻まれ、広く崇敬されていたことが窺える。元は現在地の北方だったが慶長五（一六〇〇）年の兵火で社殿その他全部を焼失し、その後現在地に再建されたと伝えられている。

氏子は平成一五年まで出作と鶴吉賀佐地区と伊予市の堤地区（上三谷・上野の一部）であったが、翌年、出作と堤地区になった。現在の社殿は平成一一年に松山市の伊豫豆比古命神社（椿神社）から移築したものである。（氏神さまについては米家宮司の話と『松前町誌』『ふるさとをたずねて』を参考にした。）

（二）祭りの現況

１　春祭り子ども相撲大会（四月二九日）

いつまでか定かでないが、以前は二名神社の境内で奉納相撲大会をしていた。その後隣接する吉祥寺の境内の南東隅に公民館ができてから、その前に広がる寺の境内に場所を変え、それ以来神事はなくなった。平成六（一九九四）年に現在の出作集会所ができてからは、そこに場所を変えた。土俵用の稲わらは農家に分けてもらい宮総代が保管する。土俵は中学生男子が分団長中心に集まり寿会（老人会）の指導を受けて作る。御幣用の青竹は二名神社の竹を使い、宮司が用意してくれた紙垂（四手）を中学生がつける。以前は男子だけの行事であった。

最近は、子どもの活躍の場を確保するため、中学生の分団長を中心に女子も取組や準備、運営に参加するようになった。今年は就学前から小学生までの男女が相撲を取り、中学生は司会進行や行司等にあたった。年によって子どもの数が異なるが、中学生まで相撲を取ることもあった。大人は土俵の準備や後片付けなどの支援に徹する。後で、愛護部が作ったカレーライスを子どもと保護者、手伝った大人たちが頂き、労をねぎらい交流の場とする。

２　夏越（輪越八月一日）

罪穢れを解除して無病息災を願い、二名神社で午後六時頃から始める。社殿入り口に、茅で作った直径約一・八メートルの鮮やかな緑の輪を据え置く。茅は当日の朝に宮総代が刈り取りに行き、有志の応援を得て社殿で作る。氏子は、宮総代が配布した和紙の人形を前の晩、身体に当てて枕に敷いて寝る。社殿では、宮司の見守る中、持参した人形を宮総代に渡して「夏越祭守護」のお札を頂き、輪を三回くぐってお参りする。

写真１　土俵を作る寿会員と中学生（平成２９年）

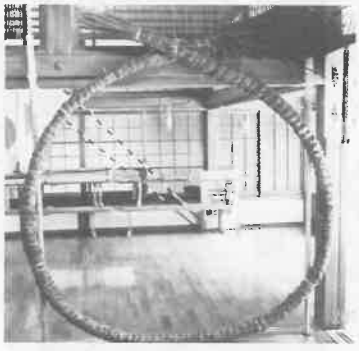


写真２　完成した茅の輪（平成29年8月1日）

境内では子どもや愛護部によって鳥居に笹飾りを飾り、公民館役員が中心になって出店を出す。最近は金魚すくい、缶飲料、かき氷、たこ焼き、フランクフルトが定番である。この店は、寿会、愛護部、消防団、大字役員などが担当する。

3　秋祭り（一〇月一五日）

(1)　高張提灯

現在は、宵祭りの一三日と一四日の夕方、子どもが集会所に集まり三班に分かれて地区の家々を回り、「もてこい、もてこい」と言いながら玄関土間を回ってかえる。愛護部の支援を得て分団長中心に中学生がリードして実施する。

元宮総代で昭和二〇年生まれの二神照高さんは、「昭和二〇から三〇年代には、男子だけの行事で全員で全戸を回っていた。その年に不幸ごとがあった家には行かない。竹製の持ち手の長い高張提灯を持って回っていたが、ろうそくの火が燃え移ることがよくあった。そのうち懐中電灯が増え、平成二七年には電球の入った提灯を新調した。」と言う。

(2)　神輿

小神輿が現在まで続いている。一週間から一〇日ぐらい前までに、中学三年の男子が二名神社に集まり、宮司と宮総代（今年は三名）の指導で神輿を組み立てて磨く。

一五日は、子どもも大人も平成二〇年に購入した法被を着て、午前七時三〇分に宮出しをする。神社南のお旅所での神事の後、県道松前八倉線に出て、南組、山郷寺東組などを経て伊予市上野と上三谷にまたがる堤地区に向かう。以前は賀佐地区にも中学生を中心にかいていったが、氏子が堤地区だけになった年から少子化の影響で神輿は車で運ぶようになった。堤地区では二名神社の分祀（分けて祀った社）と依頼された家々を回り昼頃出作に帰る。昭和五〇年代には、賀佐や堤地区の家では野菜の煮しめや炊込みご飯のむすび、菓子や飲み物等手厚くふるまわれ、出作に帰ると、早朝から皮を薄くしたあん入りの餅をついて用意している家などあった。

昼食は、以前は宮司と巡行の大人は氏子の家で賄いを受けていたが、最近は大人と中学生の内のかき夫は集会所で幕の内弁当である。宮入りは午後三時頃で、神輿を解体して終える。今年かき夫は中学生の男子一〇名と女子四名だった。ちなみに、女子は平成二四年に初めてかき夫になった。

また、昭和一二年生まれの弓達武明さんは、「昭和三二年まで、秋祭りの出作の幟はすべて宮総代らが立てて回った。賀佐や堤からも手伝いに来てくれていたが、人手が少なくなり組数も増えたので、次の年からは各組ですることにした。

神輿も獅子も男が担当するもので、女の子はたもとの長い着物にぽっくり下駄をはいて遊んでいた。

自分は一三日から一五日の午前中までは獅子舞をして回っ

写真３　輪越の出店
（獅子保存会提供　昭和56年）

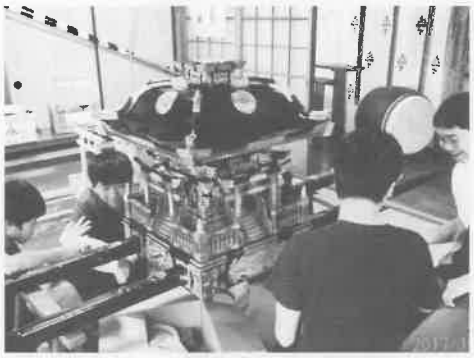


写真４　神輿を磨く中学3年生
（平成29年10月8日）

写真５　お旅所での神事
（平成26年10月15日）

たが、その間、一四日に獅子舞以外の者が大神輿をお宮の西にあった泉で洗い、皆で一五日の昼から夜八時頃までかいた。壊れそうなので綱でぐるぐる巻きにしていた。大正時代に大修理したと神輿に書いてあったから、明治のはじめにはあった古いものだったと思われる。出作は鶴吉の賀佐と伊予市の堤へ行っていたので、その帰りに、小学校の前や北伊予駅前(北伊予駅は神崎地区)などで神崎の神輿と鉢合わせをすることがあった。出作のかき棒が折れたこともあったが、当時出作には大工さんが何人もいて、すぐに新しい棒に付け替えてかき続けた。今の小神輿は昭和四〇年代の終わり頃に新調したが、松山から届くとき、中川原橋のたもとで待っていた子どもたちが出作までかついで運んだ。そして、大神輿も獅子舞も昭和三二年を最後に途切れた。」と言う。

写真6　獅子の奉納初舞
(平成27年10月13日)

写真7　地区の家で演じる子ども獅子
(平成28年10月14日)

(3)　獅子舞

出作獅子保存会が昭和五〇年に発足して復活し、現在に至っている。会員は現在大人一〇名で、子ども獅子が中心である。一三日夕方、社殿で宮司のお祓いをうけたあと家族や地域住民が見守る中で初舞を奉納し、その後集会所に移って夕飯を頂く。一四日の午後から一五日の夜まで回る。今年は九月の末から平日を毎日練習日として参加できる日に参加することとし、小学五年以上の女子五名と小学四年以上の男子四名が保存会の指導を受けて演じた。子どもは、当初六年男子だけだったが、少子化のため人数不足となり、年により学年を下げて人数を確保するようになった。二〇年近く前から太鼓は女子が担当するようになり、さらに、昨年からは女子からの希望もあって女子も獅子を舞うようになった。

個人宅や事業所等を回り、平成に入ってからも賄いを受けることがあったが、最近は、保存会が、一切心配御無用として、すべて屋外だけで済ませるようになった。

また、舞い納めは、それまでは北伊予郵便局の前だったが、交通の安全面などに配慮して、一〇年くらい前から北伊予駅前バス降車場近くの広い駐車場に移り、大勢の見物客が集まるようになった。今年は雨のため舞い納めはできなかったが、昨年の舞い納めでは初めて中学生の女子が獅子を遣い、大人と子ども併せて四頭が並んで勇壮な舞いを披露し喝采を博した。

写真8　復活元年演じた後で記念撮影
(獅子保存会提供　昭和50年)

写真9　復活元年　太鼓は和服
(獅子保存会提供　昭和50年)

先の二神さんは、「去年は出作の獅子の歴史が変わった。以前にも、平成二二年、助成で新調した道具で松前町文化祭に出演して女子が太鼓をたたいた。それが町文化祭で初の女子の獅子出演だった。小学生だったが堂々としたばちさばきに会場が沸き、特別に壇上で紹介されたりした。翌年からは他地区からも女子が出るようになった。」と言う。

写真10　郵便局前の舞い納め
（獅子保存会提供　昭和50年）

写真11　松前町文化祭に出演
（獅子保存会提供　昭和50年）

前出のとおり獅子舞は昭和三二年を最後に途絶えていたが、先の弓達武明さんはその頃の様子を次のように語った。

「獅子は四〇軒ぐらい回っていたので、一三、一四日と、一五日の午前中、それでも残ったら一六日までかかることもあった。昭和三二（一九五七）年には獅子を遣うのは三人に減った。吉祥寺南の消防用ポンプ蔵置所で九月初めから毎日練習したが、太鼓の音がし始めると近所の子どもがのぞきに来ていた。昔の頭は非常に重かったので、重しを入れた木箱を作って頭の代わりにして体を鍛えた。若い頃は『せり上がり（頭を足下から遣う人の頭上まで持ち上げること）の時のひげの揺れ方をそろえるのも大事じゃ』など厳しく指導されたこともあった。太鼓は年長者がたたいてくれた。種類は『出作獅子』、『神崎獅子』、『どんつく』、『四隅』の四つで、三〇分以上になる長いものもあった。復活した時に短くした。」

また、昭和五〇年に四人で発足した出作獅子保存会の一人である弓達伸也さん（昭和二一年生まれ）に聞いた。

「まず宮総代に相談して復活することになった。頭は大字が新調してくれたが、有志からの寄付もあったと聞いた。獅子以外の衣装は地域の洋服店や会員の家族が作ってくれた。中には隣の校区に住む先輩も来て相談しながら教えてくれ、太鼓は祭りの日も先輩が交替でたたいてくれた。獅子、猿、おやじ、かりうどなど四人で交替した。そのうち賛同者が加わり、数年後には小学六年の男子に獅子以外の役を演じてもらうようになった。昭和六二年には、大字に子どもの獅子頭を新調してもらって、六年生の男子が初めて獅子を遣うようになった。その後、平成一五（二〇〇三）年の地方銀行の助成制度、続く平成二二年の松前町コミュニティ助成（宝くじ助成）などにより、頭や太鼓その他の道具を充実させることができた。出作の獅子舞は、こうして、大字の支援や地区住民の協力のおかげで、復活以来四〇年を超えて続いている。」

4　祈年祭と感謝祭

祈年祭は、二月に一年の五穀豊穣を祈願するものである。感謝祭（新嘗祭）は、一一月にその年の収穫に感謝するものである。いずれも、二名神社で神事が執り行われ、区長と宮総代が参列する。

5　敬老祭

五月に、高齢者を招待して大字が主催する祭りである。二名神社に依頼し、高齢者の健康長寿を祈願するものである。二名神社での神事の後、集会所に移動して祝いの宴を催す。参列者は、七五歳以上の希望者と寿会会長、区長、宮総代などである。

四　神崎

（一）概況と氏神さま

松前町の南東部、北伊予地区の中心部に位置する。この一帯は伊予郡内で最も早くから開発されたところとみられ、延喜式内大社の伊豫神社が鎮座することから、伊予郡六郷のうち神前郷はこの地域と思われる。また、江戸時代この神崎の南部を南神崎村（現伊予市上野・宮下）と呼んでいたので神崎庄はかなり広範囲を占めていたと思われる。神崎内には条里制の遺構と思われる壱丁地・四反地・北ノ丁などの小字（ホノギ）地名がある。

また数多くの湧水泉などから重信川（旧伊予川）の旧河道であったと推定され、福徳泉（旧おどろ）は現在も清水が湧き親水公園になり町民に親しまれている。氏神さまは隣の鶴吉地区とともに伊豫神社、壇寺は伊豫神社の別当寺曹洞宗晴光院で、ともに神崎小斉院にある。

伊豫神社は、『延喜式神名帳』に伊予郡四座（伊豫・高忍日賣・伊豫豆比古命・伊曾能神社）の一つに記載され、その中でも最も格式が高い名神大社である。古くは親皇宮（俗にしんのぶ様）、また親皇宮大明神といったが、のちに伊豫神社と改めた。

明治四年松山藩時代の伊豫神社の祭礼は、かつて旧暦八月二二日（現在の九月末ころ）であったが、藩命により古泉村西分の玉生八幡大神などとともに八月一五日に変更している。

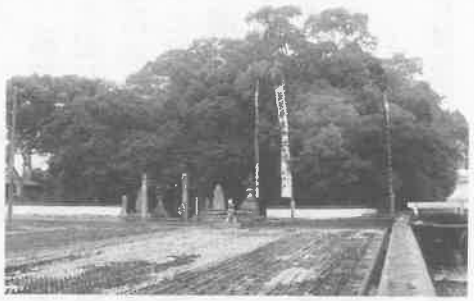


写真1　神崎・鶴吉の氏神「伊豫神社」
（平成29年 秋祭りの日）

その間、明治一〇（一八七七）年は一〇月八、九日、現在の日に変更されたのは昭和一一（一九三六）年である。なお、明治六年神山県時代は郷社（県社）といわれたときの神崎・鶴吉合わせた氏子数は一六九戸である。なお平成二九年四月現在の世帯数は六一九、人口は千四百九十四人である。

（二）季節を彩る祭り

1　春祭り

深沼静明さん（明治三二年生まれ）は「春祭りは四月二一日（現四月二九日）、昔は子ども相撲を行って居た。景品には学用品などを貰ったが今はやらない。今は神崎鶴吉合同で敬老会を催して居る。」と自著『つれずれに』（平成一七年刊）に記している。

また、水口義一さん（大正九年生まれ）は自著『ふるさと回顧』（平成二二年刊）で、「殆どの家で餅をついて祝っていた。境内では子供相撲や演芸もあり、出店もきて今よりは賑わっていた。北伊予地区内でも春祭りの日が神社により違っていたが、生活改善により北伊予地区は四月二九日に統一された。」と記している。

池内初好さん（昭和一〇年生まれ）は、「祭り当日の春祭演芸大会は青年団が盛大に芝居をしていました。」（写真2）

写真2　神崎青年団春祭演芸大会
出演者（昭和30年4月21日 神崎座）

写真3　子ども相撲
（平成29年4月29日 伊予神社境内）

また元区長の水口孝雄さん(大正一五年生まれ)は、「境内の神馬址近くの土俵では、男だけの子ども相撲があり、各学年ごとに五人抜きには御幣と帳面や鉛筆などの副賞が与えられていた」と言う。

祭りの日は四月二一日から昭和天皇誕生日(現昭和の日)の二九日に変わった。子ども相撲は小学生対象に引き続き行われているが、土俵の場所は平成一四年頃、本殿南の広場に移り、女子のケンケン相撲が始まった。

2　夏祭り(輪越祭)

前出の深沼さんは「拝殿に御神燈を沢山吊るし、カヤの環を拝殿の上に作り神様を祭って居る。参道には売店がずらりと並んで賑やかだ。余興には万歳、浪曲等があったが、現在は民謡、舞踊、詩吟等、老若男女合体で賑やかに一夜を過ごす。」と『つれずれに』に記している。

また、同じく水口義一さんは『ふるさと回顧』に、「萱の環をくぐりお参りするので『輪ごし』とも言っていた。暑い時期で、ご馳走もせず親戚の交流もなかった。演芸は万才などがあり、古老の造り物もあって盛大だった。」と記し、さらに「茅は大谷池や重信川で二〇把くらい採り両地区の社寺や役員が茅の輪を作り拝殿の入り口に据えます。また参拝するときは環をくぐって入り、外から出ます。輪越の前夜、人形は自分の蒲団の下に敷き体を撫で、年齢・氏名を書き参拝時に初穂料を添えていっしょに納めます。以前は境内に二〇軒くらいの業者が屋台を出し賑わっていました。今とは大違いです。」と記している。

前出の池内初好さんは、「昔も今も夏祭りの輪越は、神崎・鶴吉合同で企画・準備し、以前とほぼ同じ形で行われている。お楽しみの納涼演芸大会は前日両地区の役員が小屋掛けした境内の特設舞台で例年通り今年も行われ好評を博したが、祭りへの若者の参加が年々少なく、参拝者そのものも減少傾向にあると聞く。出店も愛護、PTA、青壮年部のみでかつてほどの賑わいはない。」と言う。

伊予神社の夏祭りは、昔と変わらず七月三〇日である。水口義一さんは「夏祭りは現在氏神様により松前町内祭日が統一されていない。」(『ふるさと回顧』)と記す。

前出の水口孝雄さんに、祭りの祭司宮司さんについて聞いた。「現在の星野宮司さんは私が区長のときお願いに行き了解していただいた。あれから三〇年近くになります。その前の宮司さんは神崎の池内さん、少し前は髙市さんでした。」

3　秋祭り

深沼さんは「一三日朝、各組毎に大幟を立て幟の間に竹を渡して御神燈を吊す。」と記し、水口義一さんは「早朝組の連中が幟立をする。」と記し、神崎地区内では秋祭りだけ、かつての組にあたる八か所に幟を立て祭りを祝う。

さらに水口義一さんは、獅子舞について「部落内の殆どの各家を一軒一軒回っていた。田舎家は家屋内の土間が広く(農業の夜間の仕事場であったから)むしろを七、八枚敷いて舞っていた。大小太鼓の調和のとれた祭独特の大太鼓の音は、秋の田舎の遠

写真４　茅の輪をくぐる輪越
(平成29年7月30日 伊予神社)

写真５ 夏祭り納涼演芸大会

くまでよく響いていた。各家で獅子舞と狩人と小猿、最後に青年の二人一組で組体操をし一軒分が終わっていた。当時は村の青年が多く、舞い手、太鼓たたきに事欠くことはなかった。その家々ではお菓子、あるいは酒肴で、それぞれ賄っていた。別に祝儀の金一封を出していたように思う。その獅子舞を見に行くのがお祭りの楽しみのひとつであった。小さい女の子、娘さんもきれいな和服に着飾って、ぞろぞろと移動にもついて回っていた。和服姿は翌一五日のみこしが出る日と二日間きかざっていた。」と記している。

池内初好さんは、父親の影響もあり小さい頃から獅子舞に慣れ親しんできた関係で、昭和四七(一九七二)年発足した「獅子舞保存会」の中心として、また一時休止していた獅子舞を復活するなど長年の運営や子どもの演技指導に携わってきた。その池内さんは「練習する家は、土間が広く部屋が二間続きの家で、踏み台(下は下駄箱、腰かけて太鼓を叩くところ)のある百姓家です。練習するのは五軒ほどの定宿がありました。昔は毎年五〇軒ぐらい獅子を入れていたので、『掛け流し』と言って褌を外さず、六軒ぐらい連続で舞っていました。雨天の日は座敷で『座り獅子』と言って脛で舞う形をとってやっていました。各家々でご祝儀を頂き、その上ご馳走になっていましたが、何年か前からご祝儀として一万円を各家から頂きますが賄はないので、昼食は集会所でしています。ただ、以前と大きく違うのは平成一二年から中学生の女の子が太鼓たたきで入ったことです。女の子はリズム感がよく三日ぐらいで覚えました。」と話す。

獅子舞は、勇壮華麗な獅子の競演のほか、「おやじ」や「狩人」などの出し物があり、「おやじ」の小猿に出る子どもは中学生とともに熱演し喝采を博した。

一五日は神輿の巡行日。水口義一さんは、「神輿をかついで部落を回った。大みこし、小みこしが出て部落をまんべんなく回っていた。勿論神主さんも同行である。『くまどり』と言って、年に一度神様が家の前を通るのだ。家内中、皆家の前に出て、ご餞米に南天の葉でおはらいをし、拝むのだった(写真11)。そのお米は後で『おくま』と言って集め、昔は氏神様へ献上していた。みこしは部落の役員や有志の家へ入れ、かき手の他子供、特に男子はいろいろご馳走になっていた。現在は女の子も共に同じ

写真6　勇壮華麗な獅子の競演
(平成22年10月15日)

写真7　「おやじ」を演ずる子どもたち
(平成29年秋祭り)

写真8　太鼓をたたく女子中学生
(平成18年秋祭り)

写真9　神崎獅子舞保存会のみなさん
(昭和59年秋祭り)

ように回っているが、当時の女の子は着物を着て見るだけだった。宮出しや宮入りの時は他の部落のみこしと鉢合わせの喧嘩もしていた。時代の流れで現在は部落によっては大人みこしが出ないところも多くなってきている。」と記し、さらに「当時は年に一度の秋祭りで、お餅はつくし、すしはつける大ご馳走をいっぱいする田舎一番の大行事であった。普段は粗衣粗食であったが、祭りは総てが一変していたように思う。」と回顧している。

深沼さんは、「一五日神輿の日、早朝神崎、鶴吉の神輿が氏神様から出る。順番は鶴吉、神崎の順。之は昔から変わりは無い。伊豫神社の祭神は二神を合祀している。神輿の『ユタン』(神輿の屋根にかける布)は神崎が青、鶴吉が赤で女と思ふ。まず御旅所へ行って神事が行われ、それから字中を担いで廻る。御輿を入れた家では、お酒、肴、オニギリ、菓子等の御馳走が出る。お酒がまわるに従って追々賑やかになり御輿も荒くなって来る。神輿の巡回路は、御旅所から角店に出て、大間街道を北進する。何をするにも東から西へと云ふ事が常識の様に思われるが反対だ。昔、御庄屋さんが新屋敷にあったらしい。(中略)大正時代から東の山王組から西へ行く事になった。」と記している。

今年の秋祭りは、終日雨に見舞われたが、日曜日とあって消防団を中心とした若者がかき手として大勢参加し盛況であった。お旅所から小・中学校、集会所や老人施設、企業などを巡行し、組長宅や役員、個人宅は新築の家など八軒、各家々で酒や賄の歓迎を受け、子どもたちも家々で袋詰めのお菓子を貰い大喜びである。近年、自治会で決めた秋祭りの申し合わせで、神輿を入れる家での賄や子どもたちへのお菓子についても、各戸に過分な負担を掛けないように配慮されているものの、必ずしも実行されていない。

写真10　お旅所に向かう大人神輿
(平成29年10月15日)

写真11　「おくま」をする住民
(平成22年秋祭り)

写真12　大小神輿のかき比べ
(平成29年10月15日)

(三)今後望むこと

近年の祭りの傾向として、社会情勢の変化によるものか、価値観の多様化や信仰心の低下によるものなのか、昔に比べ今一つ地域全体としての盛り上がりに欠け、一体感が希薄になった感がある。昨今「くまどり」で巡行してきた神輿へ「おくま(供米)」を行う家はわずか数軒、また玄関先に出て神輿を迎える家も少なく、秋祭りの伝統儀礼は様変わりしてきた。

今こそ、氏神さまへの畏敬の念と伝統ある祭りへの誇りをもち、住民の連帯意識高揚のため、コミュニティーづくりに真剣に取り組む時期にきている。

「村の鎮守の神さまの今日は楽しい村祭り……」と童謡に歌われた素朴な祭りの原風景をもう一度取り戻したい。住民の一人一人が、それぞれの立場で祭りに参画し、将来を担う子どもたちが感動を味わい誇りに思う祭りにしたい。

五　鶴　吉

（一）地区の概要

鶴吉は伊豫神社の南側から県道八倉松前線と長尾谷川に沿って八組からなっており、大まかには地区の東端に三軒屋、県道に沿って本村（上・中・下組）、長尾谷川沿いに安井（東・中・西組）、地区の西端に賀佐が位置している。大きな施設としては国体のホッケー競技会場に使用された町民グラウンドや特別養護老人ホーム鶴寿荘がある。平成二九年四月現在の世帯数は三四九、人口は八八〇人である。

（二）稲荷神社の祭り

区長や社寺総代をした峰岡良男さん（昭和一五年生まれ）と佐伯和雄さん（昭和一八年生まれ）に聞いた。

１　初午祭

稲荷神社は鶴吉の安井、賀佐地区を氏子とする神社で、安井西組に祀られている。歴史を感じる楠の大木が目を引く社殿である。

毎年二月初めての午の日、夕刻から五穀豊穣を祈る初午祭を伊予市稲荷神社の星野宮司を迎え執り行っている。

従来から安井、賀佐地区の四組から順番に世話役を出し準備、接待等の段取りに当たってきたが、加えて近年は愛護部の奉仕によりおにぎり等が振る舞われるようになった。開催に当たっては、各戸からの寄進を募ると同時に、従来は子どもたちが中心になってリヤカーで地区を回り焚き木を集めていた。焚き木は境内の一角に積み上げられ神事に併せて火が点けられる。この行事は火を焚いて稲の害虫退治を願うものであるらしい。大きな炎が上がるため、消防団の立会い協力も願っている。神事の後、寒い中ではあるが、拝殿において直会（神事の後、供物を下げてする酒宴）を行い、地区住民の親睦を図っている。氏子は鶴吉の四組の住民ではあるが、世話役は鶴吉全体に参加を呼びかけ鶴吉全体でお祭りしたいと願っている。

写真１　稲荷神社の全景
（平成29年10月）

写真２　稲荷神社での神事
（平成29年10月）

２　春祭り

以前は稲荷神社の春祭りは四月二一日に行っていたが、松前町の合併に伴い伊豫神社の春祭り（四月二九日）に合わせて催されるようになった。祭礼当日は境内において、安井・賀佐地区の保育所・幼稚園児・小学生・中学生を対象とした子ども相撲が行われる。子ども相撲の運営は中学三年生が主体となって行っている。開催に先立ち各戸からの寄付を募ると同時に御幣を作るため、谷上山方面から孟宗竹を調達している。相撲は勝ち抜き戦で行われ五番げし（五人抜き）、七番げし、十番げし等の賞品が付与されている。昔は賞品の御幣の中に賞金が入れられていた。

また、御幣を勝ち取った子どもは家に持ち帰り、稲の苗代を作る際に、苗代の水口に稲の豊

写真３　子ども相撲の土俵
（平成29年4月）

写真４　子ども相撲の御幣
（平成29年4月）

穣を祈って立てられていた。

一方、本村地区においても伊豫神社のお旅所（本村）において同様の子ども相撲が行われている。

昔は土俵を作るため松前の浜へリヤカーで砂を取りに行くのが大きな行事であったという。子どもだけで砂を取りに行って浜の人に怒られたこともあったようだ。

鶴吉の中で、三軒屋地区だけは子ども相撲が行われていない。三軒屋地区では現在、ご祈祷も行われていないことを含め後述の竈神社の存在が関係しているものと思われる。

（三）三軒屋地区の竈神社について

三軒屋地区には「へっついさん」と呼ばれていた竈神社があり、固有の祭事が行われていた。祭神は奥津彦命、奥津姫命で無病息災と五穀豊穣を祈願していた。小社ながらも松林の参道があり幟も立てられていたそうだが、明治四二（一九〇九）年境外末社として伊豫神社に合祀（一つの神社に合わせ祀ること）され、現在は伊豫神社拝殿の北側に祀られている。（『北伊予の伝承 Ⅱ』より）

写真５　竈神社拝殿
（平成9年12月）

（四）伊豫神社の祭り

１　夏祭り（夏越祭）

伊豫神社（神崎・鶴吉の住民が氏子）において七月三〇日に行われ、「輪越」とも言われている。神崎、鶴吉の社寺総代をはじめ、大字、公民館役員が中心となり運営されている。また、「くぐり輪」は有志により長尾谷川河川敷に自生している茅を刈り取り作成し、拝殿入口に設置している。

一方、祭りを盛り上げるため、平成一〇年頃から拝殿横に舞台を設置し、神崎・鶴吉合同での演芸大会が本格的に開催されるようになった。今ではカラオケや舞踊、漫才等老若男女二〇数組が出演し、多くの参拝客を楽しませている。

境内では神崎のＰＴＡや愛護部、有志による夜店が出店されるなど、賑やかな一夜となっている。

さらに峰岡さんと佐伯さんに聞いた。

「昔からの言い伝えとして、夏祭りまでには田の草取りを済ませておけと言われていた。当時、草取りは『コロガシ』とか『八反ずり』を使用して人力で行われていた。暑い盛りの重労働であったから、祭りまでにしんどいことは一段落させて祭りを楽しめということだったのだろう。」

写真６　有志により作られた茅の輪
（平成29年10月）

２　秋祭り

前出の峰岡さんと佐伯さんに聞いた。

「伊豫神社の氏子である神崎の神輿が男神輿であるのに対し、鶴吉の神輿は女神輿と言われており、神崎は青色、鶴吉は赤色の『ゆたん』で飾られる。昔は鶴吉の神輿は安井地区の稲荷神社に置かれていたと聞く。

また、現在鶴吉の神輿は子ども神輿だけが巡行しているが、昭和四〇年頃までは大神輿も巡行していた。昔、鶴吉の大神輿が担がれていた当時はお旅所を出たら直ぐに、神崎と鶴吉の大神輿が本村地区において激しく鉢合わせをし、田んぼに転がり込んだこともあった。宮入り時にも時間を合わせて鉢合わせをしていた。しかし、かき手が減少する中で神輿を最後まで巡行することができなくなり処分したと言う。」

一方、出作の神輿が賀佐地区および伊予市の堤地区へ巡行するには伊豫神社の側を通らなければならないため、神輿同士が出会わないよう、出作の神輿は伊豫神社の宮出し前に通過するようにしていた。なお、賀佐地区は平成一六年伊豫神社へ氏子替えしている。

また、祭りに関して、松田英一さん(大正一四年生まれ)に聞いた。

「昔は組内の世帯数が少なく親戚筋が多かったため不幸事があった時などは数多くの幟を立てるのに苦労していた。そのため、幟竿は今は神社拝殿の下に保管し台車で運んでいるが、当時はなるべく近くの長屋門に置いていた。幟竿が折れることがあったが、その時は大谷池の方へ、檜は丈夫だが重かったので杉の木を調達しに行って四、五人で担いで帰っていた。」

写真7　宮出し風景
(平成29年10月)

写真8　お旅所での神事
(平成29年10月)

3　秋祭りでの獅子舞

前出の松田英一さんや日野雅男さん(昭和三二年生まれ)に聞いた。

「獅子舞については、昔は安井地区と本村地区においてそれぞれ別々に踊り継がれていた。安井地区の獅子舞は男獅子と言われ勇ましい踊りであり、本村地区のものは女獅子と言われ上品な踊りであった。獅子舞は安井地区ではずっと継続されていたが、本村地区では途絶えていた。昭和五〇年頃、安井、本村地区が一緒になって『鶴吉獅子舞保存会』を設立し本村地区の活動を復活するとともに、それぞれの踊りを一本化した。踊りの種類には、『からとび』『ぬけ』『どどいつ』『すねつき』『つめかみ』『いもほり』『かみどり』『おおぎ』『ほらげ』の九種があり、『かみどり』が一番勇ましく長くて(二〇分程度)しんどい踊りであった。あとの踊りは一〇分程度の短いものであった。

獅子舞は神輿の巡行と一緒に各組を回って踊っていたが宿が多い場合は二日間かけて踊っていた。宿になっていたのは新築の家や大字役員の家を中心に十数か所あり、宿の庭や倉庫の広さに応じて大きく踊ったり、小さく踊ったりしていた。

当時は小学校高学年になると有志として参加し練習に励んでいた。例年、祭りの一か月くらい前からJAの倉庫、広い納屋や公民館を借りて練習を始め、本番の一〇月一四、一五日を迎えていた。練習時間は太鼓の音が大きいため夜六時半頃から九時頃までの二時間余り行っていた。太鼓には大小の二種があるが獅子舞の要は大太鼓であり、踊り全体をリードしていたので一番大事なポジションであった。鶴吉の太鼓の叩き方は激しいと言われていた。太鼓は狸の皮で出来ており高価なものであったため、どちらも一人前になるまで太鼓そのものを叩かせてもらうことが出来なかった。そのため段ボール箱やむしろを太鼓代わりにして練習をしていた。

踊りの方は、箱獅子を持って練習していたが、踊り手の頭が獅子の胴体から突き出るといけないので頭を腕に精一杯引っ付けて箱頭を持って踊っていた。厳しい練習であったが獅子舞を踊ることや神輿を担ぐことによって、足腰を鍛え稲刈りの重労働に耐える体作りを行っていたのだと言う。

同時に獅子舞の間に演じられる『いれは』(獅子が出ていない場面)には狩人、親爺、猿、キツネなどが、また、『はにわ』(獅子が寝ている場面)には二人かさ、二人けんど、一人けんどなどの出演者がいたが、これも練習に励んでいた。

また、獅子舞は『厄除け』のためのものであることから、神輿とは異なり不幸事があっても皆が参加していた。

活発に活動していた当時は、北伊予地区の代表として町民文化祭をはじめいろいろな催しに積極的に遠征参加したりしていた。一番華やかだったのは、昭和五八(一九八三)年伊予高等学校開校式で獅子舞を披露したことであった。

保存会発足当初は三〇名余りで活動していたが、新人の参加が少なく、中心的な人たちが亡くなったことなどに伴い『鶴吉獅子舞保存会』は平成一〇年頃に活動を停止することになった。

現在、獅子頭やゆたん(鈴の付いた獅子の胴体布)、ズボンなどの衣装類や小道具は鶴吉公民館に保存されている。」

(五)れんげ祭り

獅子舞や大神輿巡行など従来からの伝統的な催しの一部が寂れてしまう一方で、新しい取組を起こそうとする努力も行われている。その一つが神社に関わる祭りではないが「れんげ祭り」であり、四月下旬、れんげの開花を待って行われる。鶴吉環境保全会代表久津那良一さん(昭和二八年生まれ)に聞いた。

写真9　れんげ畑での宝探し
(平成29年4月)

「鶴吉環境保全会の景観保持活動の一環として、愛護部、婦人部、消防団、有志の協力を得て鶴寿荘とその周辺圃場で開催している。当初は現在の会場から離れた場所で行われていたが、もっと多くの人、特に高齢者にも楽しんでもらおうと場所を移し定着してきた。『れんげ祭り』の準備は一〇月の子どもたちによる種蒔きから始まり、保全会会員が世話をして見事なれんげに育てられている。」

祭り当日の会場では餅つき、ぜんざい、パットライスの実演配布のほか、鶴寿荘からは焼き芋が提供され参加者に喜んでもらっている。

また、咲きほこったれんげ畑においては子どもたちによる宝探しが行われるなど、多くの参観者が春の陽気を満喫するとともに、世代間の交流を深めている。

(六)次代へのおもい

今回のテーマについて、古老、先輩諸氏に記憶をたどっていただいたが、十分には把握出来ない部分もあった。昔をよく知る人々が健在な折に聞き取りをしておけば良かったと反省している。また、鶴吉の誇る伝統文化であった獅子舞についても、当時中心となって活動してきた人でさえ、「今となっては太鼓の節回しは覚えていてもなかなか叩けるものではない」と言われる。いったん取組が途絶えてしまうと伝統文化の復活は至難の業であると思う。

さらに、経済的な観点からも、獅子舞道具類の維持管理においては祝儀を貯めて修繕していたと聞く。活動を支えてきた方々の一方ならぬご苦労が偲ばれる。継続していくことの大事さ、難しさ、いかに多くの労力を伴うものであるかを痛感した。

祭りが盛大に行われ継続している地域においては、子どもたちが主体的、積極的に祭りに参加し感激と感動を味わい、生涯祭りに関わっている。最近、鶴吉は子どもの数が増えてきている中で、祭りに子どもたちを巻き込みワクワク感を味わってもらうと同時に、社会環境や住民意識の変化に合わせ、柔軟で弾力的な対応をしていくことも将来の各種行事の維持継承にとって必要なことではないかと思われる。

六　横田

(一)地区の概況

横田は北伊予地区の南西に位置し総面積(河川・道路等を含む)は七八㌶で、南から村組(三〇戸)、南組(一一戸)、北組(三九戸)の三集落から成り立っています。これらの「組」は一部の行事(例えば御祈祷、地蔵祭り等)はそれぞれが独自に行っています。現在の地区世帯数一一三、人口二六五人、北伊予で最少であると同時に昭和三五年(三四〇人)からの推移でみると人口減少が生じている唯一の地区です、その幅は七五人、ほぼ二二%減と決して小さい数ではありません。このような住民数の減少は地区の諸行事の形・運営に様々な変化をもたらしています。もちろん「祭り」も例外ではありません。

表1　横田人口の推移

年		人　口
元禄	元年	224
昭和	35	340
	40	341
	45	320
	50	325
	55	305
	60	296
平成	2	291
	7	282
	12	272
	17	278
	22	275
	29	265

(二)神社

幟が立つと一挙に「お祭りだなあ」という気分になります。幟には「奉献」という字を冠してその地区に関係する神社名が書かれていますが、横田に立てられる幟には玉生八幡宮、素鵞神社、天満宮の三社の名がみられます。

玉生八幡大神社　西古泉にあるこの神社は松前・岡田・北伊予のそれぞれの一定地域にまたがる広い氏子域を持つ神社で、これらの域内にある神社とも様々な関わりを持っています。秋の例祭日に全地区からの代表者が参列(横田からも宮総代の二名が参加します)して行われる「お旅所神事」は、未明の幽玄な雰囲気も加わってこの神社が地域の中核神社であることを強く印象付ける厳かな神事です。なお、氏子の皆さんは「たもうさん」と親しみを込めた呼び方をしています。(以下「玉生神社」と表記します。)

素鵞神社　横田にあるこの神社は慶長三(一五九八)年の疫病の流行を契機として創建された神社で、幣殿には「祇園社」の額が掲げられていますが、明治政府の神仏関係の諸方針のもとで素鵞神社と改名されました(注)。以前は「オテンノウサン」と呼ばれていました。玉生神社の文書に「祇園天王社」の名称が記載されており、これに由来する呼称のようですが、若い人にはあまり使われなくなりました。春夏秋の祭りの神事は玉生神社の神職の方が来られて執り行われています。横田の住民は、この二社の二重氏子となります。

(注)祇園祭で有名な京都の八坂神社(旧名「祇園社＝祇園感神院」)も、この時、同じ理由で名称が変更された神社です。

天満宮　この社は、現在は無くなっていますが、明治九(一八七六)年に作られた畝順帳(注)に「村中総持」と表記された土地(村組の県道東側)があり、ここに社がありました。明治政府の方針により素鵞神社へ合祀され、跡地は農地になっています。老人の中にはこのような経緯からこの田を「天神田」(天満宮の別名)と呼んでいる方がいます。

(注)明治初期、地番(一筆)ごとに面積、所有者、隣接道路、水路等が記された土地台帳(反別畝順帳)が村ごとに作成された。

(三)春祭り

神様を村里にお迎えし、春の訪れとともに始まる農事の順調な進行とこの年の豊作を祈る、同時に暖かさとともに活発になる疫神や悪霊を追い払っていただく、これが春祭りとされています。

この祭りの行事は神社で行われる子どもたちによる相撲です。相撲を奉納するとともに、そこに集うこどもたちの健やかな成長を見守っていただくという神事として発祥したものといわれます。この相撲も現在と五〇年前(昭和三〇年頃)とでは様々な違いが生じてきています。その移ろいを見ていきたいと思います。まず土俵です。以前は地面を掘り下げて、その土は外周に盛り上げていました。そして掘り起こした部分には中学生が新川海岸まで取りに行った砂を入れました。今はスコップで土を柔らかくするだけで当然盛り上げた外周土塁はありません。俵も藁と縄で毎年新調していましたが、今は長期使用に耐える資材に縄を巻いたものを使っています。もっとも砂については昭和三一年に「海岸法」が成立し採取ができなくなったという事情はあります。相撲の内容にも変化が生じました。取組はかつては一〇人抜き、五人抜き(それぞれ十番ゲシ、五番ゲシと言いました。)といった同程度の学年の子ども間での勝ち抜き形式で、それに応じた賞品(文房具)が与えられていました。「少年」たちは熱気にあふれた、時には激しい相撲をとっていました。今はこの形式は廃止され、また、女の子も参加するようになって、優美な相撲風景も見られます。これらの背景には児童数が減少した(表2)ことがあるようです。

相撲の参加者に授けられていた御幣は平成二七年から作られなくなっています。

ところで、春祭りには今となっては懐かしい光景がありました。境内の回りに数軒の露店の店が出ていたことです。売っているものは色とりどりのニッケ水(飲料水の一種)、練り飴、子どもの喜びそうな景品が当たるくじ、などでした。昭和五〇年代中頃くらいまでのことです。

写真　春祭りの子ども相撲

なお、地区によって異なっていた北伊予の祭礼日(横田は四月二六日)は松前町が成立(昭和三〇年)する少し前に四月二九日に統一されました。ある老人が他地区の祭礼日をほとんど覚えているので不思議に思い理由を聞くと「昔は祭りの日には親戚同士で呼び呼ばれしよった。それが楽しみでほかの地区の祭りの日も暗記しとったんよ。」と言うことでした。

(四)夏祭り

祭りの祭礼日は七月二〇日ですが、神社に幟が立てられ、神職による神事(宮総代二名のみが参加)が行われるだけで住民が直接参加する行事はありません。以前南組では神社へ向かう道沿いに正面＝「御神燈」、側面＝「夏祭り」と「組中安全」と書いたぼんぼりが立てられていました。昭和五〇年代末頃立ち消えとなった祭事です。

表2　横田の小学校児童数推移

年	昭和37年	47年	60年	平成29年
生徒数	48人	37人	25人	18人

(五)秋祭り

1　獅子舞

早生品種の稲の刈り取りも終わり一〇月になると公民館から太鼓の音が漏れ聞こえてきます。獅子舞の稽古の始まりです。参加しているのは狩人・猿・キツネ役の未就学児から小学生はほぼ全員、中学生も相当数見られ(太鼓の練習が人気があるようです)実ににぎやかな会場風景です。このような活気ある光景が繰り広げられている原点は平成二年に遡ります。

戦後青年団を中心に隆盛を極めた横田の獅子舞も五〇年頃からは愛好家まかせの運営で、先々が案じられる状態となっていました。

こうした状況を区長経験者として見ていた岩崎利雄さん（昭和一〇年生まれ）が「大字が関与してでも技量の継承と将来に向かって持続可能な組織作りが必要」という思いにかられ、若手に奮起、協力を要請、また往年の練達の獅子遣いや太鼓たたきの方々にもこの意向が伝えられました。当時の練習について、今の中心メンバーの一人金子知芳さん（昭和三一年生まれ）は、「指導のために集まってくれた人数、顔ぶれ、熱心さに、何としてでも残したいという思いをひしひしと感じました。」と感慨深く述べています。数年後この活動主体は「横田獅子舞保存会」と呼ばれるようになり、小部落のうえに少子化による人員の確保の問題を抱えながらも、女子の参加を得るなどの工夫を加えながら冒頭に述べたような活況を維持しています。なお、平成一六年には地元銀行から郷土芸能分野での助成金を受けることができ、諸物品の充実が図られました。

ただ、少し残念な話もあります。横田の獅子舞には「山探し」、「振り出し」、「上通り」の演目がありましたが、このうち「上通り」は演じられる人が亡くなり伝承がかないませんでした。なお、祭り当日は、かつては希望する家で舞われていましたが、今は地区内の決まった場所（三か所）のみとなっています。

2　仁輪加

横田の仁輪加（素人が座敷、街頭で行った即興滑稽な寸劇、茶番狂言）については既刊（『北伊予の伝承 Ⅸ』）に詳しく紹介なされています。そこでは仁輪加には獅子舞の獅子が眠るときに飛び入りでやる「一口仁輪加」と旧家の広い土間に幕を引き、観客が居間から見物する「仁輪加芝居」の二種類があったとされています。もう絶えて久しい催しです。この度、金子忠行さん（昭和七年生まれ）が「横田はよもだが多かったんよ」と言いつつ一口仁輪加を幾つかと仁輪加芝居から歌舞伎に題材をとった「お軽勘平」の落ちの部分をやってくださいました。いずれもよどみのない明るい口調でした。ここに一口仁輪加から「闇夜の烏」を紹介しておきます。

獅子が眠る場面　拍子木が打たれ「東西東西これから横田の仁輪加の始まり……」

（ご隠居さんと何かと聞きたがりやの男の登場）

男　ご隠居さん、今日はどこへ行きよるんぞな？

隠居　今日はのう、横田の仁輪加が面白い言うんで見に行きよるんよ

男　ほう、それはそうといったい何を持っとるんぞな？

隠居　このことか？（真っ黒に塗った画用紙を出す）これはのう、大事なお宝で狩野法眼が画いた「闇夜のカラス」言う名画よ！カラスが何羽画かれとるかわかるか？わかるまいのう。五羽おるんじゃ。（画用紙を両方から押したりゆるめたりする）ゴワゴワ＝五羽五羽いいよろが。ところがのう、これはほんとの名画じゃけんわしが気合を入れたらカラスの数が減るんじゃ（紙を押しまるめる）

男　ご隠居さん、折角の名画をもみくちゃにしたらいくまいがな！

隠居　見てみい。さっきの五羽がシワ＝四羽になっとろが！

二人が声を揃え「**仁輪加じゃー**」

（再び太鼓が鳴りだし、獅子が目覚めて踊り始める。）

（仁輪加がいつまで演じられたのかは定かはでありませんが、

昭和四〇年頃までとの説が有力です。）

3　神輿

戦後昭和二一（一九四六）年には、戦時中の中断から復興した横田の大神輿は昭和三〇年代後半からは担ぎ手不足で毎年の渡御が難しくなっていました。結局昭和四三（一九六八）年に「明治百年を記念して最後の渡御をやろう」ということになりました。「その年は高校一年生で試験中じゃったけど、一回は担いでおきたいと時間をやりくりした。」とその年の思い出を篠崎保さん（昭和二七年生まれ）が語ってくれましたが、結局この人が大神輿を担いだ一番若い人ということになります。その後この神輿は倉庫で保管されていましたが、平成一二年一二月玉生神社へ奉納され、現在もそこに安置されています。

横田に子ども神輿ができたのは昭和四七年です。篠崎吉夫氏（第九代北伊予村村長）から寄贈されたものです。一〇月一五日早朝、玉生神社の「お旅所神事」で羽車に移された「御霊」は素鵞神社（横田）での「御霊移し」の神事によりこの神輿へと移されます。宮出しは八時三〇分、渡御は小・中学生により行われ、神職、宮総代、愛護部の責任者が同行します。地区内約八〇軒を回り宮入は午後三時頃になります。神輿が回ってくると各世帯はおくま（神に供えるお米）を奉じ、神職よりお祓いを受けます。なお、特に希望する家（毎年一〇軒程度）ではその家で神輿を降ろし、神職は家の中の神棚で神事を行います。「神輿を入れる」と言います。なお、大神輿の頃は神輿を入れると酒はもとより煮しめ、むすび等でもてなしが行われていました。

ところで、横田の大神輿については横田が新調したものでないという点では一致していたものの、その出所については鶴吉と新立の二説がありました。平成一二年の奉納時に簡単な分解をしたところ、内部に「鶴吉村大政〇〇」との墨書きが見つかり、この件は決着を見ることができました。一方、横田がこの神輿を持つようになった経緯については、老人が子どもの頃祖父から聴いたという文字どおり「伝承」された話がありますので紹介しておきます。（本人は「何分昔の話で私も小さかったので確証は……」と言っておられますが。

《明治時代に横田には神輿は無く、浜村の新立組と本村組が交互に横田への渡御をしてくれていた。ある年当番であった新立組の到着が大幅に遅れ、これに激怒した気が荒い者が乱暴行為におよび結局警察沙汰となった。これに懲りて本村・新立は「横田への渡御は今後できかねる」ということになり、そのかわりとして横田が独自に巡行ができるよう古神輿を工面することとなった。なお、騒動の際、新立の頭取（運行責任者）は「横田の人には決して手を出すな」と立派な統制指揮を執った。》

神輿の出所に鶴吉、新立の二説が流布していたのも頷ける内容かと思います。なお、「事件」ともいうべきこの話についての新聞記事は見つかりませんでしたが、明治二三（一八九〇）年一〇月三一日の海南新聞（愛媛新聞の前身）に、本村と新立の秋祭りの喧嘩がこじれ、この年の当番であった本村組の横田への渡御ができなくなったこと、これに対し横田が「渡御すべし」と強硬な談判に及んだこと、を内容とする記事がありました。老人の伝え聞いた話の背景にあった神輿の渡御に対する当時の横田住民の感情をうかがい知ることができる内容です。（浜村の本村と新立の両組が横田へ神輿の渡御を行うようになった事情については、両地区を氏子域とする玉生神社が調査を行ってくださっています。）

七　大　溝

（一）地区の概況と氏神さま

松前町の中南部の農村地帯、明治二二（一八九〇）年市町村制が実施されるにあたり本村地区と原田地区が合併し大字大溝が発足した。大溝本村は、開拓・治水工事の祖神である大山昨神を祀って、村の発展を祈願してきた。

その結果、元禄元（一六八八）年の『伊予郡廿四箇村手鑑』によると、平均耕作面積は約七・三反（一反・一〇ルアー）で、松前町内では屈指の裕福な農村となっていた。

平成二九年四月現在の世帯数は二〇二（和楽園含む）で農家世帯は三〇、人口は四五一人で高齢人口（六〇歳以上）割合は二八パーである。組数は五組で、本村は二組（上組・下組）、原田は三組（東組・西組・南組）である。

氏神さまの素鵞神社について「慶長三（一五九八）年、疫病が流行したため玉生八幡大神社（以下玉生神社）の宮司が『熊野三社宮』を勧請して、祇園天王社を建立し、主祭神として祀った。以後、明治の初年に『素鵞神社』と改称するまでは「オテンノンサン」と親しみ呼んでいた。」と松前町教育委員会の説明板に記されている。

写真1　現在の素鵞神社
(平成29年5月1日)

（二）春祭り

春祭りは、「豊作祈願」のため「子ども奉納相撲」を大溝素鵞神社境内で行う。

現在は、昭和天皇誕生日（昭和の日）である四月二九日に行っている。素鵞神社が上組に位置しているため、上組が幟立や降ろしを行っている。事前に組長が四月二八日「幟立」、三〇日「幟降」をする旨を通知し、二八日は各戸の男性（二四戸のうち一〇戸程度）が参加し、大字土木が近所の竹藪から竹を調達し剪定、幟棒を軒下から降ろし先端に竹そして幟を付け最後に全員で立てる。三〇日は幟を降ろし軒下に幟棒をしまう。

祭り前に大字三役と神社総代、公民館主事・愛護部役員・民生児童委員が参集し神殿、境内、参道整備、土俵作り、御幣作り、神事行事等の分担の打合せを行う。更に秋祭りのための子ども神輿の点検も併せて行う。子どもたちは、事前に各戸を回り相撲大会の寄付のお願いに廻っている。更に愛護部の協力で竹は事前に購入し御幣作りを行う。

祭り当日は、役員や子どもたちが九時に集まり神殿、境内、参道の清掃、最後に全員で土俵を改めて整備し御幣を神前に飾り、一一時から始まる神事に備える。

神事は、玉生神社の神職（大溝地区は高市氏）により行われ、玉串奉奠は区長、区長代理、土木、神社総代、愛護部長、生徒代表が行い神事を終了する。その後、子どもたちによる相撲大会が行われる。内容は幼児・小学一年生から中学三年生までの男女別に行う。保護者が中心の応援で賑わいがないことから、大勢の観客を呼び込む目的で、平成二三年設立の大溝健康サロン参加者と子どもたちで柏餅を食べ、更に以前は、相撲が終わっ

写真2　女の子の相撲
(平成25年4月29日)

ても素鵞神社で遊んでいたが、最近は相撲が終わると帰ってしまう子どもたちが多いことから、少しでも楽しんでもらおうと、農家の協力でレンゲ畑で参加者全員で宝探しを行って全ての行事が終了する。

田中教夫さん(昭和一三年生まれ)に中学校時代の相撲について聞いた。

「昔は一緒ではなく別々に本村(素鵞神社)、原田(庚申堂)で行っていた。少子化で昭和四〇年代前半頃から現在のようになったが、以前は男子だけで相撲を取っていた。準備の段階では字役員が中心となって行っていたと思うが、本村も原田も土俵を作るための砂を荷車の荷台を板で囲いをして、中学生と小学生高学年が地蔵町の海岸まで取りに行っていた。

本村のことであるが、長い道のりを往復するので半日がかりであった。往路は軽いので交代で荷車に乗りながら楽しく行ったように思う。砂は土俵作りで必要なもので、転ぶと痛いので『けんど』(ふるい)で選別し出来るだけ多く取ったと思う。

復路は荷車が重いので途中で休憩をした。貴布禰神社では昼間でも薄暗いので肝試し、昔話をしたり、広い田んぼではゴムボールで野球をしてボールを追っかけて野壺(田畑にある肥えだめ)に足を入れる友だちもいた。土俵の俵作りは、もち米の藁が粘りがあると言うので、近所の農家からもらって自分たちで作った。相撲で勝つと御幣をもらって自慢していたように思う。現在のような景品はなかった。」

写真3　レンゲ畑の宝探し
(平成29年4月29日)

(三)夏まつり

大溝の夏祭りは、「玉生神社の輪越」である。

事前に神社総代から「人形」の注文があり、家族の数だけ受けとる。「人形」に干支、男女別、年齢を書いて自分の体を撫でて息を吹きかけ一年間の罪・穢れを人形に移し、清めてもらうため、祭の前日に枕に敷き、当日玉生神社に出かけ茅の輪を右周りに三度回ったのち祈願する。

写真4　玉生神社の輪越
(平成29年8月1日)

夏祭りの演芸大会について、神社総代であった栗原傳さん(昭和一六年生まれ)に聞いた。

「当番制で五年に一度演芸大会を東古泉地区と一緒に開催する。内容は歌、演舞等で二時間の長丁場のため出演者探しに一苦労。時間の配分や開演が午後七時からのため、子どもたちを先にする。大トリ出演者や司会者を決めるなどプログラム作りも一工夫。当日は朝から会場作りや送り迎えの段取りなど関係者に協力願った。観客が拍手喝采してくれ疲れもとれた。」

(四)秋まつり

秋祭りは、幟の立て降ろし、高張提灯、庚申車、子ども神輿、獅子舞がある。幟の立て降ろしは春祭りと同様に行われ

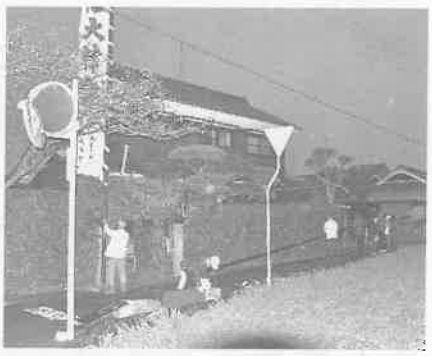


写真5　秋まつりの幟を降ろす
下組関係者
(平成29年10月16日)

るが、場所は本村の上組(素鷲神社)、下組(仲矢家の門前)、更に原田の庚申堂、東組(四辻)、西組(杉村家前)の五か所である。

下組の門前に幟を立てる石柱(せきちゅう)がある仲矢国和さん(昭和二六年生まれ)に聞いた。

「昔からの言い伝えで、いつの頃かは定かではないが、明治初期には既にあったと聞いている。理由として大字の役員をしていて屋敷が広く空地があったとのこと。原田も同じ理由だと思う。」

高張提灯について現在の神社総代である栗原晧さん(昭和一九年生まれ)に聞いた。

「氏神さまが庚申車で各家庭を訪問するため『神さまがおいでになります。そのために道々を明るくしてお迎えしましょう。』という意味をこめて、二日間子どもたちが家々に知らせ、各家庭も灯りを点(とも)して準備をした。通り道は本祭りの朝も灯りを点している。我々の子どもの頃は訪問先の家庭でお礼にロウソクをもらい皆で分けていたが、いつの頃からかだんだんお金に変わっていった。提灯が燃えて危険であるということで提灯をあまり持たないようになってきた。」

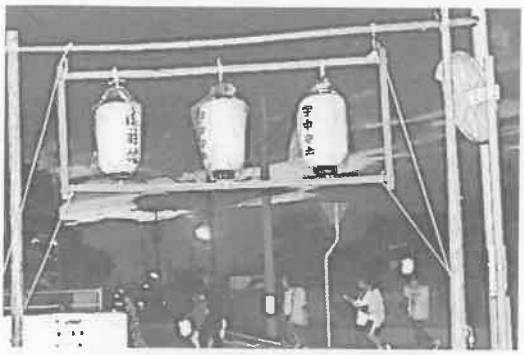


写真6　御神燈前を提灯行列する
本村の子どもたち
(平成29年10月14日)

庚申車の運行について、高市眞一さん(昭和二八年生まれ)に聞いた。

「昔は農家がほとんどで五穀豊穣(ごこくほうじょう)・家内安全祈願である秋祭りには、特に信仰心が強くあって庚申車運行の当番は何の問題もなかったようだが、近年ではかき手の問題で運行に支障をきたすようになった。そこで今年から、本村は申し送りの順番で上組の二人、原田は東組、西組で回覧板の順番に各二人がかき手となり各戸を訪問、南組は組長宅前で待機し、各戸からの参列を待ち一斉に神職からお祓(はら)いを受けた。今年は雨のため予定の時間より少し遅くなったが無事終了出来た。」

写真7　庚申車の前でお祓いを
受ける西組の家族
(平成29年10月15日)

子ども神輿について、高市重徳さん(昭和二五年生まれ)に聞いた。「我々の子どもの頃は男子の行事で中学三年生が中心となって行っていた。祭り前日の夕刻、中学生が素鷲神社から玉生神社へ担(かつ)いでいき、急いで帰り高張提灯に参加していた。祭り当日は玉生神社に早朝出かけ素鷲神社に持ち帰り自宅で朝食をとり再度素鷲神社に集合した。

写真8　神輿を担ぐ中学生
(平成29年10月15日)

小学一年から子どもたち全員が担いで庭を回りお礼をもらった。神輿は明治時代のものでかなり重く低学年は担ぐことが出来ず、主に中学生が担いで翌日は肩が痛かった。そのようなこともあり金額は覚えていないが学年ごとに差をつけて分けたが、中学三年生がかなりの金額をもらっていた。女子が参加するようになったのは平成二(一九九〇)年頃と記憶している。きっかけは子どもが女性だけの家族から『祭りが面白くない』『女子も参加できないのか』等、発言を聞いた当時の愛護部役員が少子化も進み担ぎ手も少なくなってきたこともあり、中学三年生に呼びかけて渋々認めさせたと役員から話を聞いた。

現在の神輿は、平成一四年新調し台車もつけ、玉生神社への宮入り、宮出しも大字の役員が軽トラックに神輿を乗せ、中学生代表の四、五名程度と共に行くので随分楽になったようだ。平成六年頃までの昼食は区長宅で賄っていたが、現在は愛護部が神輿の巡行サポートをするとともに公民館で作っている。大人神輿も明治初期からあったようだが、いつ途絶えたかは定かではない。」

大溝の獅子舞の由来と歴史について『松前町大字大溝沿革史』(平成一〇年一月発刊)に次のように記述されている。

「大溝の獅子舞は、いつの頃から始まったのか、その由来は定かではない。八〇歳の古老の話では、嘉永生まれの老人が太鼓を叩いているのを覚えている。おそらく明治の初期には既に始まっていたのではないだろうか。すると百二、三十年の歴史があるという。出しものの種類は、三番叟に始まり、芋掘、足食い、狼など、五穀豊穣と悪疫退治を祈願して、秋の大祭に氏神さま(素鵞社)に奉納行事として始められたものと思う。それが毎年村の秋祭りの行事となり、その年の新築の家や新たに入居した家では、必ず優先して獅子舞を奉納する習わしになっている。獅子には、雄獅子と雌獅子があり、大溝の獅子は雄獅子で勇猛豁達、荒々しく、まるで生きているように見えたという。幼児は怖がって泣きだすぐらい。」

獅子舞保存会代表である西村裕造さん(昭和五八年生まれ)に聞いた。

「大溝獅子舞保存会は平成一五年に設立され消防団員が中心で活動してきたが、近年は若い仲間が多く定住し活動が活発に出来るようになった。しかし、祭りが今年のような土日の場合、獅子舞は楽であるがウイークデーは仕事があり大変である。そんなこともあり太鼓の撥は小学生の女の子に参加してもらっている。

近年中学生も参加してくれている。小学生の男の子は設立当初から『子どものいれは』(狩人、猿、狐などの面はすべて自前で作成)を舞っている。備品購入や損傷、練習に必要な資金は大字の援助と各家からの寄付で賄っている。獅子舞は組ごとに必ず行うことや企業等からの要望で行い、それぞれからお礼や飲食等提供いただき特に子どもたちは大喜びしている。昔のような力強い舞は出来ていないが、忙しい中メンバーが練習に本番に一生懸命取り組んでいる姿に感謝している。」

写真9　撥(ばち)を叩く女の子と「いれは」を演じる男の子
(平成29年10月14日)

八　永田

（一）地区の概況と氏神さま

松前町の中部、東は鶴吉、西は東古泉、南は大溝、北は恵久美に接し、境界は南に長尾谷川、北に神寄川が流れている。平成二九年四月現在の世帯数は一九四、人口は四八〇人である。

氏神さまは、大字永田字大公家にある鎮守神社で主祭神は猿田彦神（八衢之神）、配神は菅原道真公・金刀比羅神・若宮神・素盞嗚尊・稲荷神・大松神（末社）。鎮守神社は藩政時代に「大下」から「樋ノ口」に遷宮した。続いて明治末期、現在地の「岩鋪天満宮」に主祭神として合祀された。それまで永田には二つの神社があったが、慶長年間に勧請された疫病を鎮める祇園社は鎮守神社に合祀されたのだろうか、神社名の変更はなく従来のままだった。

鎮守神社は、中世にあったと言われる「長蓮寺」の守護神とも考えられ、「金突」「油田」などのホノギ（小字）として残っている。岩鋪天満宮は正和二（一三一三）年松前の漁師が神のお告げによって、南東の原（現在地）に鎮祭したといわれている。（松前町教育委員会の説明板より）

鎮守神社の神職は、西古泉の玉生八幡大神社の高市氏である。

（二）祭りについて

永田の春、夏、秋祭りについて、小笠原盈喜さん（昭和九年生まれ）に聞いた。

１　春祭り

春祭りは北伊予地区統一日に、鎮守神社岩鋪天満宮境内（通称天神さん）での奉納相撲。相撲の準備は中学生と愛護部の役員で進めます。

祭りが近づくと、中学生は各戸を回り寄付金を募り、そのお金で相撲の賞品（文房具類やお菓子等）を揃えます。御幣作りは、孟宗竹を六〇センチ（中学生用）七本、五〇センチ（小学生用）一三本、四〇センチ（未就学児用）一〇本を切り揃え、汚れを除くのと清めの意味を含め水洗いし、乾燥後先端を切り、紙垂（四手）を挟み紅白の水引で結びます。

三〇年代は、土俵の砂をリヤカーで塩屋の浜へ取りに行っていましたが、永田に生コン会社が出来た頃からは川砂をもらっていました。現在生コン会社はなくなり関係者が必要な量を塩屋の浜で取り、海水で洗い清めて土俵に使用しています。土俵作りについて、以前は土を掘り周囲を高さ三〇センチほど盛り立てその中に俵を回し、砂を敷いていた。現在（平成二三年以降）は平坦地に俵を並べて砂を撒き、土俵の出来上がりです。

祭り当日は、神殿に御幣を並べ玉生八幡神社の神職による神事を行います。参列者は大字三役や宮総代ほか各部役員が玉串奉奠を行います。

写真1　子ども相撲の御幣
（平成29年4月29日）

写真2　熱戦の子ども相撲
（平成29年4月29日）

神事が終了後、いよいよ相撲の始まりです。行司は中学三年生が執り行います。最初は未就学児から小学生の取組で可愛い仕草で見物客も拍手喝采。小学生も高学年となると真剣で技も多彩です。三番、五番抜きの子には御幣が渡されます。取組が終われば文具やお菓子が参加者に配られます。これも楽しみの一つでした。この御幣は五月の苗代の水口（田に水を入れる場所）に苗の順調な生育と豊穣を願い立てていたようです。

2　夏祭り

以前は七月二五日と決まっていましたが、近年では二五日に近い土曜日に行っています。これは祭りに多くの人が参加できるように配慮したものです。

現在の祭りは、平成四（一九九二）年か五年頃復活した、舞台は鉄骨造組立て式であり、背景は当時の中学生が描いた夏模様です。

実施に当たっては五月頃より夜店に出すメニュー、値段、演芸について役員全体で会議を行い決定します。

当日は朝から舞台の組み立て設置、本殿での神事の準備を大字の役員総出で行います。神事は春祭りと同様神職を迎え行います。

夕刻の六時頃より夜店（かき氷、焼き鳥、ビール、ジュース、枝豆、いなり寿司、菓子、くじ引き、ＥＭ石鹸等）を開き、カラオケの音楽が流れ始めると子どもたちはお目当ての品物を買い求めます。

写真３　村芝居の出演者（昭和22年）

七時頃よりいよいよ演芸大会の始まりです。出演者は二〇組を少し上回る程度です。カラオケ、舞踊、合唱、伊予漫才、コント等多彩で年齢も五、六歳から八〇歳代までの幅広い男女が二時間を越え祭りを盛り上げます。

演芸が終わるとお楽しみ空くじなしの抽選会です。賞品は年により違いますが、自転車・扇風機等で大字及び地元企業等から提供され、特等、一、二等賞が出る度に歓声で盛り上がります。

「夏祭りは古くは、明治八年に地区の有志数名が発起人となり提灯を持ち寄り、今はない小富士松の枝に吊るし献納されていた。」（『ふるさとをたずねて』平成二二年三月発行より抜粋）

また、戦後娯楽の無い昭和二〇年代前半の頃は青年の村芝居等の演劇活動が盛大に行われ、見物人で天神さんの境内は溢れる状態でした。舞台は丸太を骨組みしてその上に小学校から荷車に積み借りてきた渡り廊下を敷き詰め、色とりどりの幕を張って完成します。芝居の幕間には有志より

写真５　夏祭りの余興
（平成29年7月22日）

写真４　村芝居の一場面（昭和27年）
（小笠原盈善氏提供）

御花の提供があると、その御礼の報告とともに「金一封」と墨で大きく書き幕に張り出していました。

3　秋祭り

秋祭りは、高張提灯・神輿の巡行と獅子舞です。

高張提灯は、一三日と一四日に各家々を回ります。一三日は天神さんより東方の家から回り、翌一四日は西方の家から回ります。道中、家の中では「もーてーこい　もーてーこい」と掛け声を出します。各家の玄関に入り提灯を差し上げるとお金(三百円～五百円くらい)やお菓子を頂きます。

神輿は子ども神輿で、祭りが近づくと公民館に保管している神輿を出して皆で磨き飾りつけを行います。

神輿は中学生が担ぎ一四日の夕方玉生神社へ宮入りし、翌朝宮出しを行い、天神さんの東方から各家を回ります。神輿は各家の庭でくるくる回し、横にし、勢いよく差し上げ玄関の前に据えます。家主がお米と塩水に浸した南天でお祓いします。最近は簡素化が進み省略する家もあります。子どもたちは高張提灯と同様お金やお菓子を頂きます。回り終えた後、頂いたお金やお菓子を、分けて貰うのも楽しみでした。羽車(庚申車とも言う)の渡御は、昭和五一、二年頃より廃止となっています。お供米の収集は平成二五年に廃止し一括して字費で納めています。

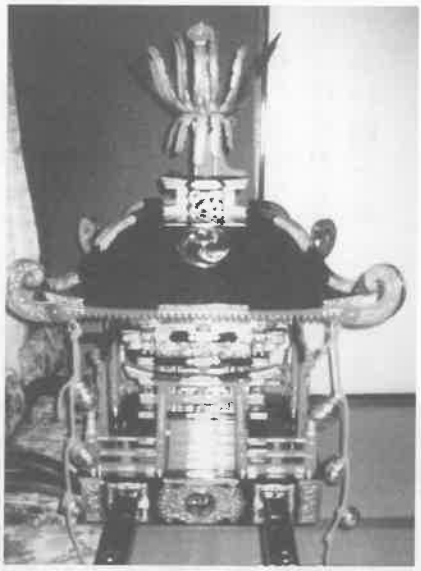


写真6　子ども神輿
(平成29年10月)

以前の古い神輿は重くて傷みも激しく、また少子化で、平成二二年に軽い神輿を新調しました。新調に当たっては運行を行う愛護部が積立てていた預金と地元の企業や有志の寄付金で行っています。

九月一日の夜は獅子舞太鼓の音が公民館から聞こえてきます。この日は太鼓の叩き初めです。「獅子舞の歴史はいつ頃から始まったか、またその由来は定かではありません。三年前まで使っていた獅子頭を収納している木箱の蓋に「大正四(一九一五)年一〇月永田青年団」と記載があり、その頃に既に始まっていたのではないだろうか。それ以前についてはわかりません。またいつ頃まで続き、いつなくなったかもしれませんが、戦争が及ぼしたものではないかと思います。

昭和二七(一九五二)年頃から青年団により獅子舞が復活し、毎夜協議所(集会所)で練習し城下祭り(松山祭り)には親戚、知人等の伝手で松山の古町方面に遠征していました。私も六、七歳時、子役の猿役で同級生三人と同行しました。

復活した獅子舞も昭和三〇年代に中止となりました。昭和四二、三年にこのままでは、獅子や太鼓を教え伝える人がいなくなり、伝統の獅子舞がなくなるとの声で、有志が立ち上がり獅子舞が復活しました。今年で三〇年の節目を迎えます。

昨年松前町のコミュニティー助成(宝

写真7　青年団による獅子舞
(小笠原盈善氏提供　昭和28年ころ)

くじ）を得て獅子舞道具一式が新しくなりました。

獅子は雄と雌があり永田の獅子は雄の昇り獅子で荒々しく動きも激しく子どもは怖がり逃げ出すほどです。

獅子舞をする順番も昇り獅子により、下組より上組へとしていたが、最近ではそれも薄れて都合のよい順となっています。

写真８　ユーモラスな「いれは」を演じる子ども
（平成28年10月15日）

獅子舞は一四と一五日の二日間、新築家屋や家業繁栄、家内安全を願う希望者宅で、また最近ではエミフルＭＡＳＡＫＩでも行われ、一日で六、七回、舞の奉納を行っています。

獅子は獅子舞と子役が演じる舞があります。獅子は頭の前獅子と尻尾の後獅子が共に白黒の足袋を履き、荒々しく頭を左右に震わせ口を開けまた足を上げて舞い疲れて寝ます。寝ている獅子を狩人がてがい（からかい）怒らせ終わりに鉄砲で仕留めて引揚げます。

獅子舞と共に面を付けた子役の演技があります。百姓の親爺（一人）が猿（一人）キツネ（二、三人）狩人（一人）を連れて演技しながら輪を描くように回ります。先ず猿が残り、おやじが鍬で畑打ち、種をまくと猿が種を拾い、追い払うと逃げ、手や足をさする（なでる）と猿も同じ動作で真似をします。キツネも側転、背中の飛び越し等を行い親爺の邪魔をします。

最後は狩人に一網打尽にされる物語を太鼓に合わせて軽快に踊るものです。（親爺、子役の人数、踊りは年代により変わっている）

写真９　勇壮な獅子舞
（平成28年10月15日）

（三）祭りの思い出など

春祭りで相撲を取ったこと、夏祭りの舞台に出たこと、秋祭りの高張や神輿で各家々を回ったことなど、古里を離れ年を重ねても、どこか心に残るものではないかと思う。

私たちが参加していた頃の春祭りや秋祭りは、男子の行事だったので、今は少子化に伴い女子の参加なくしては難しくなっている。また伝統的に行ってきた行事も時代に合わせ変化し簡素化されているが、今後も祭りは引継がれていくことであろう。

九　東古泉

これから記す文章の内容については、次の方々に御協力をしていただいた。玉生八幡大神社宮司の武智和孝さん（昭和二四年生まれ）、東古泉の早瀬哲夫さん（昭和五年生まれ）、三好國榮さん（昭和一七年生まれ）、早瀬武臣さん（昭和二〇年生まれ）、三好重敏さん（昭和二三年生まれ）、高市清則さん（昭和二三年生まれ）、三好則雄さん（昭和二七年生まれ）。

また、各種資料については、主に『松前町誌』と『北伊予の伝承』を利用引用した。なお、写真はすべて平成二九年に撮影したものを使用した。

（一）地区の概況と氏神さま

北伊予地区の最西部に位置し、松前地区や岡田地区とも接する地域である。古くから豊かな水の湧き出ている里で、「稲納屋」とも呼ばれていた。記録によれば、元文三（一七三八）年、古泉村が分かれて、東古泉村と西古泉村とになった。東古泉村は明和七（一七七〇）年には五七戸、昭和五二（一九七七）年には一三四戸であった。平成二九年四月現在、東古泉の組数は一〇組、世帯数は二三〇、人口は五六〇人である。

氏神さまは、大字東古泉一ノ関にある素鵞神社で主祭神は建速素盞嗚尊、配神は日速彦命と三女大姫神とである。素鵞神社の宮司は大字西古泉にある玉生八幡大神社（以下「玉生神社」と表記）の武智和孝宮司が兼務している。素鵞神社は、古来東古泉の人々から尊崇され鎮守の神さまとして、「天王さん」の名でも親しまれている。

写真1　素鵞神社（東古泉）

写真2　玉生八幡大神社（西古泉）

（二）季節を彩る祭り

1　春祭り

農作業の始まる時期に、秋の豊作を祈って行われる春祭りは四月二九日に開催される。当日の朝、素鵞神社において玉生神社の武智宮司を迎えて関係者で神事を行う。神事が終わると、春祭りの伝統行事である子どもたちによる奉納相撲大会が素鵞神社東側のコミュニティー広場で催される。従来男子だけの相撲大会であったが平成四年からは男女参加の催しになっている。その模様は『北伊予の伝承 IX』の「春祭り」にイラスト入りで記載されているので、ここでは割愛し、今年の春祭りの写真を掲載する。午後からは東古泉地区の運動会が行われる。

写真3　神事（素鵞神社）

写真4　奉納子ども相撲

2　夏祭り

春秋の祭りとはその起こりが多少異なり、悪疫退散の祈願から発生したと思われる夏祭りは、東古泉では七月二三日が祭礼日である。氏子たちによって素鷲神社にお祭りを知らせる幟が立てられるが、そのほかには夏祭りとしての大きな催しや行事などは行われていない。毎年夏に行われている伝統行事としては、氏神さまの玉生神社で八月一日に催される、茅の輪をくぐって潔斎し疫病や災難を祓う「輪越」の行事がある。その様子は『北伊予の伝承 Ⅸ』の「輪越し（玉生神社）」にも掲載されているので、ここでは割愛する。

3　秋祭り

豊かな収穫を祈念し、無事に過ごせたことを神さまに感謝して行う秋祭りは一〇月一三日の宵祭りに始まり、一四日、一五日と東古泉全域で行われる。一二日の早朝、素鷲神社をはじめ五か所にそれぞれ二本ずつの幟が立てられ、要所に御神燈が準備される。秋祭りの行事としては、平成二〇年から大字の公民館活動の一環として愛護部が中心となって実施している高張提灯と子ども神輿巡行、そして同じく公民館活動の一環として獅子舞保存会が実施している獅子舞がある。

(1)　高張提灯

もとは玉生神社からお光を頂き、そのお光でともした提灯を掲げて大字中を回り、神さまの御神威と御神徳とを家々にお届けするのが高張提灯である。また祭事において火にはお清めの意味があり、これを持って歩くことで、地域のお清めをし、その灯りで神さまの神輿での巡行の道筋を知らせる役割があるとされる高張提灯は、一三日、一四日の午後六時頃から行われる。以前は子ども会の行事として中学生と小学生の男子全員が素鷲神社を出発し、一三日は大字の主要道路を、一四日は各家々を回っていた。男子生徒全員が高張提灯を持ち、ろうそくに火をともして掲げ「詣で来い」の意とされる「モーテーコーイ、モーテーコイ」を大声で唱えて歩く。家に着くと広い土間に入れる限りの子どもたちが入り「ワーッ」と一斉に提灯を高く掲げ「ワッショイ、ワッショイ」と唱えながら家を後にしていた。

その後、平成四年から男子だけでなく女子も参加するようになり、回り方も一三日は上の組の各家々、一四日は下の組の各家々を回るようになっている。以前とは変わり乾電池で豆電球をともした提灯や懐中電灯、LEDライトなどを持っての高張提灯になっているが、「モーテーコーイ、モーテーコイ。モーテーコーイ、モーテーコイ」と大声で唱えながら回っていく。こうして高張提灯は、今も大字内を清め、神さまの御神威と御神徳を大字内に届け広めて一五日の子ども神輿巡行に備える。

写真5　高張提灯

(2)　獅子舞

獅子舞は、大陸から伝わり、舞楽として演奏したものであるが、後に変容して太神楽や各地の祭礼などで、五穀豊穣の祈祷や悪魔払いとして、新年の祝いや祭礼に行われるようになったものである。

東古泉の獅子舞は、大正の終わりか昭和の初め頃、有志七、八名で始められたのではないかといわれている。戦時中や昭和五〇

写真6　獅子頭入魂式

写真7　お披露目の獅子舞

（一九七五）年頃途絶えたが、その後やはり秋祭りには獅子舞がほしいという機運が高まり、昭和六三（一九八八）年有志十数名によって復活し現在に至る。そしてこの度、平成二九年度松前町コミュニティー助成（宝くじ助成）事業助成金交付を受け、獅子舞用具一式を更新し伝統行事をさらに継承していく運びとなった。

一〇月八日素鷲神社において玉生神社の宮司を迎え獅子頭入魂式の神事を行い、獅子舞が奉納お披露目された。

東古泉の獅子舞の内容は獅子の「舞」が最初にあり、続いて「いれは」を中に挟み、もう一度「舞」を舞って終わる。これを「一庭」という。

秋祭りが近づくと、獅子舞の練習が始まり、毎晩保存会の会員や子どもたちが公民館に集まり熱心な練習が続く。

獅子の舞は軽やかで力強い大小の太鼓の囃子に合わせて保存会の大人二人で舞うが、舞の中ごろに一番の見せ所「芸」と呼ぶ踊りがある。かつてはその踊りの違いによって、イモホリ・カラトビ・ヤマサガシ・ラン・シャミ・トクマル・ホンカン・ウソカンの八種の舞があった。しかし、現在舞われているのは五種類の舞でトクマル・ホンカン・ウソカンの三種は囃子太鼓も舞い方も分からなくなっている。

獅子が舞い疲れて寝てしまうと、そこに小学生の扮する狩人が現れ獅子を起こす。獅子は怒って暴れ激しく舞うが、狩人によって退治される。

「いれは」は親爺と小学生の扮する子役の芸で親爺が猿と二匹の狐を連れて、畑仕事に出かける。畑を耕し、鍬で均し、種をまき、土をかぶせるがその間、猿は親爺の農作業の邪魔をし、狐は飛び跳ね遊びまわる。三者がいろいろと絡み合った後、親爺は畑仕事を終え猿と狐を連れて家に帰り、一緒に夕飯を食べる。猿と狐たちはおとなしく夕飯を食べるが、食べ終えた途端、親爺を押さえつけ「いれは」は終わる。

最後に初めの舞とは別の芸を獅子が舞い、舞った後疲れて寝てしまう。そこにまた狩人が現れ獅子を起こす。獅子は怒って舞い狂うが、狩人によって退治される。こうして悪魔祓いをして五穀豊穣と家内安全を祈願する「一庭」の獅子舞は終了する。

獅子舞の日程は、一二日の夜の素鷲神社への奉納獅子に始まり、一四日は要望のあった施設や商店などで舞われる。一五日は獅子舞いの関係者の家、大溝と永田と東古泉の舞い比べも行われるエミフルＭＡＳＡＫＩ、その他新築の家や新たな転入者の家、希望者の家などで舞われ、最後はコミュニティー広場で舞い納める。

写真8　「いれは」を演ずる

写真9　獅子の舞い比べ

(3)　神輿

神さまのための乗り物である神輿は、御神体や御霊代を載せて神社を出て地域を巡り、神社にお戻しするまでの乗り物

である。東古泉では、その経緯や変遷はよく分からないが以前には大人の神輿がかかれていた。また、羽車（庚申車）は西古泉との共用で午前中は東古泉を巡行し、午後になると羽車は西古泉に引き継いでいた。その神輿も大人の担ぎ手が少なくなったこともあり昭和三〇年代後半にはかかれなくなった。神輿は解体されたが、二本のかき棒は素鷲神社南側の幟棒などの収納場所に今も収められている。そしてその後は御神体を載せた羽車だけが巡行していた。昭和五四（一九七九）年大字で子ども神輿を新調し小、中学生の男子によって巡行されるようになり、平成四年からは男女ともに参加しての子ども神輿巡行が盛大に行われている。

前の週から子どもたちや関係者で準備していた神輿を一四日の午後、玉生神社に「宮上げ」して御神体を神輿に移し、一五日の早朝「宮出し」をする。午前八時、神輿は素鷲神社を出てあらかじめ大字中に連絡されている経路に従って、賑やかに「祭り音頭」の音楽を流しながら巡行する。各家々では神輿が来ると、準備していた塩水を南天の葉でお祓いして散米し、お供米を二合（三百グラム）寄進する。また、お旅所や宿では神輿を据えて神さまの御神威、御神徳を受け、様々な賄いをする。

写真10　玉生神社への宮上げ

写真11 雨の中の子ども神輿の巡行

こうして神輿に載った神さまに神さまが守っている地域の様子を見ていただき、よろこんでいただくとともに感謝の心を伝える。お昼頃神輿は素鷲神社に還り、愛護部の準備してくれた昼食をみんなで頂き休憩をする。その後中学生と関係者によって玉生神社への宮入りを済ませ、素鷲神社で後片付けをして神輿の行事は終了する。

4　四ツグロ大権現例祭

毎年一〇月一六日の朝、大字東古泉四つ黒にあって多喜津姫（瀧姫）と三人の侍女たちが祀られる四ツグロ大権現（四ツ黒権現社）に玉生神社の宮司を迎えて、関係者による例祭が行われている。その内容は『北伊予の伝承　I』の「四ツグロ大権現」に記載されている。また、『松前町誌』の「瀧姫伝説と信仰」にも詳述されているので省略する。

写真12　四ツグロ大権現での神事

5　勤労感謝祭

勤労感謝祭は、もと新嘗祭から始まった祭礼で、新嘗祭は新穀を神にささげて収穫を感謝し、きたるべき年の豊穣を祈る儀式である。古代からあり、宮中では旧一一月第二の卯の日に天皇自ら祭儀を行った。明治六（一八七三）年以後は一一月二三日と定められ、現在は勤労感謝の日として、勤労を尊び、生産を祝い、互いに感謝しあう国民の祝日となっている。この日、玉生神社では、氏子である大字の関係者が集まり神事が行われる。

東古泉の素鷲神社でも、毎年一一月二三日に玉生神社の宮司を迎えて、大字の関係者による勤労感謝祭の神事が行われている。

記　憶　を　記　録　に

―『北伊予の伝承』30年の軌跡―

はじめに

昭和30(1955)年3月、旧松前町、北伊予村、岡田村の1町2村が合併し新生「松前町」が誕生した。それぞれ旧町村に文化広報活動の拠点として西・東・北3つの公民館が設置された。

東公民館がある北伊予地区は、平成29年4月現在の世帯数は3075（町全体の23.1％）、7538人(同24.5％)の人口を有し、豊かな水と肥沃な土地に恵まれた農村地域である。

長年、東公民館から発刊されている『北伊予の伝承』は、住民に親しまれ、その伝承は若い世代に受け継がれている。ここで、すでに発刊された『北伊予の伝承』からその内容の一部を紹介したい。

1　『北伊予の伝承』とは

（1）伝承活動発足の経緯

東公民館事業の1つに『北伊予の伝承』の発刊がある。昭和63(1988)年に創刊されて以来、平成30（2018）年に発刊された第14集まで30年の歳月が流れた。

第2集「発刊にあたって」の館長のことばに、「東公民館では先に松前町誌に載っていない話を収録した『北伊予の伝承』を発刊し、さらに『北伊予の歴史を語る（ふるさとを考える）会』が結成されましたが、会員の高齢化に伴い立ち消えとなりました。これを憂え、その意志を継承し『北伊予の伝承・第2集』の発刊をしてはとの地域の要望により準備委員会が発足しました。町の予算化も進み、大字毎に推薦された方々によって編集委員会を結成、会合を重ね、編集方針や内容の具体化、資料の収集と整備・編集・校正を行い、未熟ながらも第2集発刊（平成7年3月）の運びとなりました」とある。

その翌年には第3集が発刊されたが、それ以降は隔年となり現在14集を発刊している。

同じ町内の他の公民館でもほぼ同様の事業がなされていたが、長年にわたり現在まで継続発刊しているのは東公民館だけである。

専門的な記載内容や分析ではないが、地域と密着し生きた生活文化の伝承であると自負している。

（2）第1集から第7集までの主な内容

北伊予地区は9地区（大字）からなり、それぞれ数名の編集委員を選出し地道に編集活動を行ってきた。

昭和63（1988）年3月発刊の第1集（創刊号）は、北伊予9地区の年中行事・作業唄・わらべ唄などが主たる内容で、それぞれの行事の由来や歴史をまとめている。(編集委員長 仙波文治、館長 大黒宜俊、委員数30、B5版54ページ)

第2集は、各地区の神社・仏閣・行事等を取り挙げている。創刊から7年の空白があるが、前項のように地域の要望に応え幾つもの苦難を乗り越え、編集委員会を立ち上げ、第2集の発刊にこぎつけた努力を讃えたい。(平成7（1995）年3月発刊、編集委員長 野本勉、館長 髙市徳、委員数24、B5版50ページ)

次いで、翌年に発刊された第3集は、各地区ごとの大字や社寺の由来など興味深い内容になっている。巻末の各大字の年中行事や民俗調査の一覧は、詳細な項目で生活文化の伝承活動に役立つ貴重なものである。(平成8年3月発刊、編集委員長 濟川裕、館長 髙市徳、委員数22、B5版41ページ)

第4集は、北伊予地区の泉・池や祭礼の幟の2本立て。さらに各地区ごとの生活文化などの伝承をまとめている。とくに巻末の参考資料の中で古地図は貴重である。(平成10年3月発刊、編集委員長 中村文雄、館長 伊達嘉和、委員数26、B5版43ページ)

第5集は、ちょうど西暦2000年に当たり、

太平洋戦争にまつわる記録を中心に「戦争」をテーマとし、他に子どもの遊び、生活、農業など当時の生活文化が明瞭に再現され、平成 12 (2000) 年 3 月に発刊している。この第 5 集は町内の各小学校でも教材としてよく活用されたという。(平成 12 年 3 月発刊、編集委員長 中村文雄、館長 水口憲三、委員数 20、B5 版 60 ページ)

第 6 集は、昭和 20 (1945) 年から 30 数年までの戦後の貧しい混乱期から高度成長期の初めころまでを特集している。体験者の手記なども挿入し、現在の豊かな生活ができる基礎をつくった先人の苦労や努力を学ぶ資料となっている。(平成 14 年 3 月発刊、編集委員長 田中義一、館長 水口憲三、委員数 22、B5 版 63 ページ)

第 7 集は、従来のテーマと異なり、各地区ごとに明治から現在までの北伊予にゆかりのある人物 (故人) を取り上げている。とくに人選や記述内容等、編集委員は大変苦慮した様子が窺えるが、参考資料を基に関係者からの聞き取りなどから執筆している。(平成 16 年 3 月発刊、編集委員長 水口憲三、館長 吉田健勝、委員数 26、B5 版 29 ページ)

2　第8集以降の『北伊予の伝承』

(1) 編集方針の変更

筆者は高校教員退職後、県生涯学習センター嘱託研究員として 5 年間勤務した。その間愛媛の地域学 (前半は遍路文化の学術整理、後半は記憶でたどる原風景として愛媛の衣・食・住とくらしの学術整理) の一端を担い、"聞き書き" を中心にまとめ発表する機会を得ていた。

『北伊予の伝承』には第 8 集の平成 17 年度から編集委員の一員に加えていただき企画・編集にも携わった。編集委員の了解のもと編集方針として、北伊予の生活文化にまつわる原風景を記憶にとどめるため、住民の生の声を聞き取り、それを "聞き書き" するという手法をとること、もう 1 つは、テーマを最大 2 つに絞り、将来を見通し一貫性のある内容で編集するということで賛同を得た。この方針は第 9 集から現実のものとして生かされていく。

(2) 各集の主な内容

ア『北伊予の伝承 第 8 集』

第 8 集では、「水とくらし」と伝統的なくらしが残っていた戦後の装い・食・住まいを「あのころのくらし」としてまとめた。

「水とくらし」では、中川原・徳丸地区の水の恵みは興味深い。「農業とくらし」では米づくりが中心をなす。

また「あのころのくらし」では、戦後貧しいながらしたたかに生きた北伊予の人たちのくらしの一端を衣・食・住からまとめた。中でも戦後の粗末な装いでは、衣料切符・カーキ色の国民服やもんぺ、食では、かまど・箱膳やおなぐさみ、住まいでは、かやぶき屋根・建前の行事など当時のくらしを克明に記述している。(平成 18 年 3 月発刊、編集委員長 水口憲三、館長 吉田健勝、委員数 21、B5 版 27 ページ)

イ『北伊予の伝承 第 9 集』

今回は「年中行事」を取り上げ、高度経済成長期までの期間について、聞き取り調査を中心に地域の生の声を掲載している。現在、年中行事も年々簡素化・衰微しているのが実情で、このままでは現状維持が困難で、廃れ消失する懸念すらある。

この第 9 集から新たな編集方針のもと本格的に始動した。また元編集委員長中村文雄氏の版画集『年中行事絵図』から転載した作品は、本文を一段と引き立たせ、大きな効果を生んでいる。

正月の行事では、正月の準備・大正月の行事・小正月の行事の項目のもと、しめ飾りや餅つき、若水・屠蘇・雑煮・おたなさん、御祈祷・七草・小正月など盛沢山の内容である。

春から夏の行事では、春まつり・おなぐさみ・虫祈祷・輪越など地区によって違いが見受けられる。

盆の行事では、精霊棚・盂蘭盆・大念仏・百八燈 など、これまた地区により実施内容の

違いが大きい。

さらに秋から冬の行事では、秋祭り・獅子舞と仁輪加・亥の子など多彩な内容である。(平成 20 年 3 月発刊、編集委員長 水口憲三、館長 吉田健勝、委員数 21、B5 版 41 ページ)

ウ『北伊予の伝承 第 10 集』

第 10 集では、「人の一生（人生儀礼）」をテーマに取り上げている。人は出産からお宮参りや七五三、成人式や結婚、そして長寿の年祝いと生まれてから亡くなるまで、さまざまな人生儀礼（儀式・祝い）を経験する。産育、婚姻、厄払い、年祝い、葬祭に分け、聞き取りを中心に生の声を聞き書きし、薄れていく地域文化の記録保存と次代への伝承を願い編集した。

産育では、妊娠と出産前・出産・成長過程の儀礼に分け、婚姻では、婚姻成立まで・成立後の儀礼・婚姻後の嫁と実家との関係、厄年・年祝いでは、厄落とし・年祝い、葬祭では、仏教の葬儀・神道の儀・年忌供養に分け、貴重な体験や経験をもとにした聞き書きを中心にまとめている。

中でも、出産での産婆さん、お見合いや家で行った結婚式、厄落とし、葬儀における組内の役割、土葬など、社会構造や人々の意識の変化に伴う北伊予の生活文化を如実に表現している。

その節目ごとに古来より執り行われてきた儀式だが、時代の移ろいとともに人々の意識や社会構造の変化に伴い簡素化され、次第に忘れられつつある。今こそ記録にとどめ後世に残さねばならない。(平成 22 年 3 月発刊、編集委員長 水口憲三、館長 義農英文、委員数 18、B5 版 51 ページ)

エ『北伊予の伝承 第 11 集』

第 11 集は、激動の昭和を生き抜いてきた人々の高度経済成長期以前の「くらしと生活文化」に焦点をあて、これら貴重な古来の生活文化遺産を後世に残していくため、各地区から高齢者のみなさんに集まっていただき、その原風景を座談会を通して聞き書きした。

さらに、北伊予地区の小字（ホノギ）についてまとめた。まず小字の位置を図示し、その小字の起源や由来、伝承などを調査し貴重な資料ができた。

まず「記憶でたどる北伊予のくらし」では、装い・食・住まいの小グループでくらしと生活や文化について座談会を行った。装いでは再生した洋服・国民服や標準服・衣料切符やもんぺなど、食では、かまど・箱膳・駄菓子屋・さとうぎなど、住まいでは、田の字型の間取り・わら葺屋根・母屋と便所など古来からの生活が垣間見られ興味が尽きない。

一方、小字（ホノギ）では、全国的に地名調査が行われ、明治 15（1882）年の「段別畝順調」（野取図）に記載されている小字が県に報告されている。

北伊予の小字では、大字の起源・由来・伝承などを記し、慶安元（1648）年の「伊予国知行高郷村数帳」から石高などを記している。

旧町村単位で小字について調査し、図示したのは県内では貴重な資料であると県立図書館からお褒めの言葉をいただいた。なお、北伊予地区内の小字数は、徳丸 28、中川原 15、出作 38、神崎 38、鶴吉 22、横田 7、大溝 3、永田 45、東古泉 26 である。(平成 24 年 3 月発刊、編集委員長 髙石勤、館長 得能広明、委員数 15、B5 版 61 ページ)

オ『北伊予の伝承 第 12 集』

第 12 集から従来の体裁よりやや大きい A4 版に変更し、文字も大きく読みやすくした。2 本立てのテーマで構成する内容は従来の形を踏襲した。

まず、その1つは「通った学校の思い出とくらし」である。戦前から現在までの学校の思い出は、戦前のグループと戦後のグループの 2 つに分け、その当時の学校の思い出とくらしについて座談会の内容をまとめた。

2 つ目は、「北伊予の幹線道路沿いの家並みの移り変わり」をテーマに、経済成長期の昭和 30 年頃から現在までの家並の変化を各地区ごとに聞き書きを中心にまとめたものである。作業を通して現在の北伊予の家並みと人々のくらしぶりが、この 60 余年の社会の進展に伴う幹線道路の変遷と深い関係があるということが見えてきた。

座談会の戦前のグループでは、「勉強より

勤労奉仕作業、食べるものがないから運動場にサツマイモを植えた」、「小学校の正門や講堂が懐かしい」と振り返り、戦後のグループは「戦後の混乱した学校の様子や中学校の校舎移転」など、くらしと関連した話し合いがなされた。

一方、家並みの変遷では、昭和 30 年頃と平成 25 年との違いを地区別に図示した。マイカーの普及や郊外型スーパーの進出で個人商店が減り、住宅化が進むなど社会の変化が人々の生活にどのような変化をもたらしたのか。薄れゆく生活の記憶を記録としてどう後世に伝えるかが我々に大きな課題として託されている。(平成 26 年 3 月発刊、編集委員長 髙石勤、館長 西坂洋一、委員数 14、A4 版 66 ページ)

カ『北伊予の伝承 第 13 集』

第 13 集は、これまで何回となく取り上げてきた戦争がテーマ。戦後 70 年という節目の年を契機に、戦争がもたらした苦しい体験や悲惨な記憶を風化させることなく後世に伝えねばという思いで 1 つのテーマに再び戦争を取り上げ、「戦後 70 年北伊予のくらしを辿る」として座談会を開催した。

また古くから受け継がれ、今なお北伊予各地で行われている新春の行事「御祈祷」(組祈祷) をもう 1 つのテーマとしてまとめたものである。

まず、座談会では、サブタイトルを「明日への希望を抱いた昭和 20 年代」とし、戦時中・戦後間もないころ・昭和 20 年代後半のくらしをテーマとし話し合いを持った。出席者は戦争体験者、遺族、引揚者、疎開定住者、勤労・学徒動員経験者、農家や非農家など 17 名のみなさん。中でも中国大陸 (旧満州) での戦争の体験者や引揚者の筆舌に尽くし難い想像を絶する体験談、ほとんど授業を受けることなく軍需工場へ学徒動員され青春を棒に振った悔しい体験談、地元の国鉄 (現ＪＲ) 北伊予駅の爆撃など、直接体験・経験した生死をかけた内容ばかり。

また、組中安全・家内安全・無病息災を祈願する新春の行事「御祈祷」をもう 1 つのテーマとした。

北伊予 8 地区 (永田はなぜか実施せず) それぞれの起源や実施内容を記載した「入用記(帳)」などの資料や古老からの聞き取りも入れまとめたものである。

とくに注目される「祈祷帳」「入用記」として、中川原地区の嘉永 6(1853)年「組祈祷帳」と大溝地区の安政 5 (1858) 年「年始祈禱諸入用記」があり、御祈祷の起源や参加者・賄の内容・当時の買物の単価などを知る貴重な資料である。さらに驚くのは、大溝地区の「諸入用記」は、安政 5 年から現在に至るまでほぼ 160 年間延々と記録されている。(平成 28 年 3 月発刊、編集委員長 髙石勤、館長 門田博、委員数 12、A4 版 66 ページ)

3　記憶を記録に

先人たちが語り継ぎ残してくれた北伊予地区の生活文化遺産を後世に伝える『北伊予の伝承』を、30 年もの間、小さな公民館でありながら継続し発刊できたことは稀有なことであり誇りである。

先の時代を生き抜いて来られたみなさんは、今や高齢になり聞き取りは時間との闘いである。貴重な体験や慣習・伝承を今こそ記録に残さねば消滅してしまう恐れがある。

今や消えようとしている、言葉では伝えられないもの“記憶”を“記録”という“形”にする。それを微力ではあるが『北伊予の伝承』という形で残してきた。形は心に残り、言葉よりもしっかりと刻まれ、後世に受け継がれると信ずるからである。

これら長年の活動は、町当局の温かいご理解と多くの編集委員のみなさんのご協力と古里を愛する情熱の賜物である。

私たちの長年地域に密着した地道な活動は、他にあまり例を見ない特色がある活動だと自負している。発刊した冊子は毎回北伊予地区全世帯に配布され愛読され活用されてきた。

残念ながらこの度の第 14 集をもって『北伊予の伝承』は終刊となるが、今後は映像などで「記憶を記録に残す活動」は続けたいと思う。

(編集委員長 髙石 勤)

『北伊予の伝承』歴代編集委員 (1)

◎ 委員長　○ 副委員長　(敬称略)

	第1集編集委員 (昭和63年～)		第2集編集委員 (平成6年4月～7年3月)		第3集編集委員 (平成7年4月～9年3月)		第4集編集委員 (平成9年4月～11年3月)		第5集編集委員 (平成11年4月～13年3月)	
	氏　名	住所	氏　名	住所	氏　名	住所	氏　名	住所	氏　名	住所
1	○仙波　文治	徳丸	○仙波　文治	徳丸	○田中　義和	徳丸	田中　義和	徳丸	田中　義和	徳丸
2	弓立　忠良	徳丸	仙波　貢	徳丸	後藤　正宜	徳丸	関谷　茂夫	徳丸	八束　兼福	徳丸
3	門屋　利則	徳丸	後藤　正宜	徳丸	加納　信光	中川原	木下　貴	徳丸	山本　庫市	中川原
4	本田　吉幸	徳丸	田中　義和	徳丸	山本　庫市	中川原	八束　兼福	徳丸	本多　俊夫	中川原
5	○山本　庫市	中川原	加納　信光	中川原	○西村　博明	出作	○山本　庫市	中川原	本田　一馬	中川原
6	加藤　善一	中川原	本田　力	中川原	高市　慶久	出作	本田　智	中川原	○神野　弘良	出作
7	加藤富貴雄	中川原	高市　慶久	出作	河野　好雄	神崎	本多　俊夫	中川原	西村　博明	出作
8	山本　磯秀	中川原	西村　博明	出作	野本　勉	神崎	西村　博明	出作	水口　義一	神崎
9	○井上八十一	出作	弓達　茂夫	出作	山口　稲男	神崎	高市　慶久	出作	河野　好雄	神崎
10	西村　栄	出作	◎野本　勉	神崎	◎濟川　裕	鶴吉	水口　義一	神崎	山口　稲男	神崎
11	広田恒三郎	出作	河野　好雄	神崎	松田　茂	鶴吉	河野　好雄	神崎	○相原　隆志	鶴吉
12	神野　悦男	出作	山口　稲男	神崎	相原　隆志	鶴吉	山口　稲男	神崎	松田　茂	鶴吉
13	○徳永　秀夫	神崎	○相原　隆志	鶴吉	篠崎　繁一	横田	○相原　隆志	鶴吉	濟川　裕	鶴吉
14	水口　豊	神崎	久津那安男	鶴吉	金子　欣市	横田	松田　茂	鶴吉	日野　佳孝	横田
15	小笠原　覚	神崎	濟川　裕	鶴吉	山崎　健三	横田	常盤　卓雄	鶴吉	○田中　義一	大溝
16	水口　誓雄	神崎	篠崎　繁一	横田	栗原　進	大溝	山崎　健三	横田	◎中村　文雄	永田
17	○久津那安男	鶴吉	日野　佳孝	横田	○中村　文雄	永田	金子　欣市	横田	中村　忠夫	永田
18	町田司雨三	鶴吉	栗原　忠明	大溝	澤田　明利	永田	高市　喜慶	大溝	澤田　正輝	永田
19	村上　元良	鶴吉	高市　喜慶	大溝	中村　忠夫	永田	栗原　弘	大溝	竹田　秀明	東古泉
20	松田　茂	鶴吉	○中村　文雄	永田	稲垣　孝明	東古泉	田中　義一	大溝	稲垣　光夫	東古泉
21	松田　勝	横田	澤田　明利	永田	竹田　秀明	東古泉	◎中村　文雄	永田		
22	篠崎　清	横田	稲垣　孝明	東古泉	稲垣　光夫	東古泉	澤田　正輝	永田		
23	橋本　彰	大溝	早瀬　秋利	東古泉			中村　忠夫	永田		
24	向井　光夫	大溝	三好　節夫	東古泉			○稲垣　光夫	東古泉		
25	栗原　芳樹	大溝					稲垣　孝明	東古泉		
26	福島　荘司	永田					竹田　秀明	東古泉		
27	渡部　善弘	永田								
28	三好　春夫	東古泉								
29	萩野　彦一	東古泉								
30	豊田　忠義	東古泉								

○ 編集委員 (第1集)

『北伊予の伝承』歴代編集委員(2)

◎ 委員長　○ 副委員長　(敬称略)

	第6集編集委員(平成13年4月～15年3月)		第7集編集委員(平成15年4月～17年3月)		第8集編集委員(平成17年4月～19年3月)		第9集編集委員(平成19年4月～21年3月)		第10集編集委員(平成21年4月～23年3月)	
	氏　名	住所	氏　名	住所	氏　名	住所	氏　名	住所	氏　名	住所
1	田中　義和	徳丸	田中　孝	徳丸	田中　孝	徳丸	田中　孝	徳丸	仙波　康宏	徳丸
2	○本多　俊夫	中川原	渡部喜代隆	徳丸	渡部喜代隆	徳丸	渡部喜代隆	徳丸	八束　和秀	徳丸
3	山本　庫市	中川原	永井　嘉郎	徳丸	山本　庫市	中川原	加藤　招賞	中川原	大政　邦夫	中川原
4	加藤　修	中川原	伊藤　靖高	徳丸	本田　眞一	中川原	本田　眞一	中川原	本田　昭一	中川原
5	○神野　弘良	出作	本多　俊夫	中川原	◎水口　憲三	出作	◎水口　憲三	出作	◎水口　憲三	出作
6	神野　昌孝	出作	山本　庫市	中川原	○神野　弘良	出作	○小松ヒトミ	出作	○小松ヒトミ	出作
7	西村　博明	出作	加藤　修	中川原	○高石　勤	神崎	○高石　勤	神崎	○高石　勤	神崎
8	水口　義一	神崎	◎水口　憲三	出作	山口　稲男	神崎	野本　和伯	神崎	○野本　和伯	神崎
9	河野　好雄	神崎	○神野　弘良	出作	野本　和伯	神崎	鎌倉　啓典	神崎	鎌倉　啓典	神崎
10	山口　稲男	神崎	○山口　稲男	神崎	○相原　隆志	鶴吉	○相原　隆志	鶴吉	○大政　邦和	鶴吉
11	友澤　篤子	神崎	河野　好雄	神崎	濟川　裕	鶴吉	濟川　裕	鶴吉	濟川　裕	鶴吉
12	○相原　隆志	鶴吉	野本　和伯	神崎	伊賀上洋子	鶴吉	大政　邦和	鶴吉	加野　清一	横田
13	松田　茂	鶴吉	友澤　篤子	神崎	大政　邦和	鶴吉	松田　雅子	鶴吉	岩崎　利雄	横田
14	濟川　裕	鶴吉	○相原　隆志	鶴吉	日野　勇	横田	金子　忠行	横田	田中　安男	大溝
15	伊賀上洋子	鶴吉	松田　茂	鶴吉	○田中　義一	大溝	日野　勇	横田	淺井　勝彦	永田
16	徳本　忠司	横田	濟川　裕	鶴吉	升田　守	大溝	岩崎　利雄	横田	藤野　玉男	永田
17	松田　一正	横田	伊賀上洋子	鶴吉	二宮　静喜	永田	二宮　静喜	永田	萩野　正三	東古泉
18	◎田中　義一	大溝	日野　勇	横田	夏井　武	永田	渡部　朝明	永田	稲垣　昂規	東古泉
19	○中村　文雄	永田	松田　敏明	横田	渡部　朝明	永田	藤野　玉男	永田		
20	澤田　正輝	永田	○田中　義一	大溝	三好　健二	東古泉	○三好　安明	東古泉		
21	早瀬　辰郎	東古泉	升田　守	大溝	三好　安明	東古泉	三好　健二	東古泉		
22	早瀬　義明	東古泉	中村　晋	永田						
23			渡部　朝明	永田						
24			夏井　武	永田						
25			早瀬　辰郎	東古泉						
26			早瀬　義明	東古泉						

『北伊予の伝承』歴代編集委員 (3)

◎ 委員長　○ 副委員長　(敬称略)

	第11集編集委員 (平成23年4月～ 25年3月)		第12集編集委員 (平成25年4月～ 27年3月)		第13集編集委員 (平成27年4月～ 29年3月)		第14集編集委員 (平成29年4月～ 30年3月)	
	氏　名	住所	氏　名	住所	氏　名	住所	氏　名	住所
1	木下　春雄	徳丸	○仙波　康宏	徳丸	○仙波　康宏	徳丸	後藤　正宜	徳丸
2	田中　祥景	徳丸	藤田　常和	中川原	伊藤　芳幸	徳丸	本田　和男	徳丸
3	藤田　常和	中川原	大政　博	中川原	○小松ヒトミ	出作	弓達　武範	中川原
4	大政　博	中川原	○小松ヒトミ	出作	◎髙石　勤	神崎	加藤　朝春	中川原
5	○水口　憲三	出作	神野　尊久	出作	深沼　静良	神崎	○小松ヒトミ	出作
6	○小松ヒトミ	出作	◎髙石　勤	神崎	濟川　誠	鶴吉	◎髙石　勤	神崎
7	◎髙石　勤	神崎	池内　和男	神崎	久津那　博	鶴吉	○深沼　静良	神崎
8	池内　和男	神崎	○大政　邦和	鶴吉	松田　康徳	横田	○濟川　誠	鶴吉
9	相原　隆志	鶴吉	野垣　芳一	横田	○田中　安男	大溝	篠崎　厚夫	横田
10	○大政　邦和	鶴吉	○田中　安男	大溝	○澤田　忠夫	永田	○田中　安男	大溝
11	徳本　直之	横田	澤田　忠夫	永田	早瀬　明	東古泉	福島　正志	永田
12	○田中　安男	大溝	水口　勉	永田	竹田　頼夫	東古泉	水口　勉	永田
13	淺井　勝彦	永田	稲垣　昂規	東古泉			三好　常夫	東古泉
14	稲垣　昂規	東古泉	早瀬　明	東古泉				
15	萩野　一二	東古泉						
16								
17								
18								
19								
20								
21								
22								
23								
24								
25								
26								

『北伊予の伝承 第14集』
平成30年3月 発行

発　行　松前町東公民館
〒791-3161
愛媛県伊予郡松前町大字神崎210番地
TEL 089-984-1159

編　集　北伊予の伝承 編集委員会
編集委員長　髙石　勤

印　刷　㈱プロックス
〒791-3142
愛媛県伊予郡松前町大字上高柳383番地4
TEL 089-985-3339

『北伊予の伝承 第14集』編集委員

委員長	神崎	髙石	勤
副委員長	出作	小松	ヒトミ
副委員長	神崎	深沼	静良
副委員長	鶴吉	濟川	誠
副委員長	大溝	田中	安男
委員	徳丸	後藤	正宜
委員	徳丸	本田	和男
委員	中川原	弓達	武範
委員	中川原	加藤	朝春
委員	横田	篠﨑	厚夫
委員	永田	福島	正志
委員	永田	水口	勉
委員	東古泉	三好	常夫
（事務局）	東公民館長	北野	美由季
	主事	大西	淳博

編集委員と事務局の皆さん

VEGETABLE OIL INK
この冊子は、資源保護と環境に配慮して
大豆油インキ、再生紙で作成しています。